

博士論文（要約）

パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史
——ロマンスからロマンティック・サイエンスへ

入江哲朗

目次

| | |
|--|-----|
| 凡例 | 4 |
| 略号 | 6 |
| 序論 「消滅する媒介者」としてのパーシヴァル・ローエル..... | 8 |
| 第1章 ボストンにおける「ローエル王朝」の確立..... | 23 |
| 1 「アメリカの貴族」とはいかなる存在か | 23 |
| 2 パーシヴァルからパーシヴァルへ——アメリカにおけるローエル家の歴史..... | 25 |
| 3 フランシス・キャボット・ローエルによる産業革命..... | 30 |
| 4 ボストン・ブラーミンの文化 | 35 |
| 5 1857年の恐慌とブラーミン社会の保守化..... | 42 |
| 第2章 19世紀ハーヴァードのプロフェッショナルライゼーションと形成期のローエル | 47 |
| 1 南北戦争後の米国における大学の変貌 | 47 |
| 2 カレッジとユニテリアニズム | 52 |
| 3 チャールズ・ウィリアム・エリオットがハーヴァードの学長に就任するまで..... | 56 |
| 4 ローエルがハーヴァード・カレッジで受けた教育 | 62 |
| 5 ブラーミン社会からの脱出 | 70 |
| 第3章 ローエルが東アジアに見出したロマンス..... | 74 |
| 1 ジャパノロジストとしてのローエル | 74 |
| 2 スペンサー流文明論..... | 76 |
| 3 報聘使、『朝鮮』、甲申政変 | 80 |
| 4 『極東の魂』における視覚論 | 85 |
| 5 森有礼の暗殺と能登半島への旅..... | 90 |
| 6 『能登』における「ロマンス作家の技法」 | 97 |
| 7 御嶽山の「金鉱」と『神秘の日本』 | 103 |
| 8 チェンバレンおよびハーンが感じたローエルの変化..... | 107 |
| 第4章 ローエル天文台が19世紀アメリカ天文学史に占める位置..... | 114 |
| 1 入れ子構造のドラマ..... | 114 |
| 2 米国が天文台を得るまでの苦闘..... | 119 |
| 3 ベンジャミン・パースによるアメリカ科学の基礎固め..... | 125 |
| 4 「新しい天文学」の城としてのハーヴァード・カレッジ天文台..... | 134 |
| 5 常設化される以前のローエル天文台 | 141 |

| | |
|-------------------------------------|-----|
| 第5章 火星運河論争とローエルのロマンティック・サイエンス | 147 |
| 1 “古い、天文学者たちの派閥 | 147 |
| 2 ブラーミン社会の濃密な人間関係 | 151 |
| 3 「お上品な伝統」と「大洋感情」 | 156 |
| 4 錯覚説の台頭とスペクトルの表象的信憑性 | 164 |
| 5 プラネトロロジー三部作と火星の写真 | 171 |
| 6 “来た、見た、勝った、から『火星とその運河』へ | 177 |
| 7 火星運河説の苦境と冥王星の発見 | 185 |
| 8 ロマンティック・サイエンスとH・P・ラヴクラフト | 193 |
| | |
| 結論 ローエルのイマジナリー・ライン | 207 |
| | |
| 図版 | 215 |
| パーシヴァル・ローエル略年譜 | 223 |
| 文献表 | 227 |

凡例

「ローエル」という表記

“Lowell”の日本語表記としては、これまで「ローウェル」、「ローエル」、「ロウエル」などが用いられてきたが、本論では一貫して「ローエル」と記している。

John K. Bollard, ed., *Pronouncing Dictionary of Proper Names*, 2nd ed. (1998)によれば、国際音声記号 (IPA) による“Lowell”の音声表記は /'lo:əl/ であり、これに近い日本語表記は「ロール」か「ローエル」であろう。また、パーシヴァル・ローエルの祖先が自らの姓を“Lowle”や“Lole”などと綴っていた事実 (第1章第2節参照) を鑑みれば「ロール」がもっともふさわしいようにも思えるのだが、本論では他の文献との整合性も勘案して「ローエル」を採用した。以上の説明からも明らかなおと、 “Lowell”に「ウエ」という音が生じる余地はないため、「ローウェル」は原語の発音からかなり離れている。

引用と書誌情報

本論は引用に関して、以下の原則を採っている。

- ① 欧語文献からの引用は、既訳の存在する場合はそれも参照したうえで、引用者が試訳したものである。
- ② 引用中の強調は原文に基づく。欧語文献からの引用においては、傍点は原文中のイタリックを、**太字のゴシック体**は語ないしフレーズ全体の大文字化を再現している。草稿や書簡で使われる下線はイタリックと同様に扱った。ただし、原文中のイタリックや大文字化がすべて引用で再現されているわけではない。英語の文章に登場するラテン語のフレーズがイタリックになっている場合のように、イタリックや大文字化は強調以外の目的でも用いられるためである。
- ③ 引用中のブラケット [] による補足ないし中略は原文に基づく。
- ④ 引用中の亀甲括弧 [] による補足ないし中略は引用者が施したものである。
- ⑤ 欧語文献からの引用において、原文の構造が複雑な場合には、訳文をわかりやすくするためにしばしば原文にない2倍ダッシュ——を挿入した。他方で原文中のダッシュ (em dash) は、引用では2倍ダッシュによって再現したが、必要以上の煩雑さを避けるために再現しなかったケースもある。
- ⑥ 敗戦以前に書かれた日本語の文章を引用する際には、読みやすさを考慮して、旧字体を新字体に改めるなどの若干の表記変更を施した。原文のルビは適宜取捨選択し、現代かなづかいに統一した。

以上の原則に当てはまらない一部の例外においては、その旨を註に明記している。なお本論ではブラケットは、脚註への指示のため、またパーレン () 内にパーレンが再登場することを避けるためにも用いられている。

本論で引用ないし参照した文献の書誌情報は、当該文献が最初に登場する註に記した。ただし頻出する文献などは6-7頁に掲げた略号によって指示している (本論末尾にまとめた図版のキャプションも同様)。書誌の表記法は *The Chicago Manual of Style*, 17th ed. (2017) に則った。

人名表記

たとえばパーシヴァル・ローエルの弟のフルネームはアボット・ローレンス・ローエルである。しかし、第1章第5節でも述べるとおり、彼自身は自らの名前を「A・ローレンス・ローエル」と表記することを好み、親しい間柄の者たちが彼を呼ぶときはみな「アボット」ではなく「ローレンス」と呼んだ。このように、英語圏ではミドルネームがファーストネームとして使われることも決して珍しくない。

本論では原則として、人名は初出時のみフルネームを記し、それ以降はラストネームのみを記すか、あるいは (本人が用いた) ファーストネーム・ラストネームというかたちで表記している。第2章第5節に登場する「ウィリアム・スタージス・ビゲロー」が第3章第3節では「スタージス・ビゲロー」になっているのもこのためである。

もっとも、この原則の例外も本論には多く含まれている。イニシャルを用いるのが一般的である場合 (「ハーバート・ジョージ・ウェルズ」→「H・G・ウェルズ」)、本人がミドルネームをしばしば省略した場合 (「チャールズ・ロバート・ダーウィン」→「チャールズ・ダーウィン」)、当該人物がローエルの死後に生まれている場合 (「ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ」→「ジョン・F・ケネディ」) などが主な例外である。「エドガー・アラン・ポー」や「バジル・ホル・チェンバレン」のように、ミドルネームを省略しないほうが通りが良いと思われる場合には初出時以外でもフルネームを記した。しかし判断は決して厳密ではない。人名の日本語表記はなるべく原語の発音に忠実なものを選んだが、「クリストファー・コロンブス」のように慣例を優先させたケースもある。

生歿年と年齢

本論に登場する人物の多くには、初出時に生歿年を付記した。生歿年を示さなかったのは、当該人物がローエルの死後に生まれている場合や、当該人物に関する資料が少なく生歿年の確定が難しい場合などである。また、明治の日本ではしばしば数え年によって年齢を数えていたけれども、本論における年齢の記述はすべて満年齢での計算に基づいている。

たとえば第3章第3節に登場する宮岡恒次郎^{つねじろう}の生年月日は慶応元年11月29日であり、これは現在の暦（グレゴリオ暦）においては1866年1月15日にあたる。しかし本論では、他の多くの文献と同じく、宮岡の生年を1865年と記している。すなわち、慶応元年＝1865年という等式を原則とし、旧暦（天保暦）と新暦（グレゴリオ暦）の違いによる対応のずれは——あくまでも生歿年の表記においては——無視している。同様に、宮岡の満年齢を記す際には、毎年11月29日に1歳加齢するものとして計算している。ちなみに日本の暦が天保暦からグレゴリオ暦へ切り替わったのは明治5年の末であり、明治5年12月2日（1872年12月31日）の翌日が明治6年1月1日（1873年1月1日）となった。

米国、アメリカ、合衆国

本論においては、たとえば「世紀転換期米国」というフレーズは“the turn-of-the-century US”と英訳されることを想定しており、同様に「アメリカ思想史」は“American intellectual history”との対応を想定している。

「アメリカ」(“America”)という語は、本来はアメリカ大陸(“the continent of America”ないし“the Americas”)を指すものであり、アメリカ合衆国というひとつの国家を指すために用いることは適切ではないという意見もある。しかし、“American”という、アメリカ合衆国に関する形容詞ないし名詞(「アメリカ人」)の使用までをも避けると表現の幅が著しく狭まるため、本論では原則として、英訳した際に“American”という語をあてることが想定される場合に「アメリカ」と表記している。ただし、アメリカ合衆国という国家が誕生する以前のいわゆる13植民地を「アメリカ」と総称するなどの例外も存在する。

「合衆国海軍天文台」(“the United States Naval Observatory”)のように、固有名の原語などに登場する“the United States”には「合衆国」を対応させた。例外としては、“the Supreme Court of the United States”を慣例に即して「連邦最高裁判所」と表記したことなどがある。

略号

註に頻出する文献、アーカイヴ、コレクションなどには以下の略号を用いている。当該文献に邦訳がある場合は、「SFE, 1-2/9-10」のように表記した。これはローエルの『極東の魂』の原著 1-2 頁、邦訳 9-10 頁を指す。

- ALL A. Lawrence Lowell, *Biography of Percival Lowell* (New York: Macmillan, 1935).
- BEA Thomas Hockey et al., eds., *Biographical Encyclopedia of Astronomers*, 2nd ed. (New York: Springer, 2014).
- BET *Boston Evening Transcript*.
- Chosön Percival Lowell, *Chosön: The Land of the Morning Calm; A Sketch of Korea* (Boston: Ticknor, 1886).
- DS David Strauss, *Percival Lowell: The Culture and Science of a Boston Brahmin* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2001); 邦訳『パーシヴァル・ローエル——ボストン・ブラーミンの文化と科学』井上正男監修／大西直樹＋佐久間みかよ＋荒木純子訳、彩流社、2007年。
- ELWLP Percival Lowell, 180 Letters to Elizabeth Lowell Putnam (Mrs. William Lowell Putnam) and William Lowell Putnam, bMS Am 2078, HL.
- EMH William Lowell Putnam et al., *The Explorers of Mars Hill: More Than a Century of History at Lowell Observatory* (Flagstaff, AZ: Lowell Observatory, 2012).
- ERH Edward R. Hogan, *Of the Human Heart: A Biography of Benjamin Peirce* (Bethlehem, PA: Lehigh University Press, 2008).
- FG Ferris Greenslet, *The Lowells and Their Seven Worlds* (Boston: Houghton Mifflin, 1946).
- GEW George Ernest Webb, *Tree Rings and Telescopes: The Scientific Career of A. E. Douglass* (Tucson: University of Arizona Press, 1983).
- GHA4A Owen Gingerich, ed., *Astrophysics and Twentieth-Century Astronomy to 1950: Part A, The General History of Astronomy 4* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984).
- HAE John Lankford, ed., *History of Astronomy: An Encyclopedia* (New York: Garland, 1997).
- HL Houghton Library, Harvard University, Cambridge, MA.
- HUA Harvard University Archives, Cambridge, MA.
- J&B Bessie Zaban Jones and Lyle Gifford Boyd, *The Harvard College Observatory: The First Four Directorships, 1839-1919* (Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1971).
- JBAA *Journal of the British Astronomical Association*.
- JL John Lankford, *American Astronomy: Community, Careers, and Power, 1859-1940* (Chicago: University of Chicago Press, 1997).
- JWM *Japan Weekly Mail*.
- KSG Karl S. Guthke, *The Last Frontier: Imagining Other Worlds, from the Copernican Revolution to Modern Science Fiction*, trans. Helen Atkins (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1990).
- LOA Lowell Observatory Archives, Flagstaff, AZ.
- LOHP Lowell Observatory Historic Photographs, LOA.
- Mars Percival Lowell, *Mars* (Boston: Houghton, Mifflin, 1895).
- MC Percival Lowell, *Mars and Its Canals* (New York: Macmillan, 1906).
- MJC Michael J. Crowe, *The Extraterrestrial Life Debate, 1750-1900: The Idea of a Plurality of Worlds from Kant to Lowell* (1986; repr., Mineola, NY: Dover, 1999); 邦訳『地球外生命論争 1750-1900——カントからロウエルまでの世界の複数性をめぐる思想大全』鼓澄治＋山本啓二＋吉田修訳、全3巻、工作舎、2001年。
- Noto Percival Lowell, *Noto: An Unexplored Corner of Japan* (Boston: Houghton, Mifflin, 1891); 邦訳『NOTO——能登・人に知られぬ日本の辺境』宮崎正明訳、十月社、1991年。
- OJ Percival Lowell, *Occult Japan, or The Way of the Gods: An Esoteric Study of Japanese Personality and Possession* (Boston: Houghton, Mifflin, 1894); 邦訳『オカルト・ジャパン——外国人の見た明治の御嶽行者と憑霊文化』菅原壽清訳、岩田書院、2013年（第3章註107の補足も参照のこと）。
- PAmAc *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences*.
- PASP *Publications of the Astronomical Society of the Pacific*.

- PLC Percival Lowell Correspondence, LOA.
- PLCW1 *Percival Lowell—Collected Writings on Japan and Asia, Including Letters to Amy Lowell and Lafcadio Hearn*, ed. David Strauss, vol. 1, *Journal and Newspaper Articles + Letters* (Tokyo: Edition Synapse, 2006).
- PLLUM Percival Lowell Lectures and Unpublished Manuscripts, LOA.
- RM Robert Markley, *Dying Planet: Mars in Science and the Imagination* (Durham, NC: Duke University Press, 2005).
- SEM Samuel Eliot Morison, *Three Centuries of Harvard, 1636–1936* (1936; repr., Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1964).
- SFE Percival Lowell, *The Soul of the Far East* (Boston: Houghton, Mifflin, 1888); 邦訳『極東の魂』川西瑛子訳、公論社、1977年。
- SJD Steven J. Dick, *The Biological Universe: The Twentieth-Century Extraterrestrial Life Debate and the Limits of Science* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).
- TJLL T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880–1920*, paperback ed. (1983; repr., Chicago: University of Chicago Press, 1994); 邦訳『近代への反逆——アメリカ文化の変容 1880–1920』大矢健＋岡崎清＋小林一博訳、松柏社、2010年。
- WGH William Graves Hoyt, *Lowell and Mars* (Tucson: University of Arizona Press, 1976).
- WW H. G. Wells, *The War of the Worlds* (London: William Heinemann, 1898); 邦訳『宇宙戦争』中村融訳、創元SF文庫、2005年（序論註3の補足も参照のこと）。

序論 「消滅する媒介者」としてのパーシヴァル・ローエル

本論は、パーシヴァル・ローエル (図1) という、1855年に生まれ1916年に亡くなったアメリカ人についての伝記的研究である。ローエルとはいったい何者か。ボストンの名家に生まれた彼は、1883年の春、28歳のときにいきなり、父のビジネスを継ぐという将来を捨てて日本へ旅立った。そして、日本滞在の経験をもとに『極東の魂』(The Soul of the Far East, 1888) や『能登——人に知られぬ日本の辺境』(Noto: An Unexplored Corner of Japan, 1891) といった本を著したかと思いきや、1893年の末に米国へ帰るとすぐさま、今度はアリゾナにローエル天文台を建てるというプロジェクトに着手する。新しい天文台がもたらした成果である1895年の著書『火星』(Mars) は、天文学者としてのローエルを一躍有名にした。なぜならそこでは、火星表面に観測される何本もの直線は人工の運河の存在を示しているという説、すなわち「火星運河説」が展開されていたからである。H・G・ウェルズ(1866-1946)が『宇宙戦争』(1898)で活写した、火星인들이高度な文明を武器に地球を侵略するという物語の背景には、ローエルによって盛り上げられた火星ブームがあった。

1897年に英国の雑誌『ピアソンス』と米国の『コスモポリタン』で同時連載され、翌年に単行本化された『宇宙戦争』は、SFの黎明期を代表する小説のひとつとしてながらく読まれつづけている。1938年にオーソン・ウェルズ(1915-85)が米国で『宇宙戦争』をラジオドラマ化した際には、火星인들이襲来を本物のニュース番組ふうに見るといふ演出を施したために聴取者たちのあいだでパニックが生じたというエピソードも、いまではよく知られている。ジョージ・パル(1908-80)が製作を務めバイロン・ハスキン(1899-1984)が監督した1953年の映画『宇宙戦争』は、米国のSF映画史において重要な作品であるし、スティーヴン・スピルバーグによる2005年の再映画化は全世界で6億ドル近い興行収入をあげた[1]。3つの世紀にまたがるこうした輝かしい歴史は、しかし他方で、ローエルの——フレドリック・ジェイムソンの言葉を転用すれば——「消滅する媒介者〔vanishing mediator〕」としての役割を強調してもいる[2]。すなわち、『宇宙戦争』の材料のひとつとされているローエルの『火星』にとって、『宇宙戦争』の根強い人気は「媒介者」としての重要性を証すものであると同時に、「消滅」ぶりを劇的に際立たせるものでもある。なにしろ、現在ではローエルの名前はほとんど知られていないし、まして『火星』を実際に読んだことのある者は著しく少ないのだから。

しかし、かりにローエルが「消滅する媒介者」だったのだとして、彼はいったい何をウェルズへ媒介したのだろうか。それを確かめるためにも、まず、『宇宙戦争』の冒頭の段落——この小説のなかでもとりわけ印象的で、おそらくもっとも有名な箇所——を、長さを厭わずに引用してみよう。

19世紀の末には誰も信じなかっただろう。人間の営みは、人間よりも優れた、しかし人間と同じく限られた命しか持たない知性体〔intelligences〕によって入念かつ仔細に観察されているのだということ。そして人間は、自分たちの営みにあくせくしているあいだにも、一滴の水のなかでうごめき繁殖するはかない生物を人間が顕微鏡で調査するのとほとんど同じ緻密さでもって、調査され研究さ

1. 『宇宙戦争』のさまざまなアダプテーション(翻案)に関しては以下を参照のこと。Peter J. Beck, *The War of the Worlds: From H. G. Wells to Orson Welles, Jeff Wayne, Steven Spielberg and Beyond* (London: Bloomsbury Academic, 2016), pt. 3. スピルバーグ版『宇宙戦争』の興行収入の数値は同書の264頁に基づく。
2. 「消滅する媒介者」というフレーズは以下の論文から借りられているが、本論における用法は必ずしもジェイムソンに忠実ではない。Fredric Jameson, "The Vanishing Mediator; or, Max Weber as Storyteller," in *The Ideologies of Theory* (1988; repr., London: Verso, 2008), 309-43.

本論 9-17 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、17-34 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

れている。なお本論は「世紀転換期」という言葉をつねに、19世紀から20世紀への転換期を意味するものとして、日本へ旅立って以降のローエルの生涯（1883年から1916年まで）をカバーできるくらいゆるやかに使っている。

ところで、アメリカ思想史(American intellectual history)という日本では耳にすることの少ない学問領域は、現在の米国で大きな盛り上がりを見せている。逆に言えば、アメリカ思想史は米国においてさえまだ成長途上にある領域であり、研究の蓄積はたとえばドイツ思想史や日本思想史などと較べるとずっと薄い[31]。ゆえに、ローエルを“図、とし世紀転換期アメリカ思想史を“地、としている本論は、先行研究が著しく少ない“図、に関してはもちろんのこと、実は“地、に関しても、アメリカ思想史という領域に対して一定の貢献を果たしているはずである。じじつ私は本論を、1890年代米国論という、アメリカ思想史研究のより大きなプロジェクトの第1段階と位置づけている。このプロジェクトは当然ながら本論の範囲を越えているけれども、以下でごく図式的にはあるが略述しよう。というのも以下のスケッチが、ローエルの足跡を描くために本論が用意したキャンパスの概観としてある程度有効だろうと思われるためである[32]。

私の1890年代米国論プロジェクトにおいては、ローエル、作家フランク・ノリス（1870-1902）、哲学者ジョン・デューイ（1859-1952）の3者がいわば正反合の関係を成している。本論がこのプロジェクトの第1段階であるというのは、“正、にあたるローエルがまず本論で論じつくされるという意味である。

歴史家のジョン・ハイナムによれば、1890年代米国においては、一元論的なシステムの息苦しさ——具体的には「都市的=産業的文化のまったき退屈さ」など——への反動が、大衆文化の「アクティヴズム的」な傾向として噴出していった。たくましくて好戦的な男性の理想化、スポーツやレクリエーションの流行、野生の自然に対する関心の復活、ポピュラー音楽の高速化、因襲的な女性像からの脱却などがその例である。対して知識人たちのあいだでは、進歩への確信をまるごと捨ててしまうような「敗北主義的精神」が見られたものの、最終的には、世紀の変わり目を待たずして「大衆文化にかくも顕著であった奮闘的精神」が知識人たちのペシミズムを凌駕してしまった[33]。さしあたっては、アクティヴィズム的傾向をフランク・ノリスに代表されるアメリカ自然主義文学の担い手たちに、ペシミズム的傾向をローエルが属していたニューイングランドの上流階級に代表させておく。すなわち、かつて主流を占めていたニューイングランドの上流階級は、“正、としての地位が脅かされつつあるという不安（ないしペシミズム）を世紀転換期に抱いており、ノリスら“反、のムーヴメントが“正、の不安に追い討ちをかけ、さらには“正、に属していた者たちの一部を自らのムーヴメントへ取り込んだ——というひとまずの図式である。

同じく歴史家のトマス・L・ハスケルは、ハイナムの議論を踏まえつつ、1890年代米国論のテーゼとして

-
31. アメリカ思想史という学問領域が米国で辿った紆余曲折、およびそれを経た現在における盛り上がりは、以下の拙稿において説かれている。入江哲朗「訳者解説 アメリカ思想史の一分野としてのアメリカ哲学史」、ブルース・ククリック著／大厩諒ほか訳『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』所収、勁草書房、近刊、頁数未定。同解説でも挙げたとおり、アメリカ思想史という領域の現状にキャッチアップするうえで必読なのは以下の2冊である。Joel Isaac et al., eds., *The Worlds of American Intellectual History* (New York: Oxford University Press, 2017); Jennifer Ratner-Rosenhagen, *The Ideas That Made America: A Brief History* (New York: Oxford University Press, 2019). 前者は気鋭の研究者たちを集めて作られたアメリカ思想史の論文集であり、後者はアメリカ思想史の全体をわかりやすく簡潔に綴った入門書である。なお後者は拙訳が2020年末頃にちくま学芸文庫から刊行される予定である。
 32. 本文でこのあと3段落続く1890年代米国論のスケッチは、2019年6月22-23日に京都大学で催されたアメリカ哲学フォーラム第6回大会における私の発表「アメリカ哲学史にとって1890年代とは何か——ジョン・ハイナムとトマス・L・ハスケルの1890年代論を再評価する」に部分的に基づいている。
 33. John Higham, “The Reorientation of American Culture in the 1890’s,” in *Writing American History: Essays on Modern Scholarship* (Bloomington: Indiana University Press, 1970), 79-80, 90.

“自己信頼 (self-reliance) から相互依存性 (interdependence) へ” を新たに提起している。さきの図式を敷衍して言えば、“正”としての権勢を失いつつあった 19 世紀的な知識人たちには眼前の「都市化し産業化する社会」を学知によって説明する手立てがなく、その点は、「退屈」な「都市的 = 産業的文化」の殻を破ることに終始していた——たとえば社会ないし文化から逃れて野生の自然という理念へ向かっていった——“反”のムーヴメントも同様であった。“正”に属した知識人たちが自らの静的な社会観を更新できなかったのは、ハイアム曰く、「自律的行為」や「自己信頼」といった 19 世紀的個人主義に由来する概念を基礎としていたためである。しかし、世紀転換期に台頭しつつあったプロフェッショナルの社会学者たちが、つまり言うなれば“合”の新潮流が、眼前の動的な社会を理解するための鍵が「相互依存性」という概念にあることに気づき、高度に相互依存的な社会を説明する能力——「独立変数」の想定を許さないくらい複雑な社会において因果を同定する能力——を磨き上げていった。かくして、世紀転換期に「社会科学による文化的権勢の確立」が生じることとなったというわけである。ここには、本論第 2 章で中心的に扱われる専門職化という論点が密接に関わっている。ハスケルは、ジョン・デューイにプロフェッショナルの社会学者たちの第 1 世代——“合”の新潮流——を代表させている [34]。

ひとまず 1890 年代という転換点を境に旧世代と新世代とを分かちとして、新世代の文学者たちは旧世代の文化の「まったき退屈さ」をししば、スペイン生まれの哲学者ジョージ・サンタヤナ (1863–1952) の「お上品な伝統」(the genteel tradition) という言葉によってステイグマ化した(詳しくは本論第 5 章第 2 節で解説される)。その後(第 1 章第 4 節でも述べるように) 1941 年に、F・O・マシーセン (1902–50) の記念碑的な著書『アメリカン・ルネサンス』が現れたことで、19 世紀アメリカ文学の正典はラルフ・ウォルド・エマソン (1803–82)、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (1817–62)、ナサニエル・ホーソーン (1804–64)、ハーマン・メルヴィル (1819–91)、ウォルト・ホイットマン (1819–92) という 5 人の作品にひとまず定められた。しかしこれはあくまでも人為的なパースペクティブであって、19 世紀当時において文壇の主流を占めたのは「お上品な伝統」のほうであり、その枢要な一角をジェイムズ・ラッセル・ローエル (1819–91) ——パーシヴァルの曾祖父の異母弟の子——が占めていた。にもかかわらず、「お上品な伝統」の内実に関する研究は、「アメリカン・ルネサンス」の担い手たちに関する研究と較べて著しく少ない。この意味において、ローエルが位置づけられるべき“地”の姿は決して自明ではなく、こうした先行研究の欠乏を、19 世紀ニューイングランドの知的環境を俎上に載せる本論第 1 章および第 2 章は埋めようとしている。

とはいえ、先述の弁証法的な図式に留まっていたは、ローエルが世紀転換期アメリカ思想史という“地”に完全に埋没した存在となってしまう。ゆえに本論第 1–2 章はあくまでも、この図式を打破しようとするダイナミズムをローエルから読みとるための、そしてそれによって 1890 年代米國論を更新する道を開くための準備作業である。本論の副題「ロマンスからロマンティック・サイエンスへ」が、いま述べたダイナミズムを端的に表現している。本論のもう少し具体的な見取り図はすぐあとで描かれ、ロマンティック・サイエンスをめぐる主な議論は第 5 章で展開される。しかしそのまえにあらためて、世紀転換期アメリカ思想史を本論のキャンバスとしたことによって、すなわち本論の視野をシュトラウスによる伝記よりは大きくグートケの『最後のフロンティア』よりは小さい範囲に設定したことによってはじめて、ロマンスからロマンティック・サイエンスへというダイナミズムをめぐる十全な議論が可能となった点を強調しておこう [35]。

34. Thomas L. Haskell, *The Emergence of Professional Social Science: The American Social Science Association and the Nineteenth-Century Crisis of Authority* (1977; repr., Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2000), xx, 1, 12–13.

35. 私は、2013 年度に提出した修士論文「火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期のニューイングランド」においてもローエルの生涯は論じている。しかしここでは、副題にある「世紀転換期のニューイングランド」というフレーズから窺えるとおりに、ローエルの足跡を描くためのキャンバスとして、シュトラウスによる伝記をわ

*

本論の第1章「ボストンにおける「ローエル王朝」の確立」は、ローエルの生涯としては1872年のハーヴァードへの進学までを扱っており、より多くの紙幅がボストンを拠点とするローエル家の——すなわちパーシヴァル・ローエルの先祖たちの——歴史に割かれている。章題にある「ローエル王朝」が決して大げさな言葉遣いではないことを読者は、ローエル家の人びとの輝かしい業績の概観をとおして多少なりとも実感するだろう。特に大きく取り上げられるのは、フランシス・キャボット・ローエル(1775–1817)が米国の綿工業にもたらしたイノベーションと、ジェームズ・ラッセル・ローエルを含む「ニューイングランドの三巨頭」(the New England Triumvirate)によって築かれた文化である。前者はパーシヴァル・ローエルが引き継ぐことを拒んだ家業がどのようなものだったのかを理解するために、後者は先述の「お上品な伝統」がどこから生まれたのかを知るために重要である。

第2章「19世紀ハーヴァードのプロフェッショナルライゼーションと形成期のローエル」は、日本への旅を決断するまでのローエルの歩みのみならず、19世紀後半のハーヴァードという特異な知的環境にも光を当てている。ローエルがハーヴァードに在籍した1872年から76年までは、1869年から40年間続くこととなるチャールズ・ウィリアム・エリオット(1834–1926)の学長在任期間の初期にあたる。エリオット学長はハーヴァードの拡大および専門職化プロフェッショナルライゼーションに大きく貢献したが、ローエルの在学中はまだ改革の成果が十分に現れていなかった。しかし、第4–5章で論じられるように、ローエル天文台とハーヴァードとのあいだには著しく深い因縁があり、火星運河説を守るべくローエルが戦った相手について知るためにも、エリオット学長による改革への理解を深めることが不可欠である。

第3章「ローエルが東アジアに見出したロマンス」は、1883(明治16)年にローエルがはじめて日本を訪れてから1893(明治26)年に日本を永久に去るまでを追っている。この間の経験をもとにローエルが著した著書4冊、すなわち『朝鮮——朝の静けさの国』(Chosŏn: The Land of the Morning Calm, 1886)、『極東の魂』、『能登——人に知られぬ日本の辺境』、『神秘の日本、あるいは神々の道——日本人のパーソナリティおよび憑霊に関する秘教研究』(Occult Japan, or The Way of the Gods: An Esoteric Study of Japanese Personality and Possession, 1894)も俎上に載せられる。これら4冊はそれぞれ異なるスタイルをまとうっており、ローエルの作家としての模索が窺えて興味深いのだが、そのうち本論にとってもっとも重要なのは『能登』である。ローエルは『能登』においてロマンスというジャンルにもっとも近づき、次の『神秘の日本』では対照的な科学的スタイルを選んだ。しかし、第5章で論じられるように、1906年の著書『火星とその運河』において『能登』のスタイルが「ロマンティック・サイエンス」という新しい装いのもとに回帰することとなる。こうした帰趨を見据えつつ第3章は、ジャパノロジストとしてのローエルの模索を跡づける。

第4章「ローエル天文台が19世紀アメリカ天文学史に占める位置」は、ローエルが天文学者へ転身してから『火星』を出版するまでを扱い、またやはりより多くの紙幅が、19世紀アメリカ天文学史の瞥見にあてられている。この瞥見が重要なのは、第一に、1820年代の米国にまともな天文台と呼べる施設はひとつもなかったという事実が伝えるとおり、19世紀におけるアメリカ天文学の発展がかなり遅く始まり、しかしそのぶ

ずかに超える大きさものしか用意できていなかった。わずかに超えたことで達成された私のオリジナルな議論は主に、ローエルによるオリヴァー・ウェンデル・ホームズの追悼文、『能登』の第11章「穴水」における記述、ローエルがH・P・ラヴクラフトに与えた影響などへの独自の着眼から生まれた。この着眼には一定の意義があったと私は信じているし、いま挙げた主題は本論も、修士論文と同じ方向に沿って、しかし修士論文よりもずっと詳しく論じている。逆に言えば、修士論文で十全な議論を展開できなかった主な理由は、それをおこなうに足るほどの思想的な見取り図を提示できていなかったことにある。したがって、シュトラウスによる伝記の限界として本文で述べた事柄の多くは、私の修士論文にも当てはまる。

ん急速に進行したからである。そして第二に、発展が急速だっただけにいっそう、19世紀後半に生じた“古い天文学、(天体力学)と“新しい天文学、(天体物理学)とのあいだの溝が深まり、この事情が図らずも天文学者ローエルの台頭を支えることとなったからである。“古い天文学、のなかで主導的な役割を果たしたハーヴァードの教授ベンジャミン・パース(1809-80)について、第4章は詳しく論じている。それはアメリカ天文学史への彼の貢献のゆえばかりでなく、彼からローエルが天体力学を学んだという巡りあわせがゆくゆくは、第5章で触れる1930年の冥王星発見というローエル天文台の偉業に繋がるからでもある。

第5章「火星運河論争とローエルのロマンティック・サイエンス」は、『火星』を出版したあとのローエルが、火星運河説に懐疑的な主流派天文学者たちとのあいだで繰り広げた論争を俎上に載せている。また、1897年にローエルが陥った神経衰弱(neurasthenia)も第5章において重要な論点である。世紀転換期ニューイングランドにおける神経衰弱の流行を論じることによって、火星運河論争へのローエルの関わりからプロフェッショナルリズムに対するアンビヴァレンスを読みとることが可能になる。この視角は、火星運河論争のみを眺めても発見できず、ローエルの生涯のなかに火星運河論争を位置づけることによってはじめて手にしうるものである。そうした分析のすえに第5章は、『能登』から『火星』を経て『火星とその運河』へというローエルの変遷を、ロマンスから科学を経てロマンティック・サイエンスへというふうに定式化する。「ロマンティック・サイエンス」というフレーズはロマン主義文学に関する先行研究において用いられたことのあるフレーズだが、第5章ではこれをあえて、SFの誕生に対するローエルの寄与を理解するための鍵概念として再定義している。言い換えれば、ロマンティック・サイエンスというピースを置くことによって、ローエルとH・G・ウェルズとを結ぶ道筋がよりはっきりと見えてくるはずである。加えて、ローエルの火星研究とウェルズとのあいだから取り出されたものと似たパターンが、ローエルの冥王星研究とH・P・ラヴクラフト(1890-1937)とのあいだにも見出されることも論じられる。

最後に結論「ローエルのイマジナリー・ライン」において、序論(および第1章)で直面した複数の問いへの回答を提出しつつ、本論の議論をまとめる。

本論の基礎となる史料調査は、ローエル天文台アーカイヴ、ハーヴァード大学のホートン図書館、ハーヴァード大学アーカイヴなどにおいておこなわれた。たとえばローエル天文台アーカイヴ所蔵のパーシヴァル・ローエル書簡は特に重要な史料であるけれども、レターボックス15箱分の量があるため、当然ながら数少ない先行研究はその一部しかカバーできていない。ゆえに本論のための調査によっていくつもの新発見を得ることができたが、それでもなお、多くの未開拓領域が残っている。また、先行研究の担い手たちと較べて日本の史料によりアクセスしやすい位置に私がいたことが幸いし、ジャパノロジストとしてのローエルを論じた第3章には新事実がもっとも多く含まれることとなった。ほんの一例を挙げるなら、ローエルを乗せた船が横浜に入港した日付および横浜から出港した日付を、本論は明治時代に横浜で発行されていた英字新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』(*Japan Weekly Mail*)の出入国者欄のサーヴェイによってすべて確定している[36]。これらの情報のほとんどは本論がはじめて明らかにしたものである。

本論においてローエルのすべての業績が同等に論じられているわけではない。特に、本論が「プラネトロジー三部作」と呼ぶローエルの著書3冊、すなわち『太陽系』(*The Solar System*, 1903)と『生命の棲処としての火星』(*Mars as the Abode of Life*, 1908)と『諸世界の進化』(*The Evolution of Worlds*, 1909)は、第5章で触れてはいるものの扱いをかなり小さくせざるをえなかった(その理由も第5章第4節に記されている)。本論の軸はあくまでも、序論で挙げた問いを解くことを目指して、ローエルの生涯をアメリカ思想史という背景に照らしつつ辿ることにある。しかしこの軸が揺らがない範囲のなかで最大限網羅的であろうと努めた結果本論は、

36. 『ジャパン・ウィークリー・メール』は、ファクシミリ版が2005-15年にエディション・シナプスより刊行されている。私の同紙のサーヴェイもこのファクシミリ版に基づいている。

情報の量や密度においてもシュトラウスによる伝記に引けをとらないものに——すなわち、世界でもっとも詳しいローエル研究のひとつに——なった。

第1章 ボストンにおける“ローエル王朝”の確立

1 “アメリカの貴族、とはいかなる存在か

パーシヴァル・ローエルは、1855年3月13日、ボストンの名家に生まれた——彼の生涯を要約しようとすれば、1行目にはほぼ必ず、これに類する表現が現れることになる。しかしそもそも、民主主義を建国の理念に掲げているはずの米国において、「ボストンの名家」というフレーズはいかなる意味あいを持っているのだろうか。この問いに答えるうえで参考になるのは、クリーヴランド・エイモリーという作家が1947年に著して人気を博した『プロパー・ボストニアンズ』という本である。たとえばその第1章には、以下の詩がボストンの社会を諷刺した一種の狂歌として引かれている。

ここは古き良きボストン
豆と鱈の豊かな里
ここではローエル家がキャボット家に話しかけ
そしてキャボット家は神にのみ話しかける [1]

エイモリーによれば、1910年にボストンの眼科医ジョン・コリンズ・ボシディ（1860-1928）が披露したことをきっかけに世に広まったこの狂歌は、もともとは、1905年に催されたハーヴァードの卒業生たちの晩餐会において、「西部の男」（“Western man”）と称する匿名の人物がトーストに焼きつけた詩に由来するものであるという [2]。詩的に優れているとはいいがたいにせよ、ここからは少なくとも、農業（「豆」）と漁業（「鱈」）を営む人びと→ローエル家→キャボット家→神というかたちで段階的に上昇してゆくボストンのヒエラルヒーを、西部の荒野で民主主義を実践している^{フロンティアズマン} ^{わら} 辺境開拓者が嗤うという構図が読みとれる。

もちろん、これはいくつもの偽善を内包した嗤いである。1905年の同窓会に供されたトーストのうえでこの詩を読んだ元ハーヴァード生たちのなかに、先住民に多大な犠牲を強いた米国の西部開拓ははたしてボストンのヒエラルヒーを嗤いうるほどに民主主義的なものだったのかという根本的な疑問を抱いた者は、おそらくほとんどいなかっただろう。この詩が彼らの談笑を盛り上げたとすれば、そこで語られていたのもっぱら、ボストンの上流階級におけるローエル家とキャボット家とのあいだの微妙な関係をめぐる議論だったのだろう。実際のところは、ボストン近郊で豆を栽培し鱈を獲っている人びとを起点に考えれば、ローエル家までの距離とキャボット家までの距離との違いは誤差と呼ぶに十分なほどに小さなものでしかなく、しかしそうであるがゆえにこそ、そのわずかな差異をめぐって、ハーヴァードを卒業したエリートたちはトーストを食しながら喧々と意見を交えていたのだろう。

こんなふうに想像される同窓会の光景が、1905年のボストンに本当に現れていたのか否かは、ここではそれほど重要な問題ではない。いま注意を払うべきなのは、さきの狂歌が人口に膾炙したという事実のほうであり、すなわち、ローエル家とキャボット家のどちらがより偉いかという（外部の者にとってはほとんどどうでもいい）内輪の話題に終始している貴族的なエリートたちの姿が、ボストンの上流階級を諷刺的に捉えたイメージとして広く共有されたという事実である。『プロパー・ボストニアンズ』の冒頭で紹介されている次のエピソードは、ボストンのカリカチュアとしてはトースト上の詩よりもずっとわかりやすい。

1. Cleveland Amory, *The Proper Bostonians* (New York: E. P. Dutton, 1947), 14.

2. *Ibid.*, 13-14.

20年代のあの輝かしき日々、シカゴのとある銀行が、ボストンの投資会社であるリー・ヒギンソン社へ相談を持ちかけた。現在採用を検討中のあるボストンの青年についてよく知りたいので、推薦状を書いてはもらえないだろうか、と。リー・ヒギンソン社には、その青年に関して言えることはあまりなかった。結局こう書かれることとなった。彼の父はキャボット家の者で、彼の母はローエル家の生まれです。彼の父方の系譜には、ソルトンストール家やアプトン家やピーボディ家など、ボストンの^{ファースト・ファミリーズ}第一級の家柄の血筋が見事に織り込まれています。したがって、いっさいのためらいなく推薦させていただく次第です。

数日後、シカゴから簡素な礼状が届いた。その文面は、リー・ヒギンソン社の労をねぎらいつつも、青年に関して提供されたものは残念ながら銀行の求めるものではなかったことを告げていた。「私どもは、〇〇氏を品種改良のために用いようなどとは考えておりません」。^[3]

もっとも、『プロパー・ポストニアンズ』は決して、こうしたエピソードを並べたててボストンの上流階級を嗤うことを目的に書かれた本ではない。クリーヴランド・エイモリーがこの本を著したのは、彼が「ファースト・ファミリーズ」と呼ぶボストンの名家の数々が、“アメリカの貴族、としてのイメージの背後で実際にはどのような歴史を歩んできたのかを、いくばくかの皮肉を交えながら描き出すためであった。より正確には、皮肉というよりもむしろ、ユーモラスな自己批判がこの本の基調を成していると言うべきだろう。なぜなら、著者が属するエイモリー家もまた、ボストンのファースト・ファミリーズの一角を占める名家にほかならないからである。

*

自らもその一員であるはずの“アメリカの貴族、に対する自己批判は、実のところ、パーシヴァル・ローエルの生涯に取り憑いていたテーマのひとつでもあった。後半生の彼が、アリゾナという辺境に自らの拠点を築き、結局その地で生涯を終えたことを鑑みるならば、彼の自己批判は、自らを西部の男^{ウェスタン・マン}へ変貌させようとするほどにまでラディカルなものだったと言えるかもしれない。あるいは、爵位という制度を持たない米国においては“アメリカの貴族、は決して本物の貴族たりえない以上、生まれながらにそうしたレッテルを貼られた者たちは誰も、自己批判的な意識に多少なりとも苛まれたのかもしれない。いずれにせよ、そうした過程を辿るためにもまず、本章において以下の問いに取り組みなくてはならない。ボストンのファースト・ファミリーズはそもそもいかにして“アメリカの貴族、となったのか。そのなかでローエル家が占めていた地位とはいかなるものだったのか。そうした地位と、パーシヴァル・ローエルの遍歴とのあいだには、いったいどのような関係があるのか。

さきほど『プロパー・ポストニアンズ』は決して、こうしたエピソードを並べたててボストンの上流階級を嗤うことを目的に書かれた本ではない」と記したが、しかし『プロパー・ポストニアンズ』に多くのエピソードが含まれていることもまた事実である。19世紀ボストンの上流階級に関する歴史的な語りは、“エピソード的な郷愁、とでも言うべきものをしばしば基調として採用してきた。その最たる例が、米国のみならず日本でも石川欣一の訳によって広く読まれた、批評家ヴァン・ウィック・ブルックス (1886-1963) の筆になるアメリカ文学史「作る者と見出す者」(“Makers and Finders”) シリーズのうちの2冊、『花ひらくニューイングランド』(1936) および『小春日和のニューイングランド』(1940) である [4]。ボストンの上流階級のう

3. Ibid., 11.

4. Van Wyck Brooks, *The Flowering of New England* (New York: E. P. Dutton, 1936); 邦訳『花ひらくニュー・イングラ

ち特にローエル家に注目した歴史書としては、フェリス・グリーンズレット (1875-1959) の『ローエル家と彼らの7つの世界』(1946) とニーナ・サンコヴィッチの『マサチューセッツのローエル家』(2017) がある [5]。ローエル家の歴史を主題的に論じる本章がこれら 2 冊から受けた裨益はたいへん大きいのだが、これらもやはり“エピソード的な郷愁、を基調としており、とりわけ後者は、数々のエピソードを小説的な描写にまで成長させているため、読み物としてはおもしろいものの学術的な研究に用いる場合には注意が必要である。

もちろん、こうした“エピソード的な郷愁、から離れた学術的な視点から 19 世紀ボストンの上流階級を分析した優れた研究も存在する。例としては、ベティ・G・ファレル『エリート・ファミリーズ』(1993) や川島浩平『都市コミュニティと階級・エスニシティ』(2002) などが挙げられる [6]。本論としては、こうした蓄積に立脚しつつ、しかし同時に、19 世紀ボストンの上流階級をめぐる“エピソード的な郷愁、が——どれほど事実に即しているかは別にして——先述したローエル自身の自己批判的な意識と不可分に結びついているという事情にも注意を払わなくてはならない。したがって本章はまず第 2 節で、アメリカのローエル家がパーシヴァル・ローエル誕生までに辿った歴史を、興味深いエピソードを適度に交えながら略述する。なぜなら、“エピソード的な郷愁、を喚起するこの輝かしいファミリー・ヒストリーが、のちのローエルの自己批判的な意識にとっての背景となるからである。また、序論で「思想史上のさまざまな、しかも重要な局面」に「ローエル家の人びと」が「顔を覗かせている」と予告したとおり、本章第 2 節で言及されるローエルたちのうちの何人かは本論をとおしてくりかえし登場することとなる。なお、アメリカにおけるローエル家の系譜略図を図 4 として掲げてあるため、あわせて参照されたい。

続いて第 3 節で、ローエル家のなかでも特にフランシス・キャボット・ローエルに注目し、彼が米国の綿工業にもたらしたイノベーションについて概説する。これは 19 世紀におけるローエル家の繁栄を支えた経済的基盤を理解するうえで重要である。第 4 節はジェイムズ・ラッセル・ローエルを含む「ニューイングランドの三巨頭」によって築かれた文化を瞥見し、とりわけ三巨頭のいまひとりであるオリヴァー・ウェンデル・ホームズ (1809-94) に焦点を据える。なぜなら第一に、ボストンの上流階級のアイデンティティを表現する語にして本論のキーワードのひとつでもある「ブラーミン」(Brahmin) はまさしく彼によって普及させられたからであり、第二に、1894 年の彼の死後にローエルが書いた追悼文が、本論にとって重要なテキストだからである。最後に第 5 節で、1857 年の経済恐慌から 1861-65 年の南北戦争までの国内変動がニューイングランドの上流階級に及ぼした影響が論じられるが、同じ主題は次章にも引き継がれている。

2 パーシヴァルからパーシヴァルへ——アメリカにおけるローエル家の歴史

ローエル家の系譜を“新世界、の地に開いた人物は、私たちの主人公と名前を同じくしている。1639 年にジョナサンという名の船に乗ってイングランドを発ち、大西洋を渡り、ニューイングランドへと降り立ったパーシヴァル・ローエル (Percival Lowle, 1571-1664) は、後世からは「老パーシヴァル」(Old Percival) と呼びならわされている。メイフラワー号の到着の 19 年後にあたる 1639 年は、彼が 68 歳になる年でもある。その

ンド』石川欣一訳、ダヴィッド社、1953 年。Van Wyck Brooks, *New England: Indian Summer* (New York: E. P. Dutton, 1940); 邦訳『小春日和のニュー・イングランド』石川欣一訳、ダヴィッド社、1953 年。

5. 前者は「略号」の FG である。後者の書誌情報は以下のとおり。Nina Sankovitch, *The Lowells of Massachusetts: An American Family* (New York: St. Martin's, 2017).

6. Betty G. Farrell, *Elite Families: Class and Power in Nineteenth-Century Boston* (Albany: State University of New York Press, 1993); 川島浩平『都市コミュニティと階級・エスニシティ——ボストン・バックベイ地区の形成と変容、1850-1940』、御茶の水書房、2002 年。

本論 26–45 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、43–82 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

とのちに見なされる彼が、南北戦争後のハーヴァードにもたらした数々の改革は、まさしく劇的なものであった。

*

序論で私は「ボストンの名家に生まれた彼は、1883年の春、28歳のときにいきなり、父のビジネスを継ぐという将来を捨てて日本へ旅立った」と記したが、この一文に含まれる「ボストンの名家」と「父のビジネス」というふたつのフレーズの詳しい分析が本章において為されたことであった。まさしく本章が扱ったローエル家およびブラーミン社会の伝統から、ローエルは1883年に脱出することになるのだが、それらが決してそのまま捨て去られたわけではないことは第4節で引いたホームズ博士の追悼文からも窺えるだろう。この点には第5章（および結論）で立ち戻る。また、本章第2節に登場した反逆児ジョン・ローエルがハーヴァード・カレッジ天文台の設立において重要な役割を果たしていることが第4章で明らかにされるだろうし、反逆児ジョンの息子にしてパーシヴァルの祖父であるジョン・エイモリー・ローエルは、チャールズ・ウィリアム・エリオットによるハーヴァードの改革を論じる次章に何度も登場することとなるだろう。

第2章 19世紀ハーヴァードのプロフェッショナルライゼーションと形成期のローエル

1 南北戦争後の米国における大学の変貌

「全く大学は「城」であった」と、批評家の江藤淳は1962年のプリンストン大学について記している。「つまり、それは、カフカの小説に出て来るあの不思議な「城」に似ていた」。ロックフェラー財団の支援によって米国へ渡った29歳の江藤は、当初はプリンストン大学の客員研究員として、のちには日本文学の授業を担当する客員講師として、1962年から64年までの2年間にニュージャージー州プリンストンで暮らし、そのときの経験をもとに『アメリカと私』(1965)という本を著した。さきに引いたのはそのなかの一節であり、続く箇所では江藤は「城」の姿をこう表現している。

ゴシックの多い建物を散在させた緑の豊かなキャンパスは、私のアパートから歩いてわずか五分のところに存在し、そこには三千人余りの学生と千人余りの大学院生、それに研究職員を含めれば千三百人足らずの教職員がいて、朝の七時四十分から深夜の十二時にいたるまで、毎日忙しく何かをしている。しかし、私には、その何がどうつながっているのかが、どうしてもわからないのである。それだけではなく、そのつながりの内容をなしているらしい複雑かつ微妙な大学の階層秩序の端に、どうしても自分を結びつけられないのである。[1]

ハーヴァードと同じくいわゆる「アイヴィー・リーグ」のひとつに数えられる米国屈指の名門大学が、1746年の創立以来の長い歴史をとおして築き上げた威容と、かくも大規模な組織が、全貌がまったく窺えない官僚的な機構によって日々運営されていることの不気味さとをひとりの異邦人としての視点から描写した——そんな一節であるようにこの引用はいっけん見える。しかし実際には、たとえば江藤の出身校である慶應義塾大学の場合、『アメリカと私』が出版された1965年の学部生の数は23,500人強、大学院生は800人強、教職員は2,600人弱と、全体の規模においては江藤が挙げる数字をはるかに上回っている[2]。したがって、プリンストン大学に身を置いた江藤が感じたカフカ的な不安が、米国の大学ならではの巨大さに由来しているとは必ずしも言えない。そもそも、大学という機関が「つながり」の見えにくい諸部分が織りなす階層秩序によって統べられているという感覚、あるいは自分が所属する大学のことであっても他の学部で日々何がおこなわれているのかはほとんどわからないという感覚は、わざわざアイヴィー・リーグの例を持ち出さずとも、複数の学部から成る大学に通った経験があれば誰しも共有できるものではないのか。

こうした問いを経ると、もしかしたら、さきの引用の印象は一転して、ほとんどの大学に当てはまる常識をおおげさに述べただけの箇所であるように思えてくるかもしれない。しかしもちろん、この印象もまた誤っている。まずなにより、そのような「常識」は、米国においては19世紀末までは決して支配的なものではなかった。とりわけプリンストンは、実のところ、「複雑かつ微妙な大学の階層秩序」が縦割りの組織を生み出しつつある趨勢に対してかつてははっきりと抗っていたはずであった。

たとえば、1868年から88年までカレッジ・オヴ・ニュージャージー——プリンストン大学の前身——の

1. 江藤淳『アメリカと私』、講談社文芸文庫、2007年、63頁。

2. 『慶應義塾百年史』、慶應義塾、1958-68年、下巻767-71頁。数字は1965年3月31日時点のものであり、本文に挙げた学生数には通信教育課程の学生は含まれていない。

本論 48–49 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、86–90 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

強力な巨人は、人種問題という傷口から鮮血を滴らせながら、その精神と肉体との、あるいは分離しようとする力と集中しようとする力との、ダイナミックな劇を生きていた。[10]

この「発見」は、「私の米国に対する視線に、はじめて焦点ができた」という「昂奮」を江藤にもたらした。彼はすぐさま、「フィッツジェラルドもほうり出して」、批評家のエドモンド・ウィルソン (1895-1972) が同年に上梓したばかりの『愛国の血糊』(Patriotic Gore) という、南北戦争期の文学の研究書を「耽読しはじめ」る。「私は、ウィルソンの犀利な筆によって描き出された南北戦争という米国史の裂け目から、この国の奥深くにはいっていきけるような充実感を感じて、身震いした」[11]。その「裂け目」のなかには、いったい何があったのか。

この問いに駆られて『アメリカと私』を読みすすめても、明確な答えを得ることはできない。かわりに読者が見つけるのは、江藤の視野の中心がやがて目の前の“アメリカ、から自らの内なる“日本、へ移ってゆくという、奇妙なねじれである。そこそが『アメリカと私』の興味深い点なのだが、ともあれ、そもそもさきの問いはあまりに巨大なものではあり、それに正面から取り組むには、江藤にせよ私にせよ、別の一書を著さなくてはならないはずである。そのことを承知しつつ、本章では、ローエルの生涯に関わる範囲において「米国史の裂け目」へのアプローチをも試みることにしよう。たしかに、北部のブルジョワ家庭で生まれ育った白人であるローエルに、江藤の言う「適者生存の法則」の苛酷さに対する十分な理解があったわけではなく、社会進化論(第3章第2節参照)の影響を強く受けた彼の思想も決して平等主義的とは言えなかった。この点は次章で確認されるだろう。しかし他方で、天文学者へ転身したあとのローエルが辿った軌跡が、「強力な求心的意志」に抗する勝ち目のない戦いという様相を徐々に帯びだしたこともまた事実である。その戦いはまさしく、「分離しようとする力と集中しようとする力との、ダイナミックな劇」の一場面を成していた。こちらの点は第4-5章の主題となる。

*

南北戦争直後の米国、すなわち歴史家が「再建の時代」(the Reconstruction era) と呼ぶ時期の米国においては、ひとつの国家を支える強固な基盤を再構築しようとする力が複数の水準で働いていた。言い換えれば、この時期の米国は政治、経済、軍事、教育、文化などさまざまな領域で統合(consolidation)のプロセスを進行させつつあった。ボストン・ブラーミンを代表する一家の御曹司という出自を考えれば、ローエルは統合へと向かう流れの先頭に立っていてもおかしくはなかった。にもかかわらず彼はなぜ、いかにして、そこからはずれていったのか。そして、青年期のローエルが成長するかたわらにおいて、のちに彼が相手どることになる「求心的意志」はいったいどのような布陣を固めつつあったのか。本章ではこれらの問いに取り組む。

南北戦争後の米国政治は、共和党と民主党とのあいだで結ばれた政治的妥協によって連邦政府(すなわち北部)主導の南部再建に終止符が打たれた1877年にひとつの転換点を迎えた。ゆえにこの年はしばしば「再建の時代」の終端とされ、また、20世紀初めまで続く「革新主義の時代」(the Progressive Era)の始端とされることもある(なお教科書的なアメリカ史の時代区分はこれらふたつのあいだに「金ぴか時代」[the Gilded Age]を挿んでいる)。このことが、前者についての研究として決定的に重要なエリック・フォナー『再建——アメリカの未完の革命 1863-1877』(1988)と、後者についての研究として定評があるロバート・H・ウィービ『秩序を求めて 1877-1920』(1967)という二著のタイトルから窺えるだろう[12]。もともと、マサチューセッツ

10. 江藤『アメリカと私』、75-76頁。

11. 同前、76-77頁。

12. Eric Foner, *Reconstruction: America's Unfinished Revolution, 1863-1877* (1988; repr., New York: Harper Perennial,

州ケンブリッジに建つハーヴァードが主な舞台となる本章においては、南北戦争後の錯綜した政治過程よりもむしろ、南北戦争が北部知識人たちにもたらした思想史上のインパクトが大きく取り上げられる。この論点を正面から扱った代表的研究としては、江藤が挙げていたウィルソン『愛国の血糊』のほかに、ジョージ・M・フレデリクソン『内なる南北戦争』（1965）やルイ・メナンド『メタフィジカル・クラブ』（2001）などがある [13]。

総じて言えば、上記のもろもろの研究から、さきほど私が記した「1869年から1909年まで40年にもわたる任期をとおしてエリオットがおこなったのは、ハーヴァードの規模を拡大し、営みを専門職化^{プロフェッショナルライズ}し、組織を近代化することであった」という一文が同時期のアメリカ思想史の基調を表現してもいることが確かめられるだろう。すなわち、キーワードは「プロフェッショナルライゼーション」であり、それをもっとも象徴する人物がチャールズ・ウィリアム・エリオットだというわけである [14]。本章の論述もおおむねこの線に沿っているが、しかし本章が主に扱うのはむしろ、エリオット主導のプロフェッショナルライゼーションが本格化する直前までの時期である。そうした時期にローエルがハーヴァードに通っていた点に注意を払わなければ、のちの彼がプロフェッショナルの天文学者たちと戦うに至るまでのいきさつを十分に理解できないというのが本章の主張である。また、エリオット学長時代の初期までが視野として設定されることによって、彼の学長就任以前にもハーヴァードが大きく変化していたことや、就任当時のエリオットの言説から改革方針のゆらぎが読みとれることが強調されるだろう。

「のちの彼がプロフェッショナルの天文学者たち戦うに至る」といま述べたが、第5章で論じるように、この戦いの相手にはハーヴァードの天文学者たちも含まれている。すなわち、本章でローエルのハーヴァード在学時の学長として登場するエリオットは、第5章で火星運河論争における敵の「城」の主として再登場するわけである。あるいは、序論で述べたとおりローエルを“囟”とし世紀転換期アメリカ思想史を“地”としている本論において、“地”の側を誰かひとりに代表させるとすればエリオットが選ばれることになるだろう。1909年にエリオット学長が退任したあと新学長に就任したのがローエルの弟のローレンス・ローエルであるという事実を踏まえれば、ローエルとエリオットとの因縁はより味わい深いものとなるだろう。ともあれ、以上の次第により本章は、ローエルの形成期（formative years）のみならずエリオットのキャリアの初期にも光を当てる。

2014); Robert H. Wiebe, *The Search for Order, 1877–1920* (New York: Hill and Wang, 1967).

13. Edmund Wilson, *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War* (1962; repr., New York: W. W. Norton, 1994); 邦訳『愛国の血糊——南北戦争の記録とアメリカの精神』中村紘一訳、研究社、1998年；George M. Fredrickson, *The Inner Civil War: Northern Intellectuals and the Crisis of the Union* (1965; repr., Urbana: University of Illinois Press, 1993); Louis Menand, *The Metaphysical Club: A Story of Ideas in America* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2001); 邦訳『メタフィジカル・クラブ——米国100年の精神史』野口良平＋那須耕介＋石井素子訳、みすず書房、2011年。以下は、南北戦争の思想的ないし文化史的インパクトという論点を扱った研究を幅広く紹介する2006年のサーヴェイである。Leslie Butler, “Reconstructions in Intellectual and Cultural Life,” in *Reconstructions: New Perspectives on the Postbellum United States*, ed. Thomas J. Brown (New York: Oxford University Press, 2006), 172–205.
14. プロフェッショナルライゼーションは本章の中心的な論点であるため引きつづき扱われるが、議論の土台として私が多くを負っているのは、本節で挙げたもろもろの文献に加えて、序論で参照したHaskell, *Professional Social Science*の第1–2章である。また以下は、19世紀をとおしてハーヴァードで専門職化がどの程度進行したのかを計量的に検証した貴重な論文である。Robert A. McCaughey, “The Transformation of American Academic Life: Harvard University, 1821–1892,” *Perspectives in American History* 8 (1974): 239–332.

本論 52-65 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、91-119 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

ロマンスが読みとられるだろう。そして第5章で読者は、ローエルの「開拓者の精神」が1894年にあるトラブルをもたらし、チャールズ・ウィリアム・エリオットを激怒させたことを知るだろう。

*

ところで、学長就任演説冒頭の「言語か、哲学か、数学か、科学か」という問いに対してエリオットは「我々はこれらすべてを、しかも最高水準のものを手にするでしょう」と答えていたが、この宣言は少なくとも19世紀のあいだは成就しなかった。このことを確かめるために、また19世紀ハーヴァードのプロフェッショナルリゼーションに関する議論を補強するために、1893年度の1年間にハーヴァードの大学院に在籍した木村駿吉しゅんきち (1866-1938) に少し光を当ててみよう。ちなみに木村はのちに、三六式無線電信機の開発によって日露戦争中の日本海海戦における連合艦隊の勝利に貢献することとなる [58]。

木村が在籍したハーヴァード大学大学院 (the Graduate School of Harvard University) は、エリオットの学長就任時には存在していなかった。本章第2節で、1850年のハーヴァードには4つのプロフェッショナル・スクールがあったと記したが、それは具体的にはハーヴァード・メディカル・スクール、ハーヴァード・セオロジカル・スクール、ハーヴァード・ロー・スクール、ローレンス・サイエンティフィック・スクールの4つである。このうちローレンス・サイエンティフィック・スクールが授与したのは理学学士 (BS) の学位までであり、したがって、学士レベル以上の教育を受けたいと望む者に提供しうる選択肢を、1860年代までのハーヴァードは神学、法律、医学の3分野以外にはほとんど持たなかった。かろうじて用意していたのは、“resident graduate”という、学士号を授与されたあとも授業への出席や図書館の利用などを——少額の学費と引き換えに——許される身分であり、この身分に3年間留まった者はほとんど誰でも修士号を得られた [59]。これが必ずしもハーヴァードの特殊事情ではなかったことは、19世紀前半の米国における“profession” (専門職) という語の用法に関して教育史家のフレドリック・ルドルフが記した以下の一節からも確かめられる。「かつては専門職という言葉を、ある程度正式 [formal] な勉強および指導が必要とされる職業のために取っておく傾向が存在していた。かくして専門職は、神学、法律、医学の3つしかないことになり、あるいは4つ目として軍隊があった。その他すべて職業は本質的に下位のものだと、つまり「実地で [on the job]」学べるたぐいのものだとされていた」 [60]。

エリオット学長時代においてハーヴァードの大学院教育の整備にもっとも尽力したのは、数学者のジェイムズ・ミルズ・パース (1834-1906) である。エリオットのハーヴァード・カレッジにおける同窓生であり、ベンジャミン・パースの長男であり、また哲学者チャールズ・サンダース・パースの兄でもあるジェイムズ・ミルズ・パースは、1872年からハーヴァードの大学院教育の事実上の責任者を務め、1890年に正式に大学院 (the Graduate School) が設置されるとその長 (dean) を1895年まで務めた [61]。彼が学長宛てにしたためた

58. 木村を主題とする近年の研究としてはたとえば以下がある。益田すみ子「木村駿吉の四元数理解と「万国四元法協会」の提案」、『科学史研究』第3期第57巻第287号、日本科学史学会、2018年10月、171-75頁；岡本拓司『科学と社会——戦前期日本における国家・学問・戦争の諸相』、サイエンス社、2014年、第6-9章。私は特に後者から裨益を得ており、木村の経歴に関する本文中の記述も後者に多くを負っている。本文でのちに引く木村の書簡も、岡本『科学と社会』の71-78頁における議論をとおして私はその存在および重要性を知った。

59. Charles H. Haskins, “The Graduate School of Arts and Sciences, 1872-1929,” in *The Development of Harvard University: Since the Inauguration of President Eliot, 1869-1929*, ed. Samuel Eliot Morison (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1930), 452; Hawkins, *Between Harvard and America*, 7.

60. Frederick Rudolph, *The American College and University: A History* (1962; repr., Athens: University of Georgia Press, 1990), 339; 邦訳『アメリカ大学史』阿部美哉+阿部温子訳、玉川大学出版部、2003年、316頁。

61. ジェイムズ・ミルズ・パースの経歴については以下を参照のこと。J. K. Whittemore, “James Mills Peirce,” *Science*

1894年度の報告を見ると、同年度の大学院生の総数が272人と記され、専門分野ごとの人数が「セム系諸言語および歴史学」から「アメリカ考古学および人類学」まで12項目にわたって挙げられている [62]。神学、法律、医学の3分野にのみ「専門職」という語を用いる制度上の根拠はもはや完全に失われており、まずはこの意味において、エリオットおよびパースはハーヴァードをプロフェッショナルライズしたと言える。

では当時の大学院教育の実態はどのようなものだったのか。帝国大学理科大学で大学院まで物理学を学ぶかたわらで第一高等中学校の教授も務め、その後立教学校の教頭の職を経て1893(明治26)年8月に米国へ渡った木村駿吉は、帝国大学理科大学教授の田中館愛橘(1856-1952)に宛てた1894(明治27)年10月8日付の書簡のなかでハーヴァードの大学院での留生活の様子を伝えている。はじめに木村は、自らが受けたジェイムズ・ミルズ・パースの数学の授業を声高に賞讃し、しかしそのあとでこう続けている。

ハーバードに数学物理ノ教授三人あり。然し己れの教へ居る事而も教場で述る事に付ての質問より外は相手に成て呉ぬには弱り候。大学院の定めには四科目を取との事なれ共馬鹿々々敷候間二科目に止め残り二科目は小生自身好む所を自宅で勉強する故之をフハカルチーの認可として呉れと申候 処其如くなり但報告せよとの事なりし。[63]

かくして木村は、独学の成果を報告として提出しようとしたのだが、「数学物理ノ教授三人」でたらい回しにされた挙げ句、「三人の中で最低の丙」が読んでくれることとなった [64]。しかし「丙」によるコメントは、木村からすればレベルの低いものばかりで、木村は呆れてばかりいる。そんなやりとりが綴られたすえに、以下の結論めいた一節が記される。

此様な先生を相手にし候が此チの馬鹿、今が今まで左程とは思はざりし。向が此で返答した積りならんとは笑止千万なり。後に小生の論文を見たれば第一頁に何でもなきラグレンジヤンデリヴェエチーヴ[ラグランジュ微分]の処に記か大きく付てあつたから三人の内が読んで少しくはハードリーデングなりしと見へ候。ソーならソーと正直に申せバー時間位講義して遣た者を。知らざるを知らずとせよ之れ知なりと東洋の確言を西洋人も知らぬと見へる。然し此様な事を仕た者たから三人に悪まれた。三人がフアカルターに小生の事を報告して曰く「ロングライン オフ リーデングス」をなし居れりと。此く申すとハーバード大学を取所なき様に聞へしなれども此れは小生か証人で事実と申上候(自名投票か正しければ自箇証人も宜しからん)。然しハーバードは大層良き学校にてカレッジは米国一ならんと信じ候。心理学哲学などではミュンステルベルヒ、ジエームス、ロイス等が居て中々盛なものなり。[65]

木村の生涯を論じた科学史家の岡本拓司はこの書簡に関して、「駿吉の手紙はやや軽い調子のものであり、また田中館や長岡など当時の東京大学・帝国大学卒の物理学者は一般に極めて意気軒昂であるため、若干は

24, no. 602 (July 13, 1906): 40-48; W. E. Byerly, "James Mills Peirce," *Harvard Graduates' Magazine* 14, no. 56 (June 1906): 573-77; ERH, 321-23.

62. James Mills Peirce, "The Graduate School," in *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College, 1894-95* (Cambridge, MA: Harvard University, 1896), 101-2.

63. 木村駿吉「在米理學士木村駿吉氏ノ書狀」、『學士會月報』第82号、學士會、1894年12月、23頁。なお同史料の引用に際しては、読みやすさを考慮して、原文にはない句点を適宜挿入した(読点はすべて原文のまま)。

64. 同前、24頁。

65. 同前、25頁。

割り引いて考える必要もあるが、駿吉のハーヴァードの物理学者たちに対する評価は、概ね実感に基づくものであったと考えてよいように思われる」とコメントしている [66]。あるいは、本論の序論でも参照したトマス・ハスケルの研究はプロフェッショナルライゼーションを「探究者たちのコミュニティが確立され、他の集団や社会全般から区別され、メンバー間のコミュニケーションが——メンバーたちの組織化や規律訓練〔disciplining〕、および公衆の眼に映る彼らの信頼性の向上と並行して——増してゆく」プロセスと要約しており [67]、この規定を借りつつ木村の評価をまとめなおすなら、19世紀末ハーヴァードのプロフェッショナルライゼーションは必ずしも、「メンバー間のコミュニケーション」によって「探究者たち」を国際的に連携させ、かつ評価基準を十分に共有させる段階にまでは至っていなかったということになる。かりにそこまで達していれば、木村駿吉が「数学物理ノ教授三人」のレヴェルの低さに失望することもなかっただろう。しかし他方で、大学院という、「探究者たちのコミュニティ」に奉仕する研究のための制度的基盤をひとつおり整備した19世紀末のハーヴァードは、ハスケルが挙げる3つの段階のうちの少なくとも最初までは進んだと言えるだろう。

つまるところ、かりに19世紀末に世界大学ランキングのようなものが存在したとして、その上位を占めるのはおしなべてヨーロッパの大学であり、1869年のエリオット学長就任を契機に本格的なプロフェッショナルライゼーションが始まったハーヴァード大学と、木村や田中の母校である1877(明治10)年設立の東京大学(木村が在学中の1886[明治19]年に帝国大学へ改組される)とは、順位において雲泥の差と言えるほど離れていたわけでもないと言えそうである。エリオットの改革によって生まれ変わったハーヴァード大学の諸学科は、世界的に見ればいまだに水準はまちまちであり一概に語ることはできず、ゆえにこそ、本論第4章においてハーヴァードにおける天文学の発展を辿っておくことが、火星運河論争におけるローエルの相手を見さだめるうえで不可欠の作業なのである。なお、こうした1890年代の状況からの飛躍的な底上げがなされ、私たちがなじんでいる最高峰の大学というイメージに実態が近づくのは、20世紀に入ってから、特にカーネギー・コーポレーション(1911年設立)やロックフェラー財団(1913年設立)などの慈善団体が大学の研究に巨額の資金を提供するようになって以降のことである [68]。

*

もちろん、19世紀末のハーヴァードにおいても、いくつかの学科はすでにヨーロッパにまで名声を轟かせつつあった。そのうちの筆頭は、木村が正しく指摘しているとおり哲学科であり(後述するように当時は心理学もその管轄下にあった)、この学科の隆盛にもっとも貢献したのはウィリアム・ジェイムズである。

そもそも、エリオット学長の就任当初のハーヴァードは、哲学に関していかなる状況にあったのか。それを知るために1872年度の授業案内をふたたび覗くと、選択科目の「哲学」のカテゴリーに並ぶ6つの授業のうちの、「心理学」、「古代哲学」、「デカルト派およびカント派」、「近代ドイツ哲学」の4つをフランシス・ボ

66. 岡本『科学と社会』、73頁。

67. Haskell, *Professional Social Science*, 19.

68. 米国のトップクラスの大学が20世紀前半に研究大学として急速に成長してゆく過程に関しては以下を参照のこと。Roger L. Geiger, *To Advance Knowledge: The Growth of American Research Universities, 1900–1940* (New York: Oxford University Press, 1986)。とりわけ物理学の領域では、米国の大学は慈善団体の資金を有効に活用したばかりでなく、量子論の登場というパラダイム・シフトにうまく適応し、また1920年代後半から増えはじめた亡命科学者を積極的に受け入れたこともあって、1930年代初めにはヨーロッパに伍する水準に達することができた。ところがこの流れのなかで、ハーヴァードの物理学科だけはいささか特殊な道筋を辿っていたことが、以下の論文において詳述されている。岡本拓司「ハーヴァード大学物理学科における理論物理学の創始——実験家の役割を中心に」、『科学技術史』第1号、日本科学技術史学会、1997年12月、1–44頁。

本論 69-72 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、121-29 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

ローレンス・ローエルの前半生には、兄のような派手さはまったく伴われていなかった。彼は1877年にハーヴァード・カレッジを卒業するとそのままハーヴァード・ロー・スクールへ進学し、1880年にマサチューセッツ州の弁護士資格を獲得し、同年にフランシス・キャボット・ローエル（3世）と共同で法律事務所を立ち上げた。1889年に『政府論』（*Essays on Government*）という本を著したことで自らの適性をより深く理解した彼は、1897年にハーヴァードから声をかけられたのを機に法律事務所を辞め、40歳の非常勤講師として母校の教壇に立ちはじめた。そして、早くも3年後には政治学の教授（Professor of the Science of Government）への昇進を果たした [83]。

1908年に、74歳のエリオット学長がまもなく40年に達するその任期に幕を引く旨を表明すると、すでに前年に教授を退任していたウィリアム・ジェイムズは弟ヘンリーへの手紙に「エリオット学長の辞任は僕たちの大事件だ」と書き、こう続けた。「お気に入り」の〔次期学長〕候補はローレンス・ローエルだね。彼の考えに僕はなじみつつあるよ」 [84]。ハーヴァード・コーポレーションは1909年1月13日にローレンスを次期学長として指名し、監督会もただちにそれを承認した [85]。こうして、ローエル家の歴史にまたひとつ輝かしい誉れが加えられた。同年6月30日、エリオット学長の正式な辞任の翌月に催されたハーヴァードの卒業式に名誉教授として出席したジェイムズは、その日の日記に次のように記した。「卒業式！ ローエルはローマ皇帝のように見え、ローマ皇帝のように語った——エリオットを打ち破ったのだ」 [86]。

*

本章は、江藤淳は1962年のプリンストン大学に感じとった威容をプロフェッショナルライゼーションの産物と見なしたうえで、ハーヴァードへ焦点を移し、1869年から1909年までの40年間学長を務めたチャールズ・ウィリアム・エリオットに光を当てながら19世紀のハーヴァード史を概観した。それによってまず確認されたのは、ローエルがハーヴァードに通っていた1872年から76年まではまだエリオット主導のプロフェッショナルライゼーションが本格化していなかった時期だったということである。ゆえに、人文科学と自然科学双方をほぼ等しく学んだ形成期のローエルには、ホームズ博士流のジェネラリズムがある程度受け継がれていると考えられる。

また、ローエルがジャパノロジストから天文学者へ転身する1894年の時点において、ハーヴァードのプロフェッショナルライゼーションの達成度あるいは学科ごとにまちまちであったことも本章は明らかにした。事例として本章が目にしたのはハーヴァードにおける物理学および哲学であり、この検証を踏まえたうえで、ハーヴァードにおける天文学という本論にとってより重要な対象が第4章で俎上に載せられる。

加えて本章は、1876年にハーヴァードを卒業してから1883年に日本へ旅立つまでのローエルの足跡も追った。父の世代とのあいだの心理的距離という論点が、ローエル個人にとってのみならず世紀転換期ニューイングランドの思想史という水準においても重要であることを本章は示唆したが、この論点は第5章においてあらためて扱われる。

83. Henry Aaron Yeomans, *Abbott Lawrence Lowell, 1856–1943* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1948), 34–44, 52–60.

84. William James to Henry James, November 15, 1908, in *The Correspondence of William James*, ed. Ignas K. Skrupskelis and Elizabeth M. Berkeley (Charlottesville: University Press of Virginia, 1992–2004), 3:370–71.

85. SEM, 439–40. このときのコーポレーションのフェローのひとはフランシス・キャボット・ローエル（3世）であった (SEM, 159n1).

86. William James, Diary for June 30, 1909, William James Papers, MS Am 1092.9 (4558), HL.

第3章 ローエルが東アジアに見出したロマンス

1 ジャパノロジストとしてのローエル

ジャパノロジスト（日本研究者）としてのパーシヴァル・ローエルが語られる際には、これまでしばしば、1889年にラフカディオ・ハーン（1850-1904）が文通仲間の眼科医ジョージ・ミルブリー・グールド（1848-1922）へ送った以下の手紙が引きあいに出されてきた。日本へ行くことをハーンが決意したきっかけのひとつを記録するものとして、グールドがのちに著したハーンの伝記において公表された手紙である。

ゲーリイ！ 僕は驚くべき本を見つけた。本のなかの本だ！ とてつもない、華麗なる、神のような本だ。すべての行を読まなくちゃだめだ。君にも送るから送り先を教えてください。頼むから一語だって読み飛ばさないでくれ。『極東の魂』という本だけど、タイトルは中身に較べれば慎ましいよ。[1]

ローエルが1888年に出版した『極東の魂』はたしかに、彼の著書のなかでもっとも多く読者を獲得したもののひとつである。この本は彼の生前に6回版を重ね、また1911年にはドイツ語訳も刊行されている[2]。しかしながら、読者の誰もが「神のような本だ」と思ったわけではなかった。というより現在の読者にとっては、あのラフカディオ・ハーンが『極東の魂』のいったいどの部分にそれほど感動したのかいさか理解しがたいはずである。たとえば日米関係の研究者であるジョゼフ・M・ヘニングは、ローエルの日本論を次のように評している。「日本文化を理解するための枠組みに関して言えば、19世紀の日本について書いたアメリカ人のなかで、もっとも手が込んでいてもっとも恩着せがましい枠組みをこしらえたのがパーシヴァル・ローエルであった。詩人のエイミー・ローエルを妹に持つ彼は、人種、文明、進歩に対するアメリカ人の考えを抽出し、それをスペンサーの総合哲学〔Synthetic Philosophy〕と共鳴させたうえで、自らの観察としてまとめあげたのである」[3]。この「スペンサー」はもちろん英国の思想家ハーバート・スペンサー（1820-1903）を指している。

対してハーンの場合は、『極東の魂』を読んだ1889年は39歳になる年でもあり（ローエルより5歳年上）、このときにはニューオーリンズでの10年間のジャーナリスト生活とカリブ海のマルティニーク島での2年間の滞在をすでに終えていて、フィラデルフィアで『仏領西インド諸島での2年間』（1890）などの刊行を準備しているところであった。そして早くも翌年4月には彼は日本へ渡っている。その後は、松江の島根県尋常中学校および尋常師範学校の英語教師を務め、松江の士族の血を引く小泉セツ（1868-1932）と1891年から同棲しはじめ（1896年に正式に結婚）、熊本の第五高等中学校への転任などを経て1896年に帝国大学の英文学

-
1. Lafcadio Hearn to George M. Gould, 1889, quoted in George M. Gould, *Concerning Lafcadio Hearn* (Philadelphia: George W. Jacobs, 1908), 116. ハーンを日本へ赴かせたトリガーとしては、『極東の魂』に加えて、1884年にニューオーリンズで開催された産業綿花100周年万国博覧会（the World's Industrial and Cotton Centennial Exposition）も重要である。『ハーバーズ・ウィークリー』という雑誌へ寄せる記事の取材のために万博を訪れたハーンは、日本からの展示品の数々に大いに魅了されたようである（小玉晃一「ニューオーリンズ万国博覧会」、平川祐弘監修『小泉八雲事典』所収、恒文社、2000年、462-64頁）。
 2. DS, 293n1. 同書の註は邦訳には含まれていない。
 3. Joseph M. Henning, *Outposts of Civilization: Race, Religion, and the Formative Years of American-Japanese Relations* (New York: New York University Press, 2000), 27; 邦訳『アメリカ文化の日本経験——人種・宗教・文明と形成期日米関係』空井護訳、みすず書房、2005年、36頁。

講師となり、また同年に日本へ帰化して「小泉八雲」を名乗るようになった。『知られざる日本の面影』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 1894) を皮切りに次々と出版された彼の日本に関する著書は、繊細な感性をもって明治の日本を観察しその文化の機微を見事に掬い上げた成果として、当時の米国においても『極東の魂』を上回る人気を博した [4]。したがって、かりにローエルが『極東の魂』以後もそれに類する大仰な文明論を書きつづけたとすれば、彼の名前は間違いなく、後続のライヴァルであるハーンの影に隠れて人びとの記憶から消し去られていただろう。

しかしながらローエルは、のちにジャパノロジストから天文学者へというドラマティックな転身を果たすばかりでなく、東アジアに関する著書においても同じテーマをくりかえすことは決してなかった。『朝鮮——朝の静けさの国』、『極東の魂』、『能登——人に知られぬ日本の辺境』、『神秘の日本、あるいは神々の道——日本人のパーソナリティおよび憑霊に関する秘教研究』——本章で俎上に載せるこの4冊が、『火星』に先立つローエルの著書のすべてであるけれども、ここからも明らかなおおりの、そもそも彼のデビュー作は『極東の魂』ではなく、1876年の日朝修好条規によって開国した朝鮮（いわゆる「李氏朝鮮」）での滞在の記録であった。1883年に来日したローエルがいったいなぜ朝鮮へ赴くことになったのかは、第3節で明らかになるだろう。また、天文学者へ転身しつつあるさなかにローエルが著した『神秘の日本』が、その怪しげなタイトルとは裏腹に、学術的な研究として独自の価値を備えていることも第7-8節で説明されるだろう。もっとも、結論から言えば、著書ごとに異なるテーマに取り組んだローエルの努力は必ずしも、「恩着せがましい」枠組みをとおして東アジアの文化を眺めているという根本的な問題から彼を脱却させたわけではなかった。この問題は1893年に日本を永久に去るまで彼につきまといつづけたのであり、しかし少なくとも3冊目の著書『能登』からはそれを越えようとするモメントが読みとれるため、本章の論述においても『能登』がもっとも重視されることになる。

*

明治の日本を訪れたアメリカ人たちに関しては数多くの研究がなされており、総合的かつ読みやすい文献としてはクリストファー・ベンフィー『グレート・ウェイヴ』[5] や、すでに参照したヘニング『アメリカ文化の日本経験』などがある。当然ながらジャパノロジストとしてのローエルも先行研究にたびたび登場するけれども、同時代の他のジャパノロジストたちと較べると扱いが小さいのはやはり、ヘニングの言うようにローエルの東アジア論は「スペンサーの総合哲学」の二番煎じでしかないと広く思われているためであろう。先述のとおり本論はこの判断を必ずしも否定しないし、シュトラウスによるローエル伝も、「スペンサーアンとしてのローエル」と題する第2部においてハーバート・スペンサーのローエルへの影響の論証に4章を割いている。ローエルにとってスペンサーはかくも重要な思想家であるから、本章第2節においてはまず、19世紀後半の米国におけるスペンサー思想の流行が解説される。

しかし本章が『朝鮮』から『神秘の日本』までのローエルの著書4冊を取り上げるうえでは、それらで説かれる思想の内容よりもむしろ文章のスタイルにいつそう注目する。たとえば3冊目の『能登』は、ローエルが1889(明治22)年5月におこなった能登半島への旅の記録であるからそれ自体の思想的内容は乏しい。けれども、ローエルがロマンスというジャンルに意識的に取り組んでいる点において、また“見たもの、と見たかったもの、とのあいだの亀裂という——後半生のローエルに取り憑きつづけることとなる——論点に焦点化した一節を含んでいる点において、『能登』は「ロマンスからロマンティック・サイエンスへ」とい

4. DS, 114, 131/151, 168. ラフカディオ・ハーンに関する伝記的事実についてはたとえば以下を参照のこと。板東浩司『詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝』、英潮社、1998年。

5. 書誌情報は第2章註81に掲げてある。

う本論の図式の起点に位置づけられるべききわめて重要な著作であると私は考えている。ゆえに本章第 5-6 節では、『能登』の読解とロマンスというジャンルをめぐる議論とが接続されている。

文章のスタイルという点で言えば、ローエルは『能登』でロマンスの側に振れたあと次著『神秘の日本』で一気に科学の側へ針を戻しており、このスタイル上の振幅はローエルの思想的遍歴を辿るうえで決して見逃しえない。ローエルは日本滞在中に、イングランド人のバジル・ホール・チェンバレン (1850-1935) と親しく交流していたのだが、興味深いことにチェンバレンはラフカディオ・ハーンとの文通のなかで、いま述べたロマンスから科学へというローエルの変化を報告し、かつそれに対するチェンバレン自身の困惑を表明している。これは本論にとってたいへん貴重な手がかりであるから、本章第 8 節であらためて取り上げよう。

なお、いましがた述べたように「明治の日本を訪れたアメリカ人たちに関しては数多くの研究がなされてきたにもかかわらず、日本におけるローエルの足跡に関しては未知の部分が意外なほど多くこれまで残されつづけてきたというのが、本章を著す際に私が感じた率直な驚きであった。シュトラウスによる伝記は、序論に記したとおりローエルの生涯を時系列順にではなく主題ごとに綴っており、日本滞在中のローエルに関する記述は随所に散らばっていてかつ分量も比較的少ない。したがってそれらの記述を寄せ集めても穴だらけの年表にしかならない。他方で、これも序論に記したとおり、宮崎正明『知られざるジャパノロジスト』は日本滞在中のローエルに関する記述がもっとも手厚く、私はそこから——また宮崎による『能登』の邦訳に付された訳註や解説からも——さまざまな裨益を得た。とはいえ『知られざるジャパノロジスト』はあくまでも新書であり、そこからローエル・ローエルによる伝記に基づいている部分を差し引くと、日本におけるローエルの足跡に関する情報はさほど多くは残らない。

こうした現状を踏まえて本章は、ローエルが 1883 年に来日してから 1893 年に日本を永久に去るまでの足跡を時系列順に、かつ可能なかぎり網羅的に記している。私が史料調査などによって明らかにし、本章なるべく多く盛り込んだ情報は、明治の日本を訪れたアメリカ人たちに関する今後の研究に多少なりとも寄与するだろうと私は信じている。

2 スпенサー流文明論

ジョゼフ・ヘニングによるローエル批判において言及されていた「総合哲学」とは、『社会静学』(1851) や『心理学原理』(1855) などの著書によって頭角を現しつつあったスペンサーが 1858 年に構想した計画のタイトルである。2 年後に出まわった広告では、「総合哲学体系」(“A System of Synthetic Philosophy”) の名のもとに全 10 巻の著書の刊行が予告されていた [6]。そしてスペンサーは実際に、40 年近くかけて、『第一原理』(1862)、『生物学原理』全 2 巻 (1864-67)、改訂版の『心理学原理』全 2 巻 (1870-72)、『社会学原理』全 3 巻 (1877-96)、『倫理学原理』全 2 巻 (1892-93) を上梓している。かくも広範な体系を築き上げたにもかかわらず、現在においてはスペンサーの「総合哲学」が顧みられることは少ない。彼の思想はしばしば、英語では “Social Darwinism”、日本語では「社会進化論」というラベルによってひとくくりにされている。

ダーウィニズムと進化論は決して同じものではない。なぜなら、生物が進化するという説自体は、チャールズ・ダーウィン (1809-82) が 1859 年に『種の起源』を出版する以前にも、たとえばフランスのナチュラリスト——あえて訳せば「博物学者」——であるジャン＝バティスト・ラマルク (1744-1829) によって唱えられていたからである。スペンサーの「総合哲学」の構想もまた『種の起源』の刊行に先んじており、ゆえに彼を「ダーウィニスト」と呼ぶのが適切か否かに関しては研究者のあいだで意見が分かれている。幸い、「社会

6. John Offer, “Herbert Spencer—a General Introduction,” in *Herbert Spencer: Critical Assessments*, ed. John Offer (London: Routledge, 2000), 1:xxii.

本論 77-111 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、136-201 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

たころには彼はもっと人間的でした。いまや彼は硬化し、ひとつの機械と化しています——打ち明けますが、これは私の神経を逆撫でする機械です。[…]自分がローエルについてこんなふうを考えるようになるなどということは、数年前の私には思いもよらないことでした。しかし、間違いなく我々はふたりとも変化したのです。彼はあらゆることへの確信をいっそう強め、私はたいていのことには確信を持たなくなってきました。彼がますます方法〔manner〕を重んじている一方で、私はますます方法を軽く見ており、とりわけあの方法は嫌悪するようになりました。[134]

チェンバレンはまだ知らないはずだが、「3つか4つ」しかないと言ったローエルの「ある一般的な観念」には、まもなく世界の複数性（序論参照）が加わることになる。あるいはもしかしたら、このときにはすでに加わっていたのかもしれない。というのも、第2節で示唆したようにローエルは日本へ発つまえからジョン・フィスクの『宇宙哲学概論』などによって地球外生命というアイデアになじんでいたということもありうるし、次章に述べるとおりそれ以外にも複数の可能性が考えられるからである。しかしそれにしても、ローエル流の科学の「方法」には、科学者ではないチェンバレンにも指摘できるほど明瞭な問題が孕まれているというのに、トランスの研究という未開拓の分野ならいざ知らず、天文学という、諸科学のなかでもっとも古いとも言われる分野にいきなり参入したところで、ローエルは誰からも相手にされないのではないか——この推論が妥当ではない理由のひとつは、天文学という科学が同じ時期にこうむっていた変動を見逃していることにある。これについても次章で詳しく論じられる。

本章では解ききれなかった問いは、『能登』の前後でローエルが文学から科学へ舵を切った——あるいはモードを変化させた——のはいったいなぜかである。次章以降の議論は、彼のモードの変化が同時代の思想史的な文脈にある程度沿っていたことを明らかにするだろう。また本論の結論において、彼の変化はチェンバレンが言い立てるほど決定的なものではなかったことも強調されるだろう。しかしながら、1893年のローエルが、自らの変化によってチェンバレンとの関係が冷えつつあることをどう捉えていたのかは、残念ながら史料を欠いているためほとんどわからない。はっきりしているのは、この年の11月24日に英国船オーシャンニックに乗って横浜を発った彼はその後決して日本を訪れなかったということであり、翌年に『神秘の日本』を完成させたのちには彼はもう日本についての本を書かなかったということである [135]。

*

本章は、ローエルが1883年に来日してから1893年に日本を永久に去るまでの足跡を辿りつつ、その間の経験をもとに彼が著した『朝鮮』、『極東の魂』、『能登』、『神秘の日本』の4冊を俎上に載せた。第2節で解説したハーバート・スペンサーの思想は、『極東の魂』および『神秘の日本』で展開される東アジア文明論に顕著な影響を及ぼしており、特に前者は「もっとも恩着せがましい枠組みをこしらえ」ているという（第1節

134. Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn, August 5, 1893, in Koizumi, *Letters*, 32–34. この箇所の邦訳は『ラフカディオ・ハーン著作集』の第15巻98–100頁にある。

135. “Latest Shipping,” *JWM*, 4th ser., 20, no. 22 (November 25, 1893): 633. もっとも、天文学者へ転身したあとのローエルが日本への関心を完全に失ったわけではない。たとえば1908年4月には、ローエルのプロデュースによって、訪米中の神職が火渡りおよび刃渡りの神事を披露するというイヴェントがボストンで催されており、以下の報道によるとおよそ200人の観客が集まったという。“Tried by Fire and Sword: Japanese Priest Performs Shinto Miracles,” *BET*, April 28, 1908. ここでは神職の名前は“Dr. Tomoya Suga”と記されているが、私の調査は残念ながらこの人物の素姓を確かめるまでに至らなかった。彼は「一方では我々の風習〔our ways〕を学ぶために、他方では彼自身の信仰が備える諸要素の伝道を促進するためにこの国を訪れてい」とローエルが語ったと記事は伝えられている。このイヴェントに関しては以下も参照のこと。ALL, 147–48; DS, 150/188.

で引いた)ヘニングの批判を免れる余地がもつとも少ない。にもかかわらず、おそらくもっぱら『極東の魂』が後世の研究者たちに読まれた——売り上げに基づくなら同書をローエルの代表作と見なすのは妥当な判断である——ために、ヘニングのものと同様のネガティブなイメージにローエルを押し込める傾向が生まれたのだろう。しかしながら、枠組みにおいては『極東の魂』と同じくらいスペンサー的な『神秘の日本』が、異常心理学や心霊研究の興隆という同時代の別の文脈のなかで一定の地歩を占めており、宗教人類学の観点においていまなお貴重でありうることは第7-8節で確認したとおりである。

また、ローエルの思想的経歴全体を踏まえるならば、第5-6節で論じたように『能登』がきわめて重要である。身も蓋もなく言えば、ローエルが1889年5月におこなった能登半島への旅は“わくわくしながら穴水村まで行って見たものの期待したほど珍しいものはそこにはなかった、とまとめられる。そして、そんな経験を『能登』という特異な旅行記に仕立てるにあたってローエルは以下の3つの戦術を採ったと——特に②は一部推測に基づくため断定はできないものの——ひとまず結論づけられる。すなわち、①ロマンスというジャンルに則りながら文章を開始し、②旅行中に撮った数々の写真をあえて掲載しないことで能登に対する読者のロマンティックな想像力を喚起し、③穴水においてローエル自身のロマンティックな想像力が破れるという転調を補色残像への言及という科学的なスタイルによって演出する、という3つである。

『能登』を重視した論述をとおして、本章は2種類のゆらぎを日本滞在時のローエルに見出すことができた。ひとつは文学(より狭くはロマンス)か科学かというローエルのキャリア選択上のゆらぎであり、もうひとつは、自分がいま見ているものは眼が捉えたものなのかそれとも精神が生み出したものなのかという、視覚の信頼性にかかわるゆらぎである。すでに示唆したとおり、これらのゆらぎは晩年までローエルにつきまといつづけることにもなるのだが、そうした模索の産物のなかでもっとも重要なのが1906年のローエルの著書『火星とその運河』であることが、第5章において論じられるだろう。

第4章 ローエル天文台が19世紀アメリカ天文学史に占める位置

1 入れ子構造のドラマ

パーシヴァル・ローエルの天文学への興味は、10代のころから抱かれていたものであった。弟のローレンスが伝えるところによると、ティーンエイジャーのローエルはすでに自分の、口径2.25インチ（約5.7センチメートル）の望遠鏡を持っていて、ブルックラインの家の平屋根からよく天体観測をしていたという。また、第2章で述べたとおり、ハーヴァードで彼に数学と天文学を教えたベンジャミン・パースも、それらの分野におけるローエルの水際立った才能を認めていた。日本へ発つまえの1881年にはローエルは、主にハーヴァードとマサチューセッツ工科大学(MIT)の関係者から成る数学物理クラブ(the Mathematical and Physical Club)、通称「MPクラブ」の創設にも携わった[1]。ちなみにこのクラブの初代会長を務めたのはベンジャミン・パースの長男のジェイムズ・ミルズ・パースであり[2]、彼の教え子の木村駿吉もこのクラブで発表していたことが第2章第4節で参照した書簡からわかる。「ハーヴァードとボストンテクノロジーの先生達MPクラブを作。蓋し数物の事なり。[...]一度小生が同会に於て日本地震取調の事を述べ」[3]。

ともあれ、こうした素地があったにせよ、足かけ10年の日本滞在を終えた直後の1894年に、39歳のローエルが、アリゾナ準州(Arizona Territory)という当時はまだ州(State)にもなっていなかった開拓地——州への昇格は1912年2月——へ赴いて天文台を建設することになろうとは、周囲の誰も予想だにしていなかった。もちろんローエル自身は、能登へ旅立ったときとは違って、火星観測という新しいプロジェクトに乗り出すうえではあらかじめ風向きを読んでいたのであり、決して「ふとした思いつき」だけで方針転換を決断したわけではなかった。実のところ、彼が観測を始めたときには、火星はすでに国際的な論争の的となっていたのである。

火星をめぐる世紀転換期の論争、すなわち火星運河論争に関する研究としては、マイケル・J・クロウ『地球外生命論争1750–1900』(1986)の第10章とステイヴン・J・ディック『生物学的宇宙』(1996)の59–105頁がもっとも重要である。また、この論争へのローエルのコミットメントについては、ウィリアム・グレイヴズ・ホイト『ローエルと火星』(1976)がまるごと1冊を割いて論じている[4]。これらの文献の著者たちが担った文献および史料の網羅的な調査がもしなかったら、本論の第4–5章はまったく別物になっていただろう。とはいえ、ローエルが天文学者へ転身してから『火星』を出版するまでの時期を扱う本章は、より多くの紙幅を19世紀アメリカ天文学史の瞥見に割いており、火星運河論争への本格的な論及は次章に回されている。その理由は少しあとで述べるとして、まずは、ローエル以前に火星運河説を唱えた人びとのことを上記の文献に依拠しながらまとめておこう。

火星運河論争の発端は、ミラノのブレラ天文台の台長を務めるジョヴァンニ・ヴィルジニオ・スキアパレリ(1835–1910)が1878年に発表した長大な論文にあった。そこに添えられた、前年の観測に基づいて作成されたいくつもの火星のドローイングには、広範囲にわたるカナリのネットワークがはっきりと描かれていた[5]。「カナリ」、すなわちイタリア語の“canale”(“canali”はその複数形)とは、第一には「水路」を意味す

1. ALL, 5–6, 61; DS, 30/52.

2. Whittemore, “James Mills Peirce,” 47–48.

3. 木村「在米理學士木村駿吉氏ノ書狀」、28頁。

4. ここに挙げた3冊はそれぞれ「略号」のMJC、SJD、WGHである。

5. スキアパレリの論文の書誌情報は以下のとおり。G. V. Schiaparelli, “Osservazioni astronomiche e fisiche sull’asse di rotazione e sulla topografia del pianeta Marte,” *Atti della Reale Accademia dei Lincei*, 3rd ser., 2 (May

本論 115–17 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、205–11 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

者たちのコミュニティの内部で、同じ時期にもうひとつの、分離と集中のせめぎあいを展開されていたという入れ子構造に存している。この内側のせめぎあいが、本章で解説する“古い天文学、(天体力学)”と“新しい天文学、(天体物理学)”との対立である。ここにおいて緊張関係にあったふたつのサブコミュニティの領袖と呼べる存在は、さきのリストの最後に挙げたふたり、すなわちサイモン・ニューカムとジョージ・エラリー・ヘイルだったのだが、彼らはローエルと対立する点においては一致していたわけである。

ニューカムとヘイルは、それぞれいかなるサブコミュニティを代表していたのか。彼らはなぜ対立していたのか。そして、内部に緊張を孕んだ主流派天文学者たちのコミュニティにローエルが立ち向かったとき、対立の構図はどのように変化したのか。というよりそもそも、「城」のような威容を誇る世界各地の天文台に対して、アマチュアにすぎないローエルが(まがりなりにも)勝負を仕掛けられたのはいったいなぜなのか。こうした問いをただちに呼び起こすほどに複雑で興味深いドラマは、当然ながら、一朝一夕に生じたものではありえない。したがって私たちは、ドラマの内実を解き明かすためにも、まずは少し時間を遡って、19世紀前半の米国における天文学の状況を確認することから始める必要がある。

*

かくして、本章の次節から第4章前半までにおいて19世紀アメリカ天文学史が瞥見される。もちろん網羅的な概観ではなく、以後の議論との兼ねあいにより、ハーヴァード・カレッジ天文台、ベンジャミン・パース、“新しい天文学、”の3つに焦点が据えられている。前二者を主題的に扱った先行研究は少ないが、それぞれ、ベシー・ゼイバン・ジョーンズ+ライル・ギフォード・ボイド『ハーヴァード・カレッジ天文台』(1971)とエドワード・R・ホーガン『オヴ・ザ・ヒューマン・ハート』(2008)という、定番とも言うべき研究書が1冊ずつ存在する[15]。対して、“新しい天文学、”すなわち天体物理学の興隆は、天文学史における最重要のトピックのひとつであり、たとえば小暮智一『現代天文学史』(2015)はまさしくそれを主題としている。しかしながら19世紀米国に範囲を絞ると先行研究は一気に少なくなり、ここでもやはり、ジョン・ランクフォード『アメリカ天文学』(1997)という1冊が定番の地位をほとんど独占している[16]。“新しい天文学、”の台頭に伴う米国の天文学界の構造の変化を、計量的手法を駆使しながら詳細に論じた同書は、本論第4-5章の重要な着想源のひとつである。

ハーヴァード・カレッジ天文台、ベンジャミン・パース、“新しい天文学、”の3つが19世紀アメリカ天文学史にとって不可欠のキーワードであることには、上記の研究書の著者たちもきつと同意するだろう。にもかかわらず、これら3つの複雑な絡まりあいに光を当てつつ説かれる総合的なアメリカ天文学史は、いまだ

-
15. それぞれ「略号」のJ&BとERHである。『ジャーナル・フォー・ザ・ヒストリー・オヴ・アストロノミー』の1990年2月号(*Journal for the History of Astronomy* 21, no. 1)は、ハーヴァード・カレッジ天文台の150周年およびスミソニアン天体物理天文台の100周年を記念する特集を組んでおり、そこに収められた諸論文も本章にとって貴重な先行研究であった。加えて、エドワード・ピッカリング台長の時代のハーヴァード・カレッジ天文台について知るうえでは以下も重要である。Dava Sobel, *The Glass Universe: How the Ladies of the Harvard Observatory Took the Measure of the Stars* (2016; repr., New York: Penguin Books, 2017). ベンジャミン・パースに関しては、彼について書かれた1980年以前の文章の多くが以下に再録されている。I. Bernard Cohen, ed., *Benjamin Peirce: "Father of Pure Mathematics" in America* (New York: Arno Press, 1980). 同書とERHと、あと以下を加えればベンジャミン・パースを主題とする研究はほぼ網羅できる。V. F. Lenzen, *Benjamin Peirce and the U.S. Coast Survey* (San Francisco: San Francisco Press, 1968).
 16. 小暮の本の書誌情報は第3章註9に掲げてある。天体物理学の歴史全般に関して本論第4-5章は、同書とGHA4Aと、加えて以下にも多くを負っている。John B. Hearnshaw, *The Analysis of Starlight: Two Centuries of Astronomical Spectroscopy*, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 2014). ランクフォードの本は「略号」のJLである。

にほとんど書かれていない。すなわち、ライルおよびボイド、ホーガン、ランクフォードによる重要な——しかしそれぞれ力点の置き方が違う——3冊の成果を総合している点だけをとっても、本章における19世紀アメリカ天文学史の瞥見にはいくばくかの学術的価値があるはずである。しかしもちろん、本章の狙いはそこに留まらない。

第2章第1節に私は、「ローエルを“図、とし世紀転換期アメリカ思想史を“地、としている本論において、“地、の側を誰かひとりに代表させるとすればエリオットが選ばれることになるだろう」と記した。本章で論じるように、実はローエルのみならずエリオットも、ベンジャミン・パースの教え子であった。また、のちに“新しい天文学、の牙城のひとつとなるハーヴァード・カレッジ天文台の設立にベンジャミン・パースは大きく貢献しているし、“古い天文学、の領袖としてききほど挙げたサイモン・ニューカムはベンジャミン・パースの弟子であった。要するに、先述の「入れ子構造のドラマ」のほとんど全領域にベンジャミン・パースは影響を及ぼしているのである。言い換えれば、ベンジャミン・パースからパーシヴァル・ローエルへという、いままでの天文学史研究においてほとんど光が当てられなかったラインに注目することによって初めて、世紀転換期の天文学界の入れ子構造を十全に捉えられるようになる。この点が本論第4-5章の重要な発見のひとつであり、本章における19世紀アメリカ天文学史の瞥見は、いわば次章の議論を効率的に展開するための伏線である。

2 米国が天文台を得るまでの苦闘

19世紀初め以降の1世紀間にアメリカ天文学がどう発展したかを概観するにあたって、はじめにいくつかの基礎的な事柄を導入しておかなくてはならない。まずは、以下のふたつの等式である。

$$1 \text{ 度} = 60 \text{ 分角} = 3,600 \text{ 秒角}$$

$$1 \text{ インチ} = 2.54 \text{ センチメートル}$$

前者の式に登場する「分角」や「秒角」は、微小な角度を表すための単位である。たとえば火星の場合、地球にもっとも近づく衝——しばしば「大接近」と呼ばれる——においては地球との距離は5,600万キロメートル弱になり、地球からもっとも遠い衝——こちらは「小接近」——のときの距離は1億キロメートル強になる。この2倍近い開きによって、地球上の観測者にとっての火星の見かけの大きさ、すなわち視直径も、25秒角強から14秒角弱まで変化する。火星の視直径が25秒角であるということは、火星の両端と地球上の観測者とを結ぶ線を引いたときにふたつの線が25秒角（約0.0069度）の角度で交わるということである。ちなみに太陽と月の視直径はどちらも約30分角であり、実際の大きさはまったく異なる（太陽の赤道半径は月の赤道半径の約400倍）にもかかわらず地球からの距離もまた大きく異なる（太陽は月よりもおよそ400倍遠い）ことによって、見かけの大きさがほぼ一致している [17]。

「インチ」は、周知のとおり、米国で慣用されている長さの単位のひとつである [18]。本論ではこの単位

-
17. 本書において、天体に関する数値は原則として平成31年版（第92冊）『理科年表』（国立天文台編、丸善出版、2018年）記載のデータに基づいている。火星の衝に関する本文中の記述は、本章註11に挙げたウェブページに加えて、Sheehan, *Planet Mars* の227-31頁にまとめられている詳細なデータからも裨益を得た。
18. 米国においては、1866年の法律によって1メートル=39.37インチと定められたが、現在ではこの関係は、1959年の国際的な協定に基づき1インチ=2.54センチメートルへと改められている。詳しくはたとえば以下を参照のこと。François Cardarelli, *Encyclopaedia of Scientific Units, Weights and Measures: Their SI Equivalences and Origins*

本論 120–44 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、213–59 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

シー (1866-1962) とふたりの大学院生が加わっていた。シーはベルリン大学で天文学の博士号を得ており、ローエル天文台へ移るまえはシカゴ大学に勤めており、『火星』の好意的な書評を『ダイアル』の1896年7月号に寄せてもいたので、ローエルの強力な味方になると当初は期待されたのだが、結論から言えばこの人選は大いなる過ちであった。人間関係に軋轢をもたらすことを得意としている彼は、シカゴ大学では同僚のジョージ・エラリー・ヘイルと反目しあい、ローエル天文台では他のスタッフに心理的な苦痛を与えた。1898年7月にシーがローエル天文台から解雇されたときには、彼と同時期にローエル天文台に入ったふたりの大学院生はすでに辞めていた。さらに1899年以降には、たんなる思弁をさもデータに裏づけられているかのよう¹⁰⁴に書いたり他人の著作から剽窃したりといった科学者にあるまじきシーのふるまいが露呈しだしたため、彼はほとんどの学術誌から締め出されるに至っている [104]。

1896年12月の衝の期間にローエルらが火星観測をおこなったのは、メキシコシティのタクバヤという地区においてである。ダグラスは今回も観測地の選定と事前の準備に奔走したが、タクバヤに新しいドームを設置する作業が遅れてしまい、ローエルが24インチのレンズを携えてタクバヤに到着した12月28日には火星はすでに地球から遠ざかりつつあった (衝は12月1日)。観測は同月30日から翌年3月26日まで続けられた。ローエルの眼に映った火星は期待を裏切るものではなく、かといって期待を上回るものでもなく、それまでの観測から導かれた結論を再確認すること以上の進展を彼は生み出せなかった。

少なくとも、冬のあいだ観測を続けたことによって、タクバヤのシーイングは決してフラグスタッフより優れているわけではないということは明らかになった。しかしこの発見できえ、ローエル天文台の未来を決めるにはいまだ十分ではなかった。なぜならローエルは、タクバヤからボストンへ戻った直後に神経の病に陥ってしまうからである。彼は1897年4月21日付のダグラスへの手紙で、自らの病状を「私の身に降りかかることがあろうとはまったく想定していなかったもの、つまり機械の完全な故障」という言葉で説明した [105]。ダグラスらの尽力によって5月にふたたびマーズ・ヒル^{あるじ}で稼働しはじめたローエル天文台に主が帰還したのは、それから4年後のことであった。

*

本章で瞥見したアメリカ天文学史からメルクマールとなる年を取り出すなら、ジョン・クインジー・アダムズ大統領が米国に「空の灯台」がないことを嘆いた1825年、ベンジャミン・パースらの努力のすえにハーヴァード・カレッジ天文台が当時世界最大級の15インチ屈折望遠鏡を完成させた1847年、エドワード・ピッカリングがハーヴァード・カレッジ天文台第4代台長に就任した1877年、『ヘンリー・ドレイパー星表』の刊行が始まった1918年の4つを選ぶべきだろう。ここからあらためて感じられるのは、第一に、アメリカ天文学の発展がかなり遅く始まったぶん急速に進行したということであり、第二に、いわばベンジャミン・パースの管轄からエドワード・ピッカリングの管轄へ、あるいは“古い天文学、の城から”新しい天文学、の城へというかたちで1877年を境に天文学史上の立ち位置を大きく変更させたハーヴァード・カレッジ天文台の軌跡の重要性である。

こうした大きな枠組みのなかでローエル天文台の設立の経緯を捉えることによって、本章は、“新しい天文学、のいまひとつの城となるはずであったローエル天文台が結局新旧対立の構図から逸脱し、“新しい天文学、の陣営との——特にその中核を占めるリック天文台との——戦いに巻き込まれてゆくまでの過程を明らか

104. EMH, 27-31; Wright, *Explorer of the Universe*, 118-19; WGH, 105, 119-23; Ronald A. Schorn, “See, Thomas Jefferson Jackson,” in *BEA*, 1972-73. シーによる『火星』の書評の書誌情報は以下のとおり。T. J. J. See, “The Red Planet Mars,” *Dial* 21, no. 242 (July 16, 1896): 42-43.

105. Percival Lowell to A. E. Douglass, April 21, 1897, PLC.

かにした。いま述べた新旧対立を、本章ではもっぱらアメリカ天文学界の構造を把握するための視点として利用してきたけれども、実は対立において持ち出される論点が火星運河論争とも内容的に密接に関わっていることが次章において説かれる。予告的に記せば、その論点とはスペクトルの視覚的信憑性である。

サイモン・ニューカム、チャールズ・ウィリアム・エリオット、パーシヴァル・ローエル——本章に登場したこの3人は、みなベンジャミン・パースの教え子である。またこの3人の並びは、本章第1節で述べた「入れ子構造のドラマ」を表現している。言うまでもなく、前二者のあいだに内側の対立があり、前二者と後者とのあいだに外側の対立がある。「入れ子構造」の共通の根であるベンジャミン・パースについて本章で論じたことで、次章で語られる「ドラマ」がより理解しやすくなったはずである。加えて、ベンジャミン・パースというピースが本論において持つ意味は、彼からローエルへ繋がるラインについて論じきったときにはじめてくまなく明かされるのだが、そこに到達するのはローエル天文台における冥王星の発見を俎上に載せる次章の第7節においてである。

第5章 火星運河論争とローエルのロマンティック・サイエンス

1 “古い、天文学者たちの派閥

「E・C・ピッカリングはそれをぶんどろうとしたのですが、ローエルがカモを演じていたことを知って相手が予想以上に手ごわいことに気がつきました」——これは、セス・カーロ・チャンドラー・ジュニア (1846-1913) という天文学者が1894年9月にリック天文台のエドワード・ホールデン台長へ送った手紙に見られる一文である。ここで言われる「それ」とはもちろん、パーシヴァル・ローエルの1894年のアリゾナ遠征のことを指している (第4章第4節参照)。チャンドラーによれば、ローエルがエドワード・ピッカリングのもくろみを出し抜いてアリゾナの天文台を手中に収めたというニュースは、「ボストンとケンブリッジのもろもろのクラブや科学「同人」[coteries]」を痛快な気分浸らせ「たとのことである [1]」。

沿岸測量部とハーヴァード・カレッジ天文台でそれぞれ数年間働いたことのあるチャンドラーは、1886年にピッカリング台長のもとを離れて以降は、ながらく従事してきた変光星 (明るさが変化する恒星) の研究を独自に進めるかたわらで、『アストロノミカル・ジャーナル』という雑誌においてベンジャミン・アプソープ・グールド (1824-96) の編集作業を補佐してもいた (1849年に創刊されたものの南北戦争によって1861年に発行が中断されていたこの雑誌は、1886年に25年ぶりに再刊され現在まで続いている)。チャンドラーにとって雑誌の編集に携わるのはこれがはじめてではなく、ボストン科学協会——1894年5月22日にローエルの講演を主催した団体 (第4章第4節参照) ——の刊行物としてジョン・リッチー・ジュニア (1853-1930) が編集していた『サイエンス・オブザヴァー』で彼はすでに同様の経験を積んでいた [2]。ここに登場した3人、すなわちチャンドラーとグールドとリッチーは、表立ってではないにせよ、実質的には年長のグールドを領袖とするひとつの派閥を形成していた。私は前章で、19世紀末のボストンには「新旧の対立をことさらに煽る数名の“古い、天文学者たち」がいたと述べたけれども、それは具体的には彼らのことである。

グールドはラッツァローニ (第4章第3節参照) のメンバーでもあった。1824年にボストンで生まれた彼は、ベンジャミン・パースの15歳年下であり、そもそもハーヴァード・カレッジでのパースの教え子でもあったから、ラッツァローニのなかではかなり年少である (年が近いメンバーとしては2歳年上のウォルコット・ギブズがいる)。しかし、ヨーロッパへ留学して各地の名高い天文台で働いたのち、ドイツのゲッティンゲン大学でカール・フリードリヒ・ガウス (1777-1855) の指導を受けて1848年に博士号を授与され、諸外国語の能力も引っさげて24歳で帰国するというグールドのキャリアは、あのエリート主義的なラッツァローニにも太刀打ちできる者がいないくらい輝かしいものであった (たとえば中心メンバーのひとりであるジョゼフ・ヘンリーは、大学へ通わずほとんど独学で科学を修得した)。彼にとって不幸だったのは、飾ろうとした錦があまりに華々しすぎたがゆえに、当時の米国には彼のポテンシャルを活かせる場がほとんど用意されていなかったことである。こうした現状に危機感を覚えた彼は、米国の科学の振興を自らの任務と思いさだめ、1849年に自らの資金で『アストロノミカル・ジャーナル』を創刊した。彼の信念がどれほど強固なものであったかは、1851年にガウスからゲッティンゲン大学の教授のポストを打診され、ゆくゆくはゲッティンゲン天文台の台長にという約束も添えられていたにもかかわらず、グールドは逡巡しつつもこのオファーを断ったという事実十二分に表れている [3]。

1. Seth C. Chandler to Edward S. Holden, September 4, 1894, quoted in DS, 182/225-26.

2. Kunitomi Sakurai, “Chandler, Seth Carlo, Jr.,” in BEA, 402-3; J&B, 194-95.

3. Trudy E. Bell, “Gould, Benjamin Apthorp,” in BEA, 833-34; ERH, 127, 168-69.

グールドのその後の人生は、残念ながら、それまでの明るさと著しい対照を成すほどの暗さに伴われることとなった。なかでも暗さが際立つのは、1850年代後半に彼が経験した、ニューヨーク州オールバニに建つダドリー天文台をめぐる騒動である。建物自体は1854年に完成していたこの天文台は、翌年にアレグザンダー・ベイチ、ベンジャミン・パース、ジョゼフ・ヘンリー、ベンジャミン・グールドの4人が科学顧問に就任したことによって、ラッツァローニの城となることを運命づけられたかに当初は思われていた。しかし、グールドが1858年に台長に就任したときには、彼と天文台の理事会——オールバニに住む裕福なパトロンたちから成る——との関係はすでに抜き差しならないところまで悪化しており、最終的には、ベイチとヘンリーがグールドを擁護する内容のパンフレットを著し、理事会がそれに反論するパンフレットを出版し、グールドは理事会の決定によって天文台から強制的に退去させられるという、醜悪と形容するほかない結末を迎えてしまった[4]。

なぜグールドと理事会との対立はかくも紛糾したのか。前者はダドリー天文台をヨーロッパの天文台に伍する研究機関にしたいと考えていたのに対して、後者は研究上の価値のために天文台の大衆的な価値を完全に犠牲にするつもりはなかった——たしかにそう要約しうる側面もこの騒動には含まれているのだが、他方でグールドの人格的な問題というあまり愉快ではない要因も作用しており、詳しく分析するには多くの紙幅を要するためここではこれ以上踏み込むことはできない。本章の議論にとってより重要なのは、こうした過去を持つグールドが、のちに小さな派閥の領袖となって、19世紀末のボストンにぎくしゃくした雰囲気醸し出すことに貢献していたという事実である。この「雰囲気」は1896年にグールドが亡くなっても決して消えはせず、それどころか、翌年にローエルが陥った神経の病、すなわち神経衰弱 (neurasthenia) は、ある意味ではまさしく「雰囲気」によってもたらされたものでもあった。

*

グールド、チャンドラー、リッチーという3人の「古い」天文学者たちが19世紀末のボストンにおいて「新旧の対立をことさらに煽」ったとはどういう意味か——これは次節で説明される。「雰囲気」の病としての、言い換えれば世紀転換期ニューイングランドの流行病としての神経衰弱については第3節で解説される。そのあと本章は、ローエルの神経衰弱からの回復および天文学研究の再開と歩調を合わせるかたちで、段階的に視野を広げながら火星運河論争へのローエルのコミットメントを跡づけてゆく。

第4章第1節に挙げた火星運河論争についての先行研究が例示するとおり、火星運河論争の経緯をまとめるだけであれば、本章第2-3節で扱うような世紀転換期ニューイングランドのローカルな文脈に目配せする必要はない。じじつ、本章冒頭で引いたチャンドラーの手紙から伝わる下世話なゴシップ趣味は、本章の起点における視野設定があまりに狭いのではないか——人間関係のいざござは無視して、もう少し広い視野から議論を始めてもよいのではないか——という懸念を読者に生じさせかねないものですらある。にもかかわらずそこを起点として本章の視野を段階的に広げていったことには、以下の3つの意図が込められている。

第一に、いま述べたチャンドラーの下世話なゴシップ趣味が、第1章第1節で述べた「エピソード的な郷愁」と表裏の関係を結びうる点に注意すべきである。つまるところ、チャンドラーが嬉々としてゴシップ趣味を発揮できるくらいに19世紀後半のブラーミン社会における人間関係が濃密であったからこそ、郷愁に駆られた後世の書き手たちはそこからいくらでもエピソードを発掘できたわけである。このような、当事者に息苦しささえ感じさせるほど濃密な人間関係は、世紀転換期ニューイングランドにおける神経衰弱の流行の重要な前提である。したがって、第2節で人間関係のいざござの一例を紹介したのち第3節で神経衰弱の

4. ダドリー天文台をめぐる騒動に関しては、何よりもまず以下の優れた研究を参照のこと。Mary Ann James, *Elites in Conflict: The Antebellum Clash over the Dudley Observatory* (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1987).

流行を解説するという本章の行論には一定の必然性があると言えよう。もっとも、序論でも述べたとおり、ローエルをとりまくブラーミン社会の人間関係は、デイヴィッド・シュトラウスによる伝記がまさしく焦点を据えているところでもあった。

第二に、神経衰弱からの回復というローエルの個人的な出来事が、ロマンスから科学を経てロマンティック・サイエンスへという彼の思想的な軌跡にとって不可欠の文脈であったことを本章は強調する。こうした視角は、火星運河論争のみを眺めても発見できず、ローエルの生涯のなかに火星運河論争を位置づけることによってはじめて手にしうるものである。ローエルの神経衰弱を思想史的な視点から捉えるにあたって本章が裨益を得たのは、文化史家 T・J・ジャクソン・リアーズの『恵みなき場所』(1981) である [5]。同書においてリアーズは、世紀転換期米国の知識人たちが近代化の急速な進行に対して抱いたアンビヴァレンスのさまざまなパターンを析出しており、その過程で神経衰弱の流行が論じられるばかりでなく、ローエルの生涯もひとつの事例として取り上げられている。しかし残念ながら、第3節で確認するように、同書に含まれるローエル論は不十分なものであり、神経衰弱から回復したあとのローエルの天文学研究の内実にまでリアーズの議論はまったく及んでいない。この欠落は本章の議論によって埋められるだろう。

第三に、本章冒頭でチャンドラーの名前を挙げたのは、実はブラーミン社会の濃密な人間関係を代表させるためばかりでなく、第4節で論じるように、彼が“新しい天文学、を攻撃する際にスペクトルの表象的信憑性という重要な論点を持ち出していたからである。詳しい説明はのちに譲らざるをえないが、本章の主張のひとつを予告的にまとめればこうなるだろう。運河に覆われた火星という、表象的信憑性が決して自明ではないイメージを自らの武器としていたローエルが、にもかかわらず火星運河論争をとおして急速に台頭してきた理由のひとつは、プロフェッショナルの天文学者たちの内紛においてスペクトルの表象的信憑性が争点化されていたために生じた空隙に存している、と。第4節以降でこうした議論を組み立ててゆく際に本章は、ロレーヌ・ダストンおよびピーター・ギャリソンの共著『客観性』(2007) という、18世紀から20世紀までの西洋の科学史を視野に収めた労作を何度も参照することとなるだろう [6]。後述するように、同書にはローエルも少しだけ登場する。

序論において私は、シュトラウスによる伝記がもつばら焦点を据えるような世紀転換期ニューイングランドのローカルな文脈と、グートケの『最後のフロンティア』が論じるようなマクロな思想史的な文脈という、スケールの異なる2種類の背景の架橋を本論で試みると宣言した。そしてここに至って、本論の課題をより具体化することが可能となった。シュトラウスによる伝記、リアーズの『恵みなき場所』、ダストンおよびギャリソンの『客観性』、グートケの『最後のフロンティア』という4冊は、ローエルが登場するという点で共通している一方で、背景のスケールという点でそれぞれ異なっており、この並びがまさしく小さい視野から大きい視野へという階梯を成している。したがって、序論に挙げた課題は本章において、『恵みなき場所』のローエル論と『客観性』のローエル論との総合というより具体化されたかたちで取り組まれることとなる。

ともあれ、図式化された先取りの要約はこのあたりで終え、そろそろ議論の中身に入りたいところなのだが、しかしそのまえに、もう一点だけ付言しておかねばならないことがある。それは、本章第8節において後半生のローエルの営みを総括するための概念として、あるいはより端的に神経衰弱から回復したあとのローエルが辿り着いた場所の名前として、本論が「ロマンティック・サイエンス」を選んだ理由である。

*

「ロマンティック・サイエンス」という名前の選択は、本論に内在的な視点から見れば自然な帰結であるよ

5. 「略号」の TJJL である。

6. Lorraine Daston and Peter Galison, *Objectivity* (2007; repr., New York: Zone Books, 2010).

うに思われる。序論からここまでの議論がすでに示唆しているとおりに、本論が目指すのは、(ローエルの『能登』に見られる) ロマンズ→(『神秘の日本』以後のローエルが従事した) 科学→X→(H・G・ウェルズの) サイエントフィック・ロマンスという図式のXを埋めることであるから、Xに「ロマンティック・サイエンス」を入れられるのなら図式はきれいに完成する。

しかし他方で、ずばり『ロマンティック・サイエンス』(2003)と題する論文集がすでに存在している。ノア・ヘリングマンが編んだこの論文集は、「自然史の文学的諸形式」(“The Literary Forms of Natural History”)という副題から窺えるように、英国文学史のうち「ロマン主義の時代」と呼ばれる18世紀末から19世紀初めまでに属する文学テキストを主な題材として、それらのテキストが自然史という学問分野とどのように相互作用していたかを分析する論文を集めている。ヘリングマンによる同書の序論は自然史に関して、19世紀末までに生まれた「近代的な、そして専門化された諸分野〔disciplines〕の構造」によってどれほどの修正をこうむったにせよ、それがいまだに「アマチュアの人ナチュラリストたちの知識および実践のための、また博物館に集められた雑多な標本のための幅広い見出し〔rubric〕」として機能しつづけていることを強調している[7]。これは逆に言えば、時代的指標としての形容詞「ロマンティック」を、(たとえば自然史というカテゴリーによって) 範囲を適切に定めることなく「サイエンス」に冠してしまうと時代錯誤に陥りかねないということでもある。このことを端的に表すのが、現代的な意味での科学の従事者たちをアイデンティファイする「サイエンティスト」(“scientist”)という語が生まれたのが1830年代初めであったという事実である[8]。

もっとも、ロマン主義と科学というテーマに取り組む優れた研究書はほかにいくつもある。そのうち本章における議論と方向性が近いのは、ティム・ファルフォード、デビー・リー、ピーター・J・キットソンの3人による共著『ロマン主義の時代における文学、科学、および探検』(2004)である。同書のタイトルにある「探検〔exploration〕」は、たとえばジェイムズ・クック(1728-79)に率いられた英国軍艦エンデヴァーの面々が1869年にタヒチでおこなったそれを指す。“探検のすえに未知なるものと出会う、というモチーフがローエルにとっても重要であることは本章において確認されるだろう。同書の序論に記されているように、「19世紀後半における諸分野のプロフェッショナルライゼーション以前には、知的な諸言説のあいだに厳然たる障壁はほとんど存在しなかった」ため[9]、植民地主義的な認識枠組みのもとで遂行されたもろもろの探検にまつわる言説が、同時代の文学的な言説や科学的な言説と複雑に絡まりあうこととなったのであり、同書はまさにその絡まりあいに光を当てている。

対して、あらためて言うまでもなく、ローエルが天文学者へ転身した1890年代における科学は、ロマン主義の時代における科学的実践とは同列に並べられないほどにプロフェッショナルライズされていた。したがって、文学的な言説と科学的な言説とはもはや、ロマン主義の時代におけるほど簡単に絡まりあうことができなくなっていた。文学から科学へのローエルの移動がそうした時期になされたのだということを、はじめに強調しておかなくてはならない。科学者としてのローエルのふるまいには批判されるべき点が多々あるのだが、しかし本論は最終的に、後半生のローエルはあくまでも科学者であった——T・J・J・シーの事例とは異

7. Noah Heringman, “Introduction: The Commerce of Literature and Natural History,” in *Romantic Science: The Literary Forms of Natural History*, ed. Noah Heringman (Albany: State University of New York Press, 2003), 3.

8. 「サイエンティスト」という語の起源については以下を参照のこと。伊勢田哲治『科学哲学の源流をたどる——研究伝統の百年史』、ミネルヴァ書房、2018年、第2章。

9. Tim Fulford, Debbie Lee, and Peter J. Kitson, *Literature, Science and Exploration in the Romantic Era: Bodies of Knowledge* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 2. ロマン主義と科学というテーマは以下などでも扱われている。Richard Holmes, *The Age of Wonder: How the Romantic Generation Discovered the Beauty and Terror of Science* (New York: Pantheon Books, 2008); Andrew Cunningham and Nicholas Jardine, eds., *Romanticism and the Sciences* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990).

なり(第4章第5節参照)、そこを越えると科学者ではなくなってしまうような一線を踏み越えることはなかった——と判断する。そうした立場のもとでローエルは、プロフェッショナルライズされた科学を「ロマンティック」なものにしようとした。この「ロマンティック」はもちろん時代的指標ではありえないため、本論においては、第2章で論じたジャンル名としての「ロマンス」の形容詞形として用いている。

ローエルにおける文学的言説と科学的言説との絡まりあいが、ロマン主義の時代におけるロマンティック・サイエンスと似たパターンをまとうことはありうる。しかしながら、その絡まりあいが持つ意味は、文学と科学とのあいだの距離が約1世紀間に大きく開いた以上、ロマン主義の時代とはまったく異なってくる[10]。同様に、さきほど言及した「探検のすえに未知なるものと出会う」というモチーフも、それをを用いるための前提は当然ながら時代の推移とともに変化する。言うなれば、クック船長の時代にはタヒチまで行けば「未知なるもの」と出会えたのに対して、ローエルが「未知なるもの」と出会うには火星まで行かなくてはならなかった——とまとめたところで現時点では乱暴な類推にしか聞こえないだろうし、これ以上の議論は次節以降に譲るべきであるが、ともあれ、ロマン主義の時代とはこれほど条件が異なるなかで、それでもなお「ロマンティック・サイエンス」と呼びうる営みにローエルが従事したというのが本論の主張である。

これを受容者の側から見れば、ローエルの言説の内容とは別に、彼が科学の領域から発言していた事実が——すなわち彼の言説の流通経路が——小さからぬ意味を持つこととなった。言い換えれば、ローエルのロマンティック・サイエンスの意義を測るには社会学的な視点が多少なりとも必要となるため、本章はその視点のヒントをまず第5節で引く社会学者レスター・フランク・ウォード(1841-1913)の手紙から得、続いて第8節においてピーター・L・バーガーおよびトーマス・ルックマンの「信憑性構造」(plausibility structures)という概念を借用する。ローエルの言説の受容者としては、H・G・ウェルズとエドガー・ライス・バローズ(1875-1950)という、SF作家と見なしうるふたりの小説家に第6節で注目する。しかしローエルのロマンティック・サイエンスの意義は、ホラー作家H・P・ラヴクラフトへの影響を論じることによってはじめて十分に測られたことになるだろう。ただしこの影響を説明するにはさきにローエル天文台による冥王星の発見を解説せねばならず、ゆえに本章は、ロマンティック・サイエンスという鍵概念への本格的な論及を最後の第8節まで先延ばしにすることとなってしまった。そこまでの道のりはまだだいぶあり、ひとまずはグールドの一派がもたらした人間関係のいざこざへ話題を戻さなくてはならない。

2 ブラーミン社会の濃密な人間関係

グールドの一派による煽りの執拗さをもっともよく伝える出来事のひとつは、1894年に、すなわちローエルのアリゾナ遠征の年に起こった、測光(天体の明るさの測定)の方法論をめぐる彼らとハーヴァードとの論争である。

セス・チャンドラーはこの年の2月に、「ハーヴァード・カレッジ天文台の子午線式測光計〔the Meridian-Photometer〕による変光星の観測について」と題する論文を『アストロノミシエ・ナハリヒテン』に発表した。1821年にドイツで創刊された『アストロノミシエ・ナハリヒテン』は、現存する天文学の学術誌のなかでは最古のものであり、当時における権威はたいへん高く、したがってチャンドラーの論文は世界中の天文学者たちの目に触れたはずである。科学に携わっていないボストニアンたちでさえも、チャンドラーの論文のことは3月17日の『ボストン・イヴニング・トランスクリプト』をとおして知っていた。そこには、「学生」

10. 以下の優れた研究は、文学的言説と科学的言説とのあいだの距離がロマン主義の時代から世紀転換期にかけてどう変化したのかを、実証主義という思想を測定基準とするかたちで論じている。Peter Allan Dale, *In Pursuit of a Scientific Culture: Science, Art, and Society in the Victorian Age* (Madison: University of Wisconsin Press, 1989).

本論 152-204 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、267-369 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

る。パトリック・パリンダーがウェルズに代表させた「サイエンティフィック・ロマンスから近代的なサイエンス・フィクションへの進化」(序論参照)において、ロマンティック・サイエンスは有効な触媒として機能したが、触媒であるがゆえに、その命運はSF史と連動しなかった。ローエルの火星論の利用者にとっては、火星に運河を見た科学者が存在するという事実に支えられたオルタナティブな信憑性構造こそが重要であり、信憑性構造の操作によって物語の舞台を「いまここ」から離陸させるというドラマトゥルギーをひとたび学べば、もはや火星にこだわる必要もなくなる。他方でローエルは、ロマンティック・サイエンティストとして、火星の運河は想像上の線ではないという主張をプロフェッショナルの天文学者たちの攻撃から守りつづけなくてはならなかった。——以上が、ローエルが「消滅する媒介者」であることの意味に関して本論が提示する最終的な分析である。

*

くりかえすまでもないだろうが、以上の「最終的な分析」は決してロマンティック・サイエンスという概念のオリジナリティを主張するためのものではない。第1節で述べたように、これに類する文学的言説と科学的言説との絡まりあいはロマン主義の時代にも見出される。しかしロマン主義の時代と世紀転換期とで大きく異なるのは、ロマンティック・サイエンスをなすための条件である。したがって本章の議論は、ローエルの火星論に含まれるロマンティックな表現が文学的に優れていると主張しているわけではなく、そうした表現を含む本が世紀転換期に科学書として流通したという事実に、そしてこの事実が持った効果に注意を促している。また、現在において下される、運河に覆われた火星のスケッチを含む本がとても科学書には思われないという判断を世紀転換期へそのまま投射してしまうと、時代錯誤という禁を犯すことになってしまう。ロマン主義の時代と世紀転換期と現在とでは、それぞれ科学的な知を成り立たせる条件が大きく異なっている。後半生のローエルの営みは、世紀転換期におけるこうした条件の境界、いわばグレーゾーンに位置しており、現在それが非科学的に見えるのは、グレーゾーン自体が時代の推移とともに移動したからでもある。

このような時代錯誤の戒めは科学史の従事者にとって基礎的な事柄であるが、にもかかわらず、科学史と視覚的イメージ研究とが交わる領域において、「科学史や美術史によって光をあてられた一握りの図像の背後では、無数の図像が顧みられることのないまま闇の中に眠っている」という蓋然性に意識が向けられることはこれまで少なかったと、ドイツ文化研究者の濱中春は指摘している。かりに、それら「無数の図像」は顧みるに値しないという判断に「科学知にかんする特定の価値判断が介在している」のであれば、これもいまひとつの時代錯誤である可能性を疑う必要があるだろう。こうした問題意識のもとで、濱中の論述は、「一八世紀末に発見された放電現象、リヒテンベルク図形の初期の研究史」を「イメージによる知の構築のいわば「失敗例」の一つとして」分析するという作業へ進んでゆく [193]。

本論で取り上げたローエルによる火星のスケッチ、およびローエル天文台で撮られた火星の写真もおそらく、「イメージによる知の構築のいわば「失敗例」」に含められるだろう。さらに濱中の言葉を借りるなら、これらのイメージが「その構築に関与する知の概念」——ローエル自身はそれを科学知とし、本論はそれをロマンティック・サイエンスの知とした——について、「それを形成する歴史的・社会的・文化的な条件を明確にすること」を本論はここまでおこなってきた [194]。しかしそればかりではない。ローエルのロマンティ

193. 濱中春「視覚化と認識のあいだ——リヒテンベルク図形と科学のイメージ研究の射程」、坂本泰宏+田中純+竹峰義和編『イメージ学の現在——ヴァールブルクから神経系イメージ学へ』所収、東京大学出版会、2019年、325、328頁。

194. 同前、340頁。

ック・サイエンスが、世紀転換期という条件下の科学の境界に位置していたために、そこでなされる（火星のスケッチや写真といった）「イメージによる知の構築」の試みが、「科学的」というラベルの適用範囲を拡張しようとするモメントを持つことになった——すなわち、「歴史的・社会的・文化的な条件」に規定されるばかりでなくその条件に働きかけようとするベクトルをも備えていた——点を本章は強調してきた。『火星とその運河』における「旅は、たとえ実体を伴わなくとも、現実のものである」という一文はこのモメントの修辭的表現であり、レスター・ワードの言う「大いなる「視差」」はこのモメントの（ワードなりの）社会学的分析である。

ある種の（あるいは、もしかしたらすべての）イメージには知の構築を促す力がある。かくして、火星のスケッチや写真といったイメージが、自分は科学知に携わっているというローエルの信念を——少なくともある程度——支えることとなり、そんなローエルの科学者としての立ち位置が、「科学的」という形容詞の拡張可能性を感じさせるような効果を——少なくとも一部の作家たちに——及ぼすこととなった。ローエルの営みがかろうじて科学でありえたのは、世紀転換期という条件下でのことであり、時代の推移とともに条件が変化すれば、それを科学として流通させる視点も成り立たなくなる。つまり言うなればローエルのロマンティック・サイエンスは「消滅」してしまう。しかしそれが、同時代の「文化的な条件」へ持続的な効果を及ぼしてもいたのであれば、ローエルはたんに「消滅」したのではなく「消滅する媒介者」となったのだと言うことができよう。本節における「最終的な分析」は、同時代の「文化的な条件」へ持続的な効果を及ぼすというこのプロセスを「信憑性構造」という概念を借りつつ説明するためのものであった。本論の結論ではあらためて、このプロセスが、以後のSF史を見とおしうる視野のもとで説明しなおされることとなるだろう。

結論 ローエルのイマジナリー・ライン

ローエルの生涯を5章にわたり辿ってきた私たちはいまや、序論で直面した複数の問いへより明瞭な回答を与えることができる。

たとえば私は序論で、ブレヒトの『ガリレイの生涯』におけるガリレオのセリフが「ローエルが口にしてもおかしくないもの」であることに注意を促し、ガリレオが偉人として記憶された一方でローエルは「消滅」という差が何に由来していたのかと問うた。この問いに関して、ここまでの議論をとおして私たちはまず、両者の距離が必ずしも自明ではなく、捉え方によって近くも遠くもなりうることを確かめたのであった。なにしろラヴクラフトはローエルの業績が「我々をして彼の霊をガリレオやサー・ウィリアム・ハーシェルの隣に祀らしめるに十分なものである」と追悼文で述べていたし、またクリストファー・コロンブスという類型を基準に測ればガリレオの影響とローエルの影響とが相似形を成すと言いうることも第5章第8節で示唆したとおりである。

こうした補足を踏まえたいうで、ガリレオとローエルとの差の由来として本論は最終的に、『ガリレイの生涯』のセリフにある「数字を信じ」ることと「眼を信じ」ることという対照を挙げる。第4-5章で論じてきたとおり、“新しい天文学、の隆盛に伴う天文学界の構造変化は、スペクトルの表象的信憑性を争点のひとつとするプロフェッショナルの天文学者たちの内紛を経て、「眼を信じ」ることの価値を相対的に下落させるに至った。スペクトルを科学的なマテリアルとして受け入れるということは、スペクトルが生成されるまでの機械的なプロセスへ——自分の眼と同等かそれ以上に——信憑性を付与することを、すなわちダストンおよびギャリソンの言う「機械的客観性」を自らの徳目とすることを意味する。したがって、『ガリレイの生涯』の主人公の意図からは離れるだろうけれども、この態度を「数字を信じ」ていると表現することはできるだろう。天文学者たちの営みの基礎を「数字を信じ」ることに据えるためには、メンバー間で相互に評価しあったり資格を与えあったりするコミュニティの整備が、すなわちプロフェッショナルライゼーションが不可欠である(第2章第4節参照)。対して「眼を信じ」るための資格は、盲目ではないことなどいくつか挙げられはするものの、「数字を信じ」ることと較べればずっと少ないはずである。

ローエルは、“新しい天文学、の隆盛に伴い天文学界が「認識的徳目」を再編成しつつあったまさしくそのときに、運河に覆われた火星のイメージを引っさげて天文学界に参入した。火星運河説の主唱者としてのローエルはおおむね一貫して「眼を信じろ」と訴えつづけており、いま述べたとおり「眼を信じ」るためのハードルが低いこともあって、大衆からの人気を得ることができた。しかし結局ローエルが火星運河論争において敗北したのは、天文学界のプロフェッショナルライゼーションが「眼を信じ」ることの価値を相対的に下落させるような仕方で進行したからであり、コミュニティを整備する過程でローエルを排除する——第5章第7節で見たように政治的と形容して然るべき——圧力が働いたからである。ゆえに晩年のローエルは、惑星Xのプロジェクトにのめりこみながら、「数字を信じ」ているプロフェッショナルの天文学者たちが否定しようのない偉大な成果を残そうと努めたのであった。したがってあらためてまとめれば、ガリレオとローエルとの差は、「数字を信じ」ることおよび「眼を信じ」ることの重みづけを変化させるプロセスであるところのプロフェッショナルライゼーションの有無に由来していたと結論づけられる [1]。

1. もちろん本論は決して、「眼を信じ」ることから「数字を信じ」ることへの重心移動が科学史における不可逆的な変化であったと主張しているわけではない。第5章第4節でも述べたように、ダストンおよびギャリソンの『客観性』が描く「認識的徳目」の歴史的な系列においては「機械的客観性」のあとに「熟練の判断」が位置づけられていた。「熟練の判断」を徳目の最上位に据えることには、いわば“訓練された眼と専門知識に裏打ちされた直観的

*

「眼を信じ」ることから「数字を信じ」ることへという世紀転換期の重心移動が天文学界に限られた変化ではなかったことは、第5章第8節において北田暁大の議論を引きつつ指摘したとおりである。実のところ北田の議論は、本論にとってというよりはむしろ、序論で素描した1890年米国論の弁証法的な図式にとっていっそう重要である。この図式は、ローエル、フランク・ノリス、ジョン・デューイの3者が正反合の関係を成すとしたうえで、世紀転換期における「合」の新潮流を——トマス・ハスケルの議論をもとに——デューイらプロフェッショナルの社会学者たちの第1世代による「社会科学による文化的権勢の確立」に求めたのであった。第5章第8節で参照した北田の論文は、まさにこの「社会科学による文化的権勢の確立」の過程を、(1890年代というよりは)20世紀初めの米国に焦点を据えつつ丁寧に論じている。ともあれ、北田の議論にここでふたたび言及したのはあくまでも、序論における1890年代米国論のスケッチを思い起こすためにすぎない。

序論では、先述の弁証法的な図式を「打破しようとするダイナミズムをローエルから読みとる」ことが予告されてもいた。これが成就されたか否かの判定は実のところ、同じく序論における「かりにローエルが「消滅する媒介者」だったのだとして、彼はいったい何をウェルズへ媒介したのだろうか」という問いに本論が答えられたか否かという判定と連動している。なぜなら、先述の弁証法的な図式は「正」を占めるローエルが「消滅」したことしか伝えていないからである。序論で強調したとおり、ノリスら「反」のムーヴメント(アメリカ自然主義文学)やデューイら「合」の新潮流(プロフェッショナルな社会科学)に比して「消滅」した「正」の文化(お上品な伝統)はこれまで十分に論じられてこなかったのだから、「消滅」したものの再構成という(本論に含まれる)作業には小さからぬ意義があるはずだし、この意義に気づかせるという先述の図式のヒューリスティックな役割は決して瑣末なものではないはずである。しかしもし、「正」に属していたローエルがたんに「消滅」したわけではなく、H・G・ウェルズへ、あるいはサイエンス・フィクションの歴史という——世紀転換期アメリカ思想史のスケールを超える——知的伝統へ何かを「媒介」してもいたことを明らかにしえたのなら、ローエルが先述の図式に埋没する存在ではなかったと結論づけることも許されるだろう。まさしくこの「媒介」のメカニズムが、第5章の末尾に配した「ローエルが「消滅する媒介者」であることの意味に関して本論が提示する最終的な分析」で俎上に載せられたものであった。それをもう少し補足するために、ここでは、H・G・ウェルズの登場をひとつの画期とする近代的なサイエンス・フィクション(SF)の誕生の理解に本論がどう寄与したかについて付言しておこう。

実のところ私は、第5章末尾の「最終的な分析」を組み立てるうえで、いまや古典的なSF論であるダルク・スーヴィンの『SFの変容』(1979)からさまざまなインスピレーションを得ている。同書にはたとえば、「SFとは、したがって、異化〔estrangement〕と認識〔cognition〕との現前および相互作用を必要十分条件とする文学ジャンルであり、その形式上の主たる装置は、作家の経験的環境を代替する想像的枠組みである」

判断とを信じる、という態度が含まれている。すなわち、ダストンおよびギャリソンの図式に基づけば、本論が論じた世紀転換期の天文学界における重心移動のあとで、「眼を信じ」ることの——そして「信じ」るための媒体であるところのイメージの——価値をふたたび(相対的に)高めるような揺り戻しが生じたことになる。本論の視野を越えたところにあるこの揺り戻しについて考えるうえでは、『客観性』に加えて以下の論文も俎上に載せる必要があるだろう。ホルスト・ブレーデカンブ「イメージと自然との共生——ネオ・マニエリスムにむけて考える」清水一浩訳、坂本+田中+竹峰『イメージ学の現在』所収、367-401頁。同論文は、研究対象をイメージ化するという営みの重要性が現在の自然科学において(ふたたび)増しつつあることをさまざまな図版とともに論じているばかりでなく、「自然科学の多くの領域でイメージと物体とが融合している」というこの趨勢に「ネオ・マニエリスム」という示唆に富んだラベルを付している(389-90頁)。

とある [2]。スーヴィンによれば、オルタナティブな「想像的枠組み」が読者にもたらす新しさの感覚は SF にとって本質的であり、これを概念化するために彼はエルンスト・ブロッホ (1885-1977) の「ノーヴム [novum]」という用語を借りている。「SF は、認識的論理に裏づけられた虚構的「ノーヴム」(新奇性、革新) が物語上の優位ないし覇権を担うことをもって [他のジャンルから] 区別される」[3]。私の分析で用いられた「視差」および「オルタナティブな信憑性構造」という言葉は、SF 論としてであれば、スーヴィンの「異化」と「ノーヴム」にそれぞれ置換可能かもしれない。

にもかかわらず第 5 章で『SF の変容』を引かなかつたのは、端的に、ローエルが SF 作家ではないからである。スーヴィンは SF の十分条件を「科学的に秩序立った認識によって新奇性を裏づけること」とも表現しているが [4]、これはまさしくローエルが結果的におこなったことであり (ゆえに作家たちはローエルの著作から SF の可能性を引き出すことができた)、しかし彼はそれを科学としておこなおうとしたのである。したがって第 5 章においては、ローエルが提供した「枠組み」を、それが現実 (「経験的環境」) か虚構 (「ノーヴム」) かをひとまず問わない仕方で指示するために、スーヴィンの用語法から離れてかわりにバーガーとルックマンの「信憑性構造」を採用することとした。

序論で私は、パトリック・パリンダーがサイエンティフィック・ロマンスの起源のひとつをメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』に求めていたことに触れた。しかし『フランケンシュタイン』が刊行された 1818 年とウェルズの『宇宙戦争』が刊行された 1898 年とのあいだには科学のプロフェッショナルライゼーションが横たわっている。第 5 章第 1 節に記したことを敷衍して述べれば、19 世紀のサイエンティフィック・ロマンスと 20 世紀の SF とは、それぞれが絡みあわせようとしている文学的言説および科学的言説のあいだの距離によっても差異化されうる。ゆえに、近代 SF が生まれる環境の十全な記述は、文学の領域から科学を利用しようとする者たちに注目するだけでは為しえず、少なくとも、科学の領域から文学を利用しようとする者たちとのあいだでパターンを比較する作業が必要なはずである。本論はローエルという後者の一例を取り上げたにすぎないが、それでも、「信憑性構造」という概念を借りてスーヴィンの図式を更新するという仕方で、近代 SF の誕生をめぐる議論にいくばくかの貢献を果たしたはずである。もっとも、序論で引いたグートケ『最後のフロンティア』の言葉を転用しつつ再確認しておくなら、本論は SF 史の研究ではなく、あくまでも、「サイエンス・フィクションが、そしてサイエンス・フィクション以外のものも」——たとえばラヴクラフトの「^{宇宙}宇宙的恐怖」も——「そこから派生することになった主題的な伝統」のひとつまで (も) あるローエルに焦点を据えるアメリカ思想史の研究である。

さて、あと残されている主な問いは、序論よりはむしろ第 1 章で直面したものである。オリヴァー・ウェンデル・ホームズ博士の追悼文にローエルが記した「寛大なローカリズム」(第 1 章第 4 節参照) とは、ローエル自身にとって、いったいいかなる意味を持つものだったのか——この問いをめぐるあらためて手短かに考察しつつ、最後にエピローグとして初代台長死後のローエル天文台の運命を瞥見することをもって本論を終えよう。

*

自らのロマンティック・サイエンスは想像上の線にぶらさがる架空の城にすぎないのかもしれないという

-
2. Darko Suvin, *Metamorphoses of Science Fiction: On the Poetics and History of a Literary Genre*, ed. Gerry Canavan (Oxford: Peter Lang, 2016), 20; 邦訳『SF の変容——ある文学ジャンルの詩学と歴史』大橋洋一訳、国文社、1991 年、42 頁。原文は全文体がイタリックになっているが、引用では再現しなかった。
 3. Ibid., 79; 邦訳、115 頁。
 4. Ibid., 82; 邦訳、118 頁。

本論 210-14 頁の内容については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、370-79 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

図版

LOHPに含まれる画像、およびLOA所蔵史料を撮影したりスキャンしたりした画像の本論での利用については、LOAのローレン・アムンソン氏より許可をいただいた。記して感謝申し上げます。

図1は、インターネット公表に対する許諾を得られていないため省略。

図1 パーシヴァル・ローエルの肖像写真 (LOHP)。

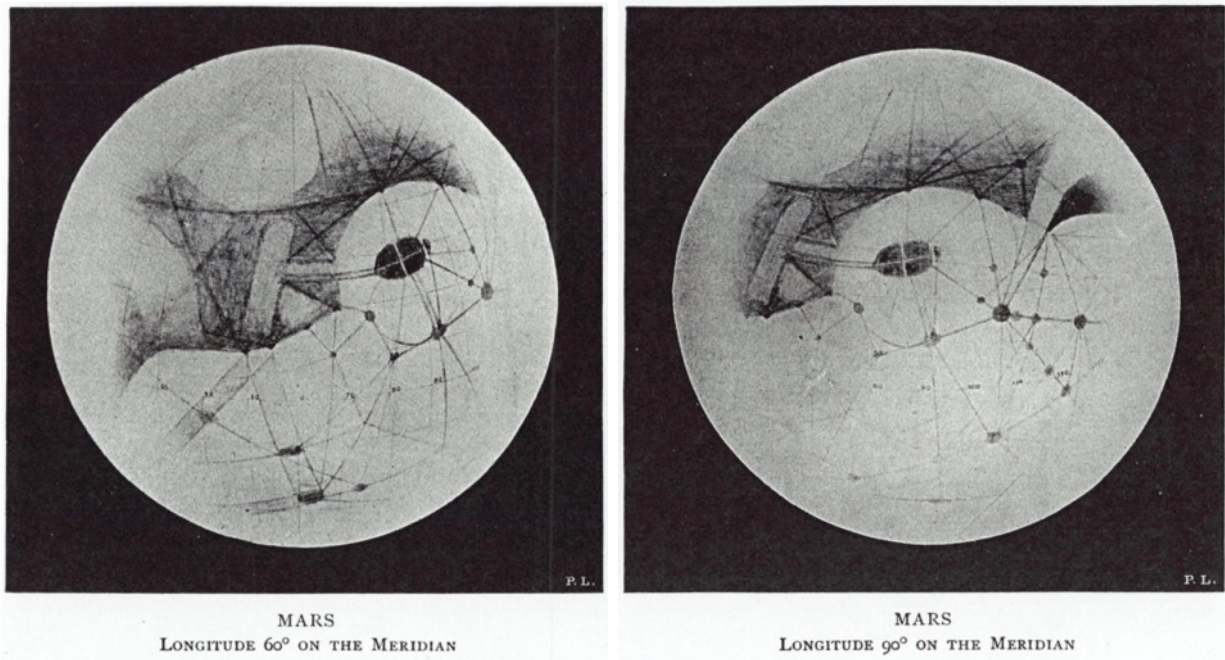


図2 (左)、3 (右) 『火星』に掲載されたローエルによる火星のドローイング (*Mars*, plates 5-6)。

図 4 は、インターネット公表に対する許諾を得られていないため省略。

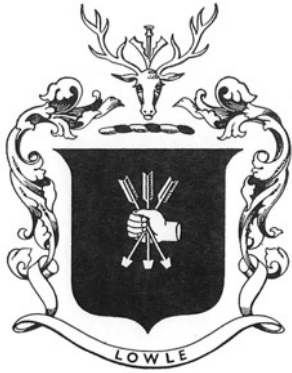


図5 ローエル家の家紋 (FG, title page)。

図6 は、インターネット公表に対する許諾を得られていないため省略。

図6 報聘使の一行 (LOHP)。前列左から順にローエル、^{ホンヨウシキ}洪英植 (全権副大臣)、^{ミンヨンイク}閔泳翊 (全権大臣)、ひとり飛ばして呉礼堂 (通訳)。後列左から2番目が宮岡恒次郎 (通訳)。





図7（上）、8（中）、9（下） 『朝鮮』に掲載された写真（Museum of Fine Arts, Boston Photograph Library）。

図 10-12 は、インターネット公表に対する許諾を得られていないため省略。

図 10（上左）、11（上右）、12（下） 『能登』で語られる旅のさなかにローエルが撮った写真（LOHP）。

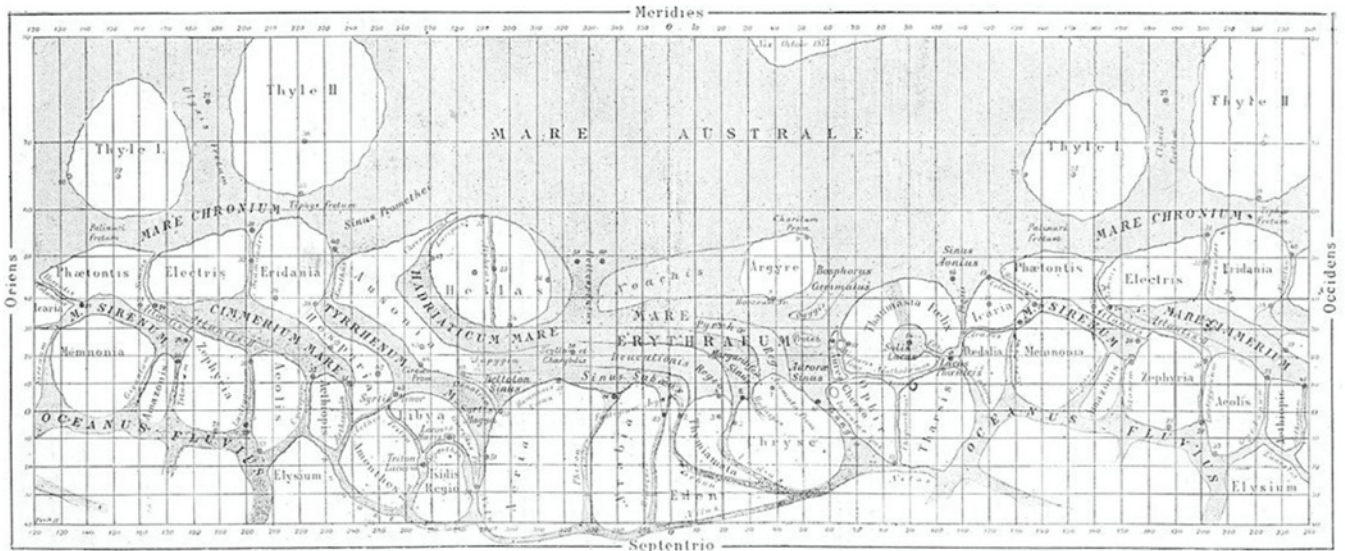


図 13 スキアパレリの論文に添えられた火星の地図 (Schiaparelli, “Osservazioni astronomiche e fisiche,” table 3)。

図 14 は、インターネット公表に対する許諾を得られていないため省略。

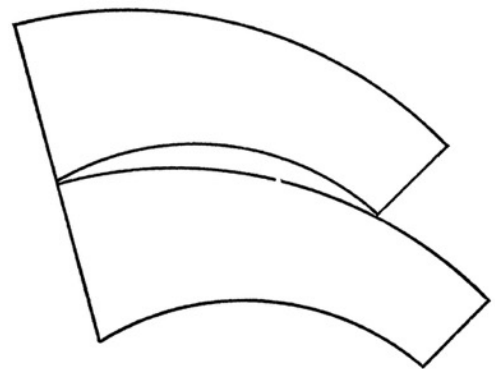


図 14 (左) フラマリオン『火星とその棲息可能性の諸条件』の巻頭にローエルが鉛筆で書き込んだ“Hurry” (著者撮影)。上部には同じく鉛筆で“Percival Lowell / Dec. '93”と書かれてあり、その下に青字で“from Aunt Mary”とある。ローエルが所有したこの本は LOA に収められている。

図 15 (右) ジャストロー錯視 (Joseph Jastrow, “Studies from the Laboratory of Experimental Psychology of the University of Wisconsin—II,” *American Journal of Psychology* 4, no. 3 [April 1892]: 398, fig. 28)。上下に並ぶふたつの図形はまったく同じ大きさだが、下のほうが大きく見える。

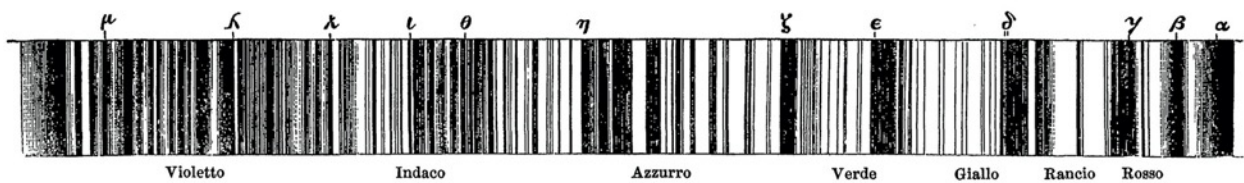
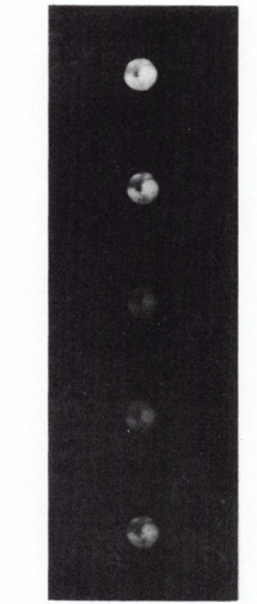


図 16 セッキによるベテルギウスのスペクトルのドロ잉 (Angelo Secchi, “Spectrum of α Orions,” *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society* 26, no. 5 [March 1866]: 214)。スペクトルの下に書かれている単語は、左から順に紫、藍、青、緑、黄、橙、赤を意味する。



Photograph of Mars by C. O. Lampland. May 11^d 19^h 44^m -48^m G. M. T. $\lambda=303^{\circ}$



Photograph of a drawing of Mars by P. L. May 11^d 18^h 35^m G. M. T. $\lambda=284^{\circ}$

図 17 1905年5月11日にランプランドが撮った火星の写真と、同日にローエルが描いた火星のドローイングの写真 (Percival Lowell, "The Canals of Mars—Photographed," *Lowell Observatory Bulletin* 1, no. 21 [1905]: 136)。左の写真には火星の像が縦に5つ並んでいるが、中央と下から2番目はほとんど見えない。

NEW YORK HERALD, SUNDAY, JULY 30, 1905.—MAGAZINE SECTION.

PHOTOGRAPHING The CANALS OF MARS

Professor Percival Lowell's Feet Confirm The Theory of The Existence of Miles in Length Difficulties Overcome in Taking Pictures of The Fiery Red Planet

By Professor George R. Downer, Jr., of Columbia University.

PHOTOGRAPH OF A DRAWING OF MARS.

PHOTOGRAPH OF THE PLANET MARS.

LIBRA

MARS

PLANET MARS.

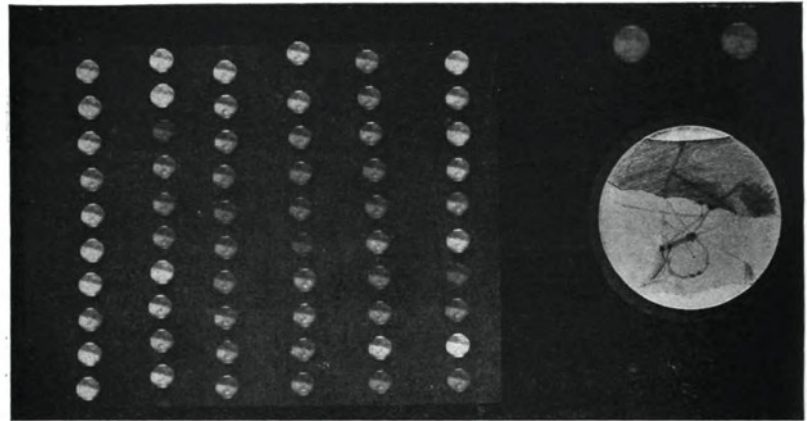
DATE OF MARS IN 1905.

People's Population.

図 18 火星の運河が撮影されたことを報じる1905年7月30日の『ニューヨーク・ヘラルド』の紙面 ("Photographing the Canals of Mars," *New York Herald*, July 30, 1905)。中央の大きな火星の画像の下には「火星の写真」というキャプションが付されているものの、実際にはこれは写真ではなくドローイングである。



図 19 (左) リーがウェルズの「火星に生きるものたち」のために描いた挿絵 (Illustration by William R. Leigh for Wells, "Things That Live on Mars," 334)。

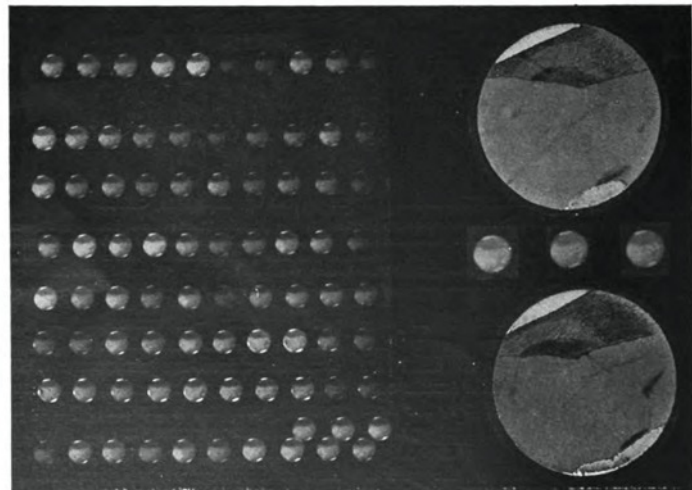


No. 1. TAKEN JULY 13, WHEN MARS WAS NEAREST THE EARTH. THIS PRINT REPRESENTS THE UNIFORM SIZE OF THE PLATES USED, BUT THE NUMBER OF IMAGES VARIES, DUE TO DIFFERENCE IN MAGNIFICATION

REGION OF "ELYSIUM." LONGITUDE OF THE CENTER OF THE PHOTOGRAPH, 215°. PROFESSOR LOWELL'S DRAWING OF HIS CORRESPONDING VISUAL OBSERVATION AT THE SAME DATE. ABOVE ENLARGEMENTS OF THE IMAGES TO 2 DIAMETERS

like trying to photograph distinctly across a heated stove or through the shimmering air above a sun-warmed beach.

Instantaneity, to secure the fleeting moments of steadiness in the image, is essential, and yet instantaneity is what the



No. 2. THESE PRINTS SHOW NUMEROUS DELICATE CANALS RUNNING FROM THE DARK BANDS ACROSS THE LIGHT EQUATORIAL REGION

REGION OF THE "MARE CIMMERIUM." LONGITUDE OF THE CENTER OF THE PHOTOGRAPH, 185°. "SINUS TITANUM" ON THE LEFT; "ELYSIUM" ON THE RIGHT. ENLARGEMENTS, AND PROFESSOR LOWELL'S CORRESPONDING DRAWINGS

図 20 (右) 1907年12月の『センチュリー』に載ったローエルの記事の誌面 (Lowell, "New Photographs of Mars," 306)。3つの大きな円はローエルによる火星のドローイングであり、残りの小さな円はすべてアンデス遠征で撮られた火星の写真である。

図 21-22 は、インターネット公表に対する許諾を得られていないため省略。

図 21 (左)、22 (右) 1909年10月9日付のローエルへの手紙にアントニアディが同封した火星のドローイング (E. M. Antoniadi to Percival Lowell, October 9, 1909, PLC)。左が「すばらしい精細度」、右が「ゆらぎのある精細度」。

本論 223–26 頁の「パーシヴァル・ローエル略年譜」については、以下を参照のこと。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020 年、巻末 13–17 頁。

(ISBN: 978-4-7917-7245-2)

文献表

「凡例」で述べたとおり、本論で引用ないし参照した文献の書誌情報は、当該文献が最初に登場する註に——また頻出するものは「略号」に——記してある。アーカイヴ史料に関しても同様である。したがってこの文献表には、著者を特定しがたい文献、事典所収の個々の記事、アーカイヴ史料などは原則として含めなかった。以下の文献のうち、「略号」に挙げられているものは当該の略号を「[SFE]」のようなかたちで項目末尾に示した。

ローエルの文献（時系列順）

- Lowell, Percival. "The New Palace at Söul." *Science* 5, no. 112 (March 27, 1885): 251–53.
- . "The Hong Sal Mun, or The Red Arrow Gate." *Science* 5, no. 121 (May 29, 1885): 438–40.
- . *Chosön: The Land of the Morning Calm; A Sketch of Korea*. Boston: Ticknor, 1886. [Chosön]
- . "A Korean Coup d'État." *Atlantic Monthly* 58, no. 349 (November 1886): 599–618. 伊吹浄訳「朝鮮クーデター」、伊吹『日本と朝鮮の暗殺』所収、31–97頁。
- . "The Soul of the Far East." Pts. 1–4. *Atlantic Monthly* 60, no. 359 (September 1887): 405–13; no. 360 (October 1887): 515–24; no. 361 (November 1887): 614–24; no. 362 (December 1887): 836–49.
- . "A Visit to Shirane San." *Appalachia* 5, no. 2 (June 1888): 87–108.
- . *The Soul of the Far East*. Boston: Houghton, Mifflin, 1888. 川西瑛子訳『極東の魂』、公論社、1977年。[SFE]
- . "The Fate of a Japanese Reformer." *Atlantic Monthly* 66, no. 397 (November 1890): 680–93. 中村都史子訳「ある日本改革者の運命——森有礼の暗殺」、伊吹『日本と朝鮮の暗殺』所収、99–148頁。
- . "Noto: An Unexplored Corner of Japan." Pts. 1–4. *Atlantic Monthly* 67, no. 399 (January 1891): 1–15; no. 400 (February 1891): 175–91; no. 401 (March 1891): 364–79; no. 402 (April 1891): 482–500.
- . *Noto: An Unexplored Corner of Japan*. Boston: Houghton, Mifflin, 1891. 宮崎正明訳『NOTO——能登・人に知られぬ日本の辺境』、十月社、1991年。
- . "A Comparison of the Japanese and Burmese Languages." *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 19 (1891): 583–97.
- . "Esoteric Shintō." Pts. 1–4. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 21 (1893): 106–35, 152–97, 241–70; 22 (1894): 1–26.
- . "Mars." Pts. 1–4. *Astronomy and Astro-Physics* 13, no. 7 (August 1894): 538–53; no. 8 (October 1894): 645–50; no. 9 (November 1894): 740; no. 10 (December 1894): 814–21.
- . "Mars." Pts. 1–6. *Popular Astronomy* 2, no. 1 (September 1894): 1–8; no. 2 (October 1894): 52–56; no. 3 (November 1894): 97–100; no. 4 (December 1894): 154–60; no. 6 (February 1895): 255–61; no. 8 (April 1895): 343–48.
- . *Occult Japan, or The Way of the Gods: An Esoteric Study of Japanese Personality and Possession*. Boston: Houghton, Mifflin, 1894. 菅原壽清訳『オカルト・ジャパン——外国人の見た明治の御嶽行者と憑霊文化』、岩田書院、2013年。平岡厚+上村和也訳『神々への道——米国人天文学者の見た神秘的国・日本』、国書刊行会、2013年。[OJ]
- . "Oliver Wendell Holmes." *PAmAc* 30 (1895): 555–62.
- . "Mars." Pts. 1–4. *Atlantic Monthly* 75, no. 451 (May 1895): 594–603; no. 452 (June 1895): 749–58; 76, no. 453 (July 1895): 106–19; no. 454 (August 1895): 223–35.
- . *Mars*. Boston: Houghton, Mifflin, 1895. [Mars]
- . "Augustus Lowell." *PAmAc* 37, no. 23 (August 1902): 635–54.
- . "The Markings on Venus." *Astronomische Nachrichten* 160, no. 3823 (October 22, 1902): 129–31.
- . *The Solar System: Six Lectures Delivered at the Massachusetts Institute of Technology in December, 1902*. Boston: Houghton, Mifflin, 1903.
- . "The Canals of Mars—Photographed." *Astronomische Nachrichten* 169, no. 4035 (July 24, 1905): 47.
- . "The Canals of Mars—Photographed." *Lowell Observatory Bulletin* 1, no. 21 (1905): 134–36.
- . *Drawings of Mars, 1905*. Flagstaff, AZ: Lowell Observatory, 1906.
- . *Mars and Its Canals*. New York: Macmillan, 1906. [MC]
- . "The Canals of Mars, Optically and Psychologically Considered: A Reply to Professor Newcomb." *Astrophysical Journal* 26, no. 3 (October 1907): 131–40.

- . “Mars as the Abode of Life.” Pts. 1–6. *Century Magazine* 75, no. 1 (November 1907): 113–26; no. 4 (February 1908): 499–510; no. 5 (March 1908): 731–43; no. 6 (April 1908): 911–22; 76, no. 1 (May 1908): 127–41; no. 2 (June 1908): 292–303.
- . “New Photographs of Mars: Taken by the Astronomical Expedition to the Andes and Now First Published.” *Century Magazine* 75, no. 2 (December 1907): 303–10.
- . *Mars as the Abode of Life*. New York: Macmillan, 1908.
- . “The Plateau of the San Francisco Peaks in Its Effect on Tree-Life.” Pts. 1–2. *Bulletin of the American Geographical Society* 41, no. 5 (1909): 257–70; no. 6 (1909): 365–82.
- . “The Revelation of Evolution.” *Atlantic Monthly* 104, no. 2 (August 1909): 174–83.
- . “The Planet Venus.” *Popular Science Monthly* 75 (December 1909): 521–36.
- . *The Evolution of Worlds*. New York: Macmillan, 1909.
- . “Lowell Observatory Photographs of the Planets.” *Notices of the Proceedings at the Meetings of the Members of the Royal Institution of Great Britain with Abstracts of the Discourses Delivered at the Evening Meetings* 19, no. 104 (November 1912): 815–22.
- . “The Origin of the Planets.” *Memoirs of the American Academy of Arts and Sciences* 14, no. 1 (June 1913): 2–16.
- . “Memoir on a Trans-Neptunian Planet.” *Memoirs of the Lowell Observatory* 1, no. 1 (1915): 1–105.
- . *Immigration Versus the United States: An Address Delivered at Phoenix, Arizona, February 17, 1916*. Lynn, MA: Thos. P. Nichols, 1916.
- . *Percival Lowell—Collected Writings on Japan and Asia, Including Letters to Amy Lowell and Lafcadio Hearn*. Edited by David Strauss. Vol. 1, *Journal and Newspaper Articles + Letters*. Tokyo: Edition Synapse, 2006. [PLCW1]

欧語文献（アルファベット順）

- Adams, John Quincy. First Annual Message. December 6, 1825. <https://millercenter.org/the-presidency/presidential-speeches/december-6-1825-first-annual-message>.
- Adams, Henry. *The Education of Henry Adams*. In *Novels, Mont Saint Michel, The Education*, edited by Ernest Samuels and Jayne N. Samuels, 715–1192. New York: Library of America, 1983. 刈田元司訳『ヘンリー・アダムズの教育』、教育書林、1995年。
- Amory, Cleveland. *The Proper Bostonians*. New York: E. P. Dutton, 1947.
- Antoniadi, E. M. “Fifth Interim Report for 1909, Dealing with the Fact Revealed by Observation That Prof. Schiaparelli’s ‘Canal’ Network Is the Optical Product of the Irregular Minor Details Diversifying the Martian Surface.” *JBAA* 20, no. 3 (January 1910): 136–41.
- . “Note on Some Photographic Images of Mars Taken in 1907 by Professor Lowell.” *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society* 69, no. 2 (December 1908): 110–14.
- . “Sixth Interim Report for 1909, Dealing with Some Further Notes on the So-Called ‘Canals.’” *JBAA* 20, no. 4 (February 1910): 189–94.
- Appleton, Nathan. *Introduction of the Power Loom, and Origin of Lowell*. Lowell, MA: B. H. Penhallow, 1858.
- Bannister, Robert C. *Social Darwinism: Science and Myth in Anglo-American Social Thought*. Philadelphia: Temple University Press, 1979.
- Beard, George M. *American Nervousness: Its Causes and Consequences; A Supplement to Nervous Exhaustion (Neurasthenia)*. New York: G. P. Putnam’s Sons, 1881.
- Beckert, Sven. *Empire of Cotton: A Global History*. New York: Alfred A. Knopf, 2014.
- Beck, Peter J. *The War of the Worlds: From H. G. Wells to Orson Welles, Jeff Wayne, Steven Spielberg and Beyond*. London: Bloomsbury Academic, 2016.
- Bell, Michael Davitt. *The Development of American Romance: The Sacrifice of Relation*. Chicago: University of Chicago Press, 1980.
- Bell, Whitfield J., Jr. “Astronomical Observatories of the American Philosophical Society, 1769–1843.” *Proceedings of the American Philosophical Society* 108, no. 1 (Feb 28, 1964): 7–14.
- Bender, Thomas. *Toward an Urban Vision: Ideas and Institutions in Nineteenth Century America*. 1975. Reprint, Baltimore:

- Johns Hopkins University Press, 1982.
- Benfey, Christopher. *The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of Old Japan*. New York: Random House, 2003. 大橋悦子訳『グレイト・ウェイヴ——日本とアメリカの求めたもの』、小学館、2007年。
- Berger, Peter L., and Thomas Luckmann. *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. 1966. Reprint, New York: Anchor Books, 1967. 山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』、新曜社、2003年。
- Berman, Milton. *John Fiske: The Evolution of a Popularizer*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1961.
- Biagioli, Mario. *Galileo, Courtier: The Practice of Science in the Culture of Absolutism*. Chicago: University of Chicago Press, 1993.
- Bisland, Elizabeth. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*. 2 vols. Boston: Houghton, Mifflin, 1906.
- Blanchard, Mary Warner. *Oscar Wilde's America: Counterculture in the Gilded Age*. New Haven, CT: Yale University Press, 1998.
- Blum, Deborah. *Ghost Hunters: William James and the Search for Scientific Proof of Life after Death*. New York: Penguin Books, 2006. 鈴木恵訳『幽霊を捕まえようとした科学者たち』、文春文庫、2010年。
- Bollard, John K., ed. *Pronouncing Dictionary of Proper Names: Pronunciations for More than 28,000 Proper Names, Selected for Currency, Frequency, or Difficulty of Pronunciation*. 2nd ed. Detroit, MI: Omnigraphics, 1998.
- Bowers, Fredson. "The Text of *The Varieties of Religious Experience*." In *The Varieties of Religious Experience*, by William James, 520–87. *The Works of William James*, edited by Frederick H. Burkhardt et al. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1985.
- Brecht, Bertolt. *Leben des Galilei (1955/56)*. In *Werke: Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe*, edited by Werner Hecht et al., vol. 5, *Stücke 5*, 187–290. Berlin: Aufbau-Verlag / Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1988. 岩淵達治訳「ガリレイの生涯」、岩淵達治訳『ブレヒト戯曲全集』第4巻所収、未来社、1998年、203–360頁。
- Brent, Joseph. *Charles Sanders Peirce: A Life*. Rev. ed. Bloomington: Indiana University Press, 1998. 有馬道子訳『パースの生涯』、新書館、2004年。
- Briggs, Asa. *Victorian Cities*. Rev. ed. 1968. Reprint, London: Penguin Books, 1990.
- Brooks, Van Wyck. *The Flowering of New England*. New York: E. P. Dutton, 1936. 石川欣一訳『花ひらくニュー・イングランド』、ダヴィッド社、1953年。
- . *New England: Indian Summer*. New York: E. P. Dutton, 1940. 石川欣一訳『小春日和のニュー・イングランド』、ダヴィッド社、1953年。
- Brown, Mike. *How I Killed Pluto and Why It Had It Coming*. New York: Spiegel and Grau, 2010. 梶山あゆみ訳『冥王星を殺したのは私です』、飛鳥新社、2012年。
- Bruce, Robert V. *The Launching of Modern American Science, 1846–1876*. New York: Alfred A. Knopf, 1987.
- Brush, Stephen G. *Fruitful Encounters: The Origin of the Solar System and of the Moon from Chamberlin to Apollo*. A History of Modern Planetary Physics 3. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- . *Nebulous Earth: The Origin of the Solar System and the Core of the Earth from Laplace to Jeffreys*. A History of Modern Planetary Physics 1. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Burroughs, Edgar Rice. *A Princess of Mars*. New York: Grosset and Dunlap, 1917. 小笠原豊樹訳『火星のプリンセス』、小学館文庫、2012年。
- Butler, Leslie. "Reconstructions in Intellectual and Cultural Life." In *Reconstructions: New Perspectives on the Postbellum United States*, edited by Thomas J. Brown, 172–205. New York: Oxford University Press, 2006.
- Buzard, James. "The Grand Tour and After (1660–1840)." In *The Cambridge Companion to Travel Writing*, edited by Peter Hulme and Tim Youngs, 37–52. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- Byerly, W. E. "James Mills Peirce." *Harvard Graduates' Magazine* 14, no. 56 (June 1906): 573–77.
- Cameron, E. H. *Samuel Slater, Father of American Manufactures*. Portland, ME: Bond Wheelwright, 1960.
- Campbell, W. W. "Concerning an Atmosphere on Mars." *PASP* 6, no. 38 (December 1894): 273–83.
- . "The Problem of Mars." *PASP* 30, no. 174 (March 1918): 133–46.
- . "Recent Observations of the Spectrum of Mars." *PASP* 9, no. 55 (April 1897): 109–12.
- . Review of *Mars*, by Percival Lowell. *Science* 4, no. 86 (August 21, 1896): 231–38.
- . "A Review of the Spectroscopic Observations of Mars." *Astrophysical Journal* 2, no. 1 (June 1895): 28–44.

- . “The Spectrum of Mars.” *PASP* 6, no. 37 (August 1894): 228–36.
- Cannon, Walter Bradford. “Henry Pickering Bowditch, 1840–1911.” *Biographical Memoirs* (National Academy of Sciences) 17, no. 8 (1922): 181–96.
- Capozzola, Christopher. *Uncle Sam Wants You: World War I and the Making of the Modern American Citizen*. New York: Oxford University Press, 2008.
- Cardarelli, François. *Encyclopaedia of Scientific Units, Weights and Measures: Their SI Equivalences and Origins*. London: Springer, 2003.
- Carr, John Dickson. *The Life of Sir Arthur Conan Doyle*. London: John Murray, 1949. 大久保康雄訳『コナン・ドイル』、ハヤカワ・ポケット・ミステリ、1993年（2013年改版）。
- Chandler, Seth C. “On the Observations of Variable Stars with the Meridian-Photometer of the Harvard College Observatory.” *Astronomische Nachrichten* 134, no. 3214 (February 28, 1894): 355–59.
- Chay, Jongsuk. *Diplomacy of Asymmetry: Korean-American Relations to 1910*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1990.
- Chudacoff, Howard P. *The Age of Bachelor: Creating an American Subculture*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1999.
- Clark, John Spencer. *The Life and Letters of John Fiske*. 2 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1917.
- [Clerke, Agnes Mary]. “New Views about Mars.” *Edinburgh Review* 184, no. 378 (October 1896): 368–85.
- Cline, Platt. *They Came to the Mountain: The Story of Flagstaff’s Beginnings*. Flagstaff: Northern Arizona University with Northland Press, 1976.
- Cohen, I. Bernard, ed. *Benjamin Peirce: “Father of Pure Mathematics” in America*. New York: Arno Press, 1980.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Biographia Literaria, or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions*. Edited by James Engell and W. Jackson Bate. Vol. 7 of *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*. London: Routledge and Kegan Paul / Princeton, NJ: Princeton University Press, 1969–2002. 東京コウリッジ研究会訳『文学的自叙伝——文学者としての我が人生と意見の伝記的素描』、法政大学出版局、2013年。
- Crary, Jonathan. *Techniques of the Observer: On Vision and Modernity in the Nineteenth Century*. Cambridge, MA: MIT Press, 1990. 遠藤知巳訳『観察者の系譜——視覚空間の変容とモダニティ』、以文社、2005年、
- Croce, Paul Jerome. *Science and Religion in the Era of William James*. Vol. 1, *Eclipse of Certainty, 1820–1880*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1995.
- Crowe, Michael J. *The Extraterrestrial Life Debate, 1750–1900: The Idea of a Plurality of Worlds from Kant to Lowell*. 1986. Reprint, Mineola, NY: Dover, 1999. 鼓澄治+山本啓二+吉田修訳『地球外生命論争 1750–1900——カントからロウエルまでの世界の複数性をめぐる思想大全』全3巻、工作舎、2001年。[MJC]
- Crowley, John W. *The Black Heart’s Truth: The Early Career of W. D. Howells*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1985.
- . *The Dean of American Letters: The Late Career of William Dean Howells*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1999.
- Cunningham, Andrew, and Nicholas Jardine, eds. *Romanticism and the Sciences*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Dale, Peter Allan. *In Pursuit of a Scientific Culture: Science, Art, and Society in the Victorian Age*. Madison: University of Wisconsin Press, 1989.
- Dalzell, Robert F., Jr. *Enterprising Elite: The Boston Associates and the World they Made*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1987.
- Damon, S. Foster. *Amy Lowell: A Chronicle with Extracts from Her Correspondence*. Hamden, CT: Archon Books, 1966.
- Daston, Lorraine, and Peter Galison. *Objectivity*. 2007. Reprint, New York: Zone Books, 2010.
- De Waal, Cornelis. *Peirce: A Guide for the Perplexed*. London: Bloomsbury, 2013. 大沢秀介訳『パースの哲学について本当のことを知りたい人のために』、勁草書房、2017年。
- DeVorkin, David. “Stellar Evolution and the Origin of the Hertzsprung-Russell Diagram.” In *GHA4A*, 90–108.
- . “W. W. Campbell’s Spectroscopic Study of the Martian Atmosphere.” *Quarterly Journal of the Royal Astronomical Society* 18, no. 1 (March 1977): 37–53.
- Dick, Steven J. *The Biological Universe: The Twentieth-Century Extraterrestrial Life Debate and the Limits of Science*.

- Cambridge: Cambridge University Press, 1996. [SJD]
- . *Plurality of Worlds: The Origins of the Extraterrestrial Life Debate from Democritus to Kant*. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- . *Sky and Ocean Joined: The U.S. Naval Observatory, 1830–2000*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Drake, Stillman. *Galileo at Work: His Scientific Biography*. Chicago: University of Chicago Press, 1978. 田中一郎訳『ガリレオの生涯』全3巻、共立出版、1984–85年。
- Dublin, Thomas. *Women at Work: The Transformation of Work and Community in Lowell, Massachusetts, 1826–1860*. 2nd ed. New York: Columbia University Press, 1993.
- Eagles, Charles W. *The Price of Defiance: James Meredith and the Integration of Ole Miss*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2009.
- Eddy, John A. “The Maunder Minimum.” *Science* 192, no. 4245 (June 18, 1976): 1189–202.
- Edel, Charles N. *Nation Builder: John Quincy Adams and the Grand Strategy of the Republic*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2014.
- Edes, Robert T. “The New England Invalid.” Pts. 1–3. *Boston Medical and Surgical Journal* 133, no. 3 (July 18, 1895): 53–57; no. 4 (July 25, 1895): 77–81; no. 5 (August 1, 1895): 101–7.
- Eliot, Charles William. “Inaugural Address as President of Harvard College.” In *Educational Reform: Essays and Addresses*, 1–38. New York: Century, 1898.
- . “The New Education: Its Organization.” Pts. 1–2. *Atlantic Monthly* 23, no. 136 (February 1869): 203–20; no. 137, (March 1869): 358–67.
- . “Reminiscences of Peirce.” *American Mathematical Monthly* 32, no. 1 (January 1925): 1–4.
- Emerson, Edward Waldo. *The Early Years of the Saturday Club, 1855–1870*. Boston: Houghton Mifflin, 1918.
- Emerson, Ralph Waldo. “Boston.” In *Natural History of Intellect, and Other Papers*, 181–211. Vol. 12 of *Complete Works*.
- . “The Fugitive Slave Law.” In *Miscellanies, 177–244*. Vol. 11 of *Complete Works*. 酒本雅之訳「逃亡奴隷法」、酒本雅之訳『エマソン論文集』下巻所収、岩波文庫、1973年、235–68頁。
- . *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. 12 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1903–4.
- Evans, J. E., and E. Walter Maunder. “Experiments as to the Actuality of the ‘Canals’ Observed on Mars.” *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society* 63, no. 8 (June 1903): 488–99.
- Farrell, Betty G. *Elite Families: Class and Power in Nineteenth-Century Boston*. Albany: State University of New York Press, 1993.
- Faust, Drew Gilpin. *This Republic of Suffering: Death and the American Civil War*. New York: Alfred A. Knopf, 2008. 黒沢眞理子訳『戦死とアメリカ——南北戦争62万人の死の意味』、彩流社、2010年。
- Fiske, John. *Outlines of Cosmic Philosophy, Based on the Doctrine of Evolution, with Criticisms on the Positive Philosophy*. 2 vols. Boston: Houghton, Mifflin, 1874.
- Flagg, Mildred Buchanan. *Boston Authors Now and then: More Members of the Boston Authors Club, 1900–1966*. Cambridge, MA: Dresser, Chapman and Grimes, 1966.
- Flammarion, Camille. *Astronomie populaire: Description générale du ciel*. Rev. ed. Paris: C. Marpon et E. Flammarion, 1890.
- . “Percival Lowell.” *L’astronomie* 30, no. 12 (December 1916): 422–23.
- . “La planète Mars.” Pts. 1–3. *L’astronomie* 1, no. 5 (July 1882): 161–75; no. 6 (August 1882): 206–16; no. 7 (September 1882): 256–68.
- . “La planète Mars.” *L’astronomie* 13, no. 9 (September 1894): 321–29.
- . *La planète Mars et ses conditions d’habitabilité*. Paris: Gauthier-Villars et fils, 1892.
- . “La Société astronomique de France.” *Bulletin de la Société astronomique de France* 18, no. 5 (May 1904): 206–12.
- Foner, Eric. *Reconstruction: America’s Unfinished Revolution, 1863–1877*. 1988. Reprint, New York: Harper Perennial, 2014.
- Fouché, Maurice. “La Fête du Soleil.” *Bulletin de la Société astronomique de France* 18, no. 7 (July 1904): 297–305
- Fredrickson, George M. *The Inner Civil War: Northern Intellectuals and the Crisis of the Union*. 1965. Reprint, Urbana: University of Illinois Press, 1993.
- Freud, Sigmund. “Das Unbehagen in der Kultur.” In *Gesammelte Werke*, edited by Anna Freud et al., vol. 14, *Werke aus den Jahren 1925–1931*, 7th ed., 419–506. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag, 1991. 嶺秀樹+高田珠樹訳「文化の中の居

- 心地悪さ』、『フロイト全集』第20巻（高田珠樹編）所収、岩波書店、2011年、65–162頁。
- Fulford, Tim, Debbie Lee, and Peter J. Kitson. *Literature, Science and Exploration in the Romantic Era: Bodies of Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- Galton, Francis. “Composite Portraits.” *Nature* 18, no. 447 (May 23, 1878): 97–100.
- Gay, Peter. *The Bourgeois Experience: Victoria to Freud*. Vol. 1, *Education of the Senses*. 1984. Reprint, New York: W. W. Norton, 1999. 篠崎実＋鈴木実佳＋原田大介訳『官能教育』全2巻、みすず書房、1999年。
- Geiger, Roger L. *The History of American Higher Education: Learning and Culture from the Founding to World War II*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2015.
- . *To Advance Knowledge: The Growth of American Research Universities, 1900–1940*. New York: Oxford University Press, 1986.
- Genuth, Sara Schechner. “From Heaven’s Alarm to Public Appeal: Comets and the Rise of Astronomy at Harvard.” In *Science at Harvard University: Historical Perspectives*, edited by Clark A. Elliot and Margaret W. Rossiter, 28–54. Bethlehem, PA: Lehigh University Press, 1992.
- Gingerich, Owen, ed. *Astrophysics and Twentieth-Century Astronomy to 1950: Part A*. The General History of Astronomy 4. Cambridge: Cambridge University Press, 1984. [GHA4A]
- Goodman, Susan. *Republic of Words: The “Atlantic Monthly” and Its Writers, 1857–1925*. Hanover, NH: University Press of New England, 2011.
- Gosling, F. G. *Before Freud: Neurasthenia and the American Medical Community, 1870–1910*. Urbana: University of Illinois Press, 1987.
- Gould, George M. *Concerning Lafcadio Hearn*. Philadelphia: George W. Jacobs, 1908.
- Greenslet, Ferris. *The Lowells and Their Seven Worlds*. Boston: Houghton Mifflin, 1946. [FG]
- Griffis, William Elliot. Review of *OJ*. *New World* 4, no. 14 (June 1895): 382–84.
- Grosser, Morton. *The Discovery of Neptune*. 1962. Reprint, New York: Dover, 1979. 高田紀代志訳『海王星の発見』、恒星社厚生閣、1985年
- Guthke, Karl S. *The Last Frontier: Imagining Other Worlds, from the Copernican Revolution to Modern Science Fiction*. Translated by Helen Atkins. Ithaca, NY: Cornell University Press, 1990. [KSG]
- . *Der Mythos der Neuzeit: Das Thema der Mehrheit der Welten in der Literatur- und Geistesgeschichte von der kopernikanischen Wende bis zur Science Fiction*. Bern: Francke, 1983.
- Habegger, Alfred. *The Father: A Life of Henry James, Sr.* Amherst: University of Massachusetts Press, 1994.
- . *Gender, Fantasy, and Realism in American Literature*. New York: Columbia University Press, 1982.
- Hale, George Ellery. “The Aim of the Yerkes Observatory.” *Astrophysical Journal* 6, no. 4 (November 1897): 310–21.
- . *The Study of Stellar Evolution: An Account of Some Recent Methods of Astrophysical Research*. Chicago: University of Chicago Press, 1908.
- Hall, Asaph. “On the Secular Perturbations of the Planets.” *American Journal of Science and Arts*, 2nd ser., 50, no. 150 (November 1870): 370–72.
- Hannavy, John, ed. *Encyclopedia of Nineteenth-Century Photography*. New York: Routledge, 2007.
- Haskell, Thomas L. *The Emergence of Professional Social Science: The American Social Science Association and the Nineteenth-Century Crisis of Authority*. 1977. Reprint, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2000.
- Haskins, Charles H. “The Graduate School of Arts and Sciences, 1872–1929.” In Morison, *Development of Harvard University*, 451–62.
- Hawkins, Hugh. *Between Harvard and America: The Educational Leadership of Charles W. Eliot*. New York: Oxford University Press, 1972.
- Hawkins, Mike. *Social Darwinism in European and American Thought, 1860–1945: Nature as Model and Nature as Threat*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Hearn, Lafcadio. *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*. Edited by Elizabeth Bisland. Boston: Houghton Mifflin, 1910.
- [———]. Review of *OJ*. *Atlantic Monthly* 75, no. 452 (June 1895): 837–41.
- Hearnshaw, John B. *The Analysis of Starlight: Two Centuries of Astronomical Spectroscopy*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press, 2014.

- . *The Measurement of Starlight: Two Centuries of Astronomical Photometry*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Henning, Joseph M. *Outposts of Civilization: Race, Religion, and the Formative Years of American-Japanese Relations*. New York: New York University Press, 2000. 空井護訳『アメリカ文化の日本経験——人種・宗教・文明と形成期米日関係』、みすず書房、2005年。
- Hentschel, Klaus. *Mapping the Spectrum: Techniques of Visual Representation in Research and Teaching*. Oxford: Oxford University Press, 2002.
- Heringman, Noah, "Introduction: The Commerce of Literature and Natural History." In *Romantic Science: The Literary Forms of Natural History*, edited by Noah Heringman, 1–19. Albany: State University of New York Press, 2003.
- Hetherington, Norriss S. "Amateur versus Professional: The British Astronomical Association and the Controversy over Canals on Mars." *JBAA* 86, no. 4 (June, 1976): 303–8.
- Heymann, C. David. *American Aristocracy: The Lives and Times of James Russell, Amy, and Robert Lowell*. New York: Dodd, Mead, 1980.
- Higham, John. "The Reorientation of American Culture in the 1890's." In *Writing American History: Essays on Modern Scholarship*, 73–102. Bloomington: Indiana University Press, 1970.
- . *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860–1925*. 1955. Reprint, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 2011.
- Hillegas, Mark R. "Martians and Mythmakers: 1877–1938." In *Challenges in American Culture*, edited by Ray B. Browne, Larry N. Landrum, and William K. Bottorff, 150–64. Bowling Green, OH: Bowling Green University Popular Press, 1970.
- . "Victorian 'Extraterrestrials.'" In *The Worlds of Victorian Fiction*, edited by Jerome H. Buckley, 400–411. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1975.
- Hockey, Thomas, ed. *Biographical Encyclopedia of Astronomers*. 2nd ed. New York: Springer, 2014. [BEA]
- Hofstadter, Richard. *Anti-intellectualism in American Life*. New York: Vintage Books, 1963. 田村哲夫訳『アメリカの反知性主義』、みすず書房、2003年。
- . *Social Darwinism in American Thought*. Rev. ed. 1955. Reprint, Boston: Beacon Press, 1992. 後藤昭次訳『アメリカの社会進化思想』、研究社叢書、1973年
- Hogan, Edward R. *Of the Human Heart: A Biography of Benjamin Peirce*. Bethlehem, PA: Lehigh University Press, 2008. [ERH]
- Holden, Edward S. "Bright Projections at the Terminator of Mars." *PASP* 6, no. 38 (December 1894): 285–86.
- . "The Lowell Observatory, in Arizona." *PASP* 6, no. 36 (June 1894): 160–69.
- Holmes, Oliver Wendell. *The Autocrat of the Breakfast-Table*. Vol. 1 of *Works*.
- . *Elsie Venner: A Romance of Destiny*. Vol. 5 of *Works*.
- . *The Professor at the Breakfast-Table*. Vol. 2 of *Works*.
- [———]. "The Stereoscope and the Stereograph." *Atlantic Monthly* 3, no. 20 (June 1859): 738–48.
- . *The Works of Oliver Wendell Holmes*. 13 vols. Boston: Houghton, Mifflin, 1892.
- Holmes, Richard. *The Age of Wonder: How the Romantic Generation Discovered the Beauty and Terror of Science*. New York: Pantheon Books, 2008.
- [Holt, Henry]. "Herbert Spencer." *Unpopular Review* 8, no. 16 (October–December 1917): 343–64.
- Houellebecq, Michel. *H. P. Lovecraft: Contre le monde, contre la vie*. 1991. Reprint, Paris: J'ai lu, 2010. 星塾守之訳『H・P・ラヴクラフト——世界と人生に抗って』、国書刊行会、2017年。
- Hovey, Richard B. *John Jay Chapman: An American Mind*. New York: Columbia University Press, 1959.
- Howe, Daniel Walker. *The Unitarian Conscience: Harvard Moral Philosophy, 1805–1861*. 1970. Reprint, Middletown, CT: Wesleyan University Press, 1988.
- Howe, M. A. DeWolfe. *Boston, the Place and the People*. New York: Macmillan, 1903.
- . *John Jay Chapman and His Letters*. Boston: Houghton Mifflin, 1937.
- Howells, William Dean. "A Case in Point." In *Frank Norris: The Critical Reception*, edited by Joseph R. McElrath Jr. and Katherine Knight, 39–41. New York: Burt Franklin, 1981.

- Hoyt, William Graves. *Lowell and Mars*. Tucson: University of Arizona Press, 1976. [WGH]
- . *Planets X and Pluto*. Tucson: University of Arizona Press, 1980.
- . “Vesto Melvin Slipher.” *Biographical Memoirs* (National Academy of Sciences) 52 (1980): 411–49.
- Hubbell, John G., and Robert W. Smith. “Neptune in America: Negotiating a Discovery.” *Journal for the History of Astronomy* 23, no. 4 (November 1992): 262–91.
- Hubble, Edwin. *The Realm of the Nebulae*. New Haven, CT: Yale University Press, 1936. 戒崎俊一訳『銀河の世界』、岩波文庫、1999年。
- Isaac, Joel, James T. Kloppenberg, Michael O’Brien, and Jennifer Ratner-Rosenhagen, eds. *The Worlds of American Intellectual History*. New York: Oxford University Press, 2017.
- Jackson, Myles W. *Spectrum of Belief: Joseph von Fraunhofer and the Craft of Precision Optics*. Cambridge, MA: MIT Press, 2000.
- Jaher, Frederic Cople. “Nineteenth-Century Elites in Boston and New York.” *Journal of Social History* 6, no. 1 (Fall 1972): 32–77.
- Jakab, Peter L. *Visions of a Flying Machine: The Wright Brothers and the Process of Invention*. Washington, DC: Smithsonian Institution Press, 1990.
- James, Henry. Preface to *The American*. In *Literary Criticism: French Writers, Other European Writers, Prefaces to the New York Edition*, edited by Leon Edel, 1053–69. New York: Library of America, 1984. 多田敏男訳「『アメリカ人』への序文」、多田敏男訳『ヘンリー・ジェイムズ『ニューヨーク版』序文集』所収、関西大学出版部、1990年、19–40頁。
- . Review of *Azarian: An Episode*, by Harriet Elizabeth Prescott. In *Literary Criticism: Essays on Literature, American Writers, English Writers*, edited by Leon Edel, 603–13. New York: Library of America, 1984.
- James, Henry. *Charles W. Eliot: President of Harvard University, 1869–1909*. 2 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1930.
- James, Mary Ann. *Elites in Conflict: The Antebellum Clash over the Dudley Observatory*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1987.
- Jameson, Fredric. “The Vanishing Mediator; or, Max Weber as Storyteller.” In *The Ideologies of Theory*, 309–43. 1988. Reprint, London: Verso, 2008.
- James, William. *The Correspondence of William James*. Edited by Ignas K. Skrupskelis and Elizabeth M. Berkeley. 12 vols. Charlottesville: University Press of Virginia, 1992–2004.
- . *The Principles of Psychology*. 3 vols. *The Works of William James*, edited by Frederick H. Burkhardt et al. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981. 松浦孝作訳（抄訳）『心理學の根本問題』、三笠書房、1940年。
- Jastrow, Joseph. “Studies from the Laboratory of Experimental Psychology of the University of Wisconsin—II.” *American Journal of Psychology* 4, no. 3 (April 1892): 381–428.
- Johnson, Edward Gilpin. “Books of Travel and Description.” *Dial* 12, no. 136 (August 1891): 100–104.
- Jones, Bessie Zaban. “Diary of the Two Bonds, 1846–1849: First Directors of the Harvard College Observatory.” Pts. 1–3. *Harvard Library Bulletin* 15, no. 4 (October 1967): 368–86; 16, no. 1 (January 1968): 49–71; no. 2 (April 1968): 178–207.
- . *Lighthouse of the Skies: The Smithsonian Astrophysical Observatory; Background and History, 1846–1955*. Washington, DC: Smithsonian Institution, 1965.
- Jones, Bessie Zaban, and Lyle Gifford Boyd. *The Harvard College Observatory: The First Four Directorships, 1839–1919*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1971. [J&B]
- Joshi, S. T. *A Dreamer and a Visionary: H. P. Lovecraft in His Time*. Liverpool: Liverpool University Press, 2001.
- Knapp, Krister Dylan. *William James: Psychical Research and the Challenge of Modernity*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2017.
- Koizumi, Kazuo, comp. *Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn*. Tokyo: Hokuseido, 1936.
- , comp. *More Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn, and Letters from M. Toyama, Y. Tsubouchi and Others*. Tokyo: Hokuseido, 1937.
- Kuklick, Bruce. *A History of Philosophy in America, 1720–2000*. Oxford: Clarendon, 2001. 大厩諒＋入江哲朗＋岩下弘史＋岸本智典訳『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』所収、勁草書房、近刊。
- . *The Rise of American Philosophy: Cambridge, Massachusetts, 1860–1930*. New Haven, CT: Yale University Press, 1977.
- Laffaye, Horace A. *Polo in the United States: A History*. Jefferson, NC: McFarland, 2011.

- Lampland, C. O. "On Photographing the Canals of Mars." *Lowell Observatory Bulletin* 1, no. 21 (1905): 136–37.
- Lane, K. Maria D. *Geographies of Mars: Seeing and Knowing the Red Planet*. Chicago: University of Chicago Press, 2011.
- Langley, Samuel P. "The New Astronomy." Pts. 1–4. *Century Magazine* 28, no. 5 (September 1884): 712–26.; no. 6 (October 1884): 922–36; 29, no. 2 (December 1884): 224–41; no. 5 (March 1885): 700–721;
- Lankford, John. *American Astronomy: Community, Careers, and Power, 1859–1940*. Chicago: University of Chicago Press, 1997. [JL]
- , ed. *History of Astronomy: An Encyclopedia*. New York: Garland, 1997. [HAE]
- Laßwitz, Kurd. *Auf zwei Planeten*. 2 vols. Weimar: Verlag von Emil Felber, 1897. 松谷健二訳『両惑星物語』、ハヤカワ・SF・シリーズ、1971年。
- Lears, T. J. Jackson. *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880–1920*. Paperback ed. 1983. Reprint, Chicago: University of Chicago Press, 1994. 大矢健+岡崎清+小林一博訳『近代への反逆——アメリカ文化の変容 1880–1920』、松柏社、2010年。[TJL]
- Lee Han-seop. "Language Barriers in Early Korean-American Contacts: The Case of 1883 Korean Mission to the U.S." Paper presented at Trans-Pacific Relations Conference, Princeton University, Princeton, NJ, September 7, 2006. http://www.princeton.edu/~collcutt/doc/HanSop_English.pdf.
- Lemaître, Georges. "Un univers homogène de masse constante et de rayon croissant, rendant compte de la vitesse radiale des nébuleuses extra-galactiques." *Annales de la Société scientifique de Bruxelles* 47A (1927): 49–59.
- Lenzen, V. F. *Benjamin Peirce and the U.S. Coast Survey*. San Francisco: San Francisco Press, 1968.
- Leonard, Louise. *Percival Lowell: An Afterglow*. Boston: Richard G. Badger, 1921.
- Lévi-Strauss, Claude. "Apprivoiser l'étrangeté." In *L'autre face de la lune: Écrits sur le Japon*, 127–32. Paris: Éditions du Seuil, 2011. 川田順造訳「異様を手なずける」、川田順造訳『月の裏側——日本文化への視覚』所収、中央公論新社、2014年、103–8頁。
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago: University of Chicago Press, 1955. 斎藤光訳『アメリカのアダム——一九世紀における無垢と悲劇と伝統』、研究社、1973年。
- Longworth, Polly. *Austin and Mabel: The Amherst Affair and Love Letters of Austin Dickinson and Mabel Loomis Todd*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1984.
- Lovecraft, H. P. *Collected Essays*. Edited by S. T. Joshi. 5 vols. New York: Hippocampus, 2004–6.
- . "December Skies." In *Collected Essays*, 3:204–8.
- . "No Transit of Mars." In *Collected Essays*, 3:16. 福岡洋一訳「火星に太陽面通過なし」、『定本ラヴクラフト全集』第8巻所収、179頁。
- . *Selected Letters*. Edited by August Derleth et al. 5 vols. Sauk City, WI: Arkham House, 1965–76.
- . "Supernatural Horror in Literature." In *Collected Essays*, 2:82–135. 大瀧啓裕訳「文学における超自然の恐怖」、大瀧啓裕訳『文学における超自然の恐怖』所収、学研プラス、2009年、5–136頁。
- . "The Truth about Mars." In *Collected Essays*, 3:319–20. 小林勇次訳「火星に関する真相」、『定本ラヴクラフト全集』第8巻所収、182頁。
- . "The Whisperer in Darkness." In *Tales*, edited by Peter Straub, 415–80. New York: Library of America, 2005. 大西尹明訳「闇に囁くもの」、大西尹明訳『ラヴクラフト全集1』所収、創元推理文庫、1974年、195–317頁。
- Lowell, A. Lawrence. *Biography of Percival Lowell*. New York: Macmillan, 1935. [ALL]
- . "John Lowell, 1825–1897." In *Later Years of the Saturday Club, 1870–1920*, edited by M. A. DeWolfe Howe, 143–45. Boston: Houghton Mifflin, 1927.
- . "Reminiscences." *American Mathematical Monthly* 32, no. 1 (January 1925): 4–5.
- . "Surfaces of the Second Order, as Treated by Quaternions." *PAmAc* 13 (1878): 222–50.
- Lowell, Delmar R. *The Historic Genealogy of the Lowells of America from 1639 to 1899*. Rutland, VT: Tuttle, 1899.
- Lowell, Francis Cabot, [III]. "Address." In *Exercises at the Seventy-Fifth Anniversary of the Incorporation of the Town of Lowell*, 42–49. Lowell, MA: Courier-Citizen, 1901.
- MacKenzie, Norman, and Jeanne MacKenzie. *The Life of H. G. Wells: The Time Traveller*. Rev. ed. London: Hogarth, 1987. 村松仙太郎訳（1973年の原著初版に基づく）『時の旅人——H・G・ウェルズの生涯』、早川書房、1978年。
- Manara, Alessandro, and Franca Chlistovsky. "Giovanni Virginio Schiaparelli, Percival Lowell scambi epistolari inediti

- (1896–1910).” *Nuncius* 19, no. 1 (2004): 253–96.
- Markley, Robert. *Dying Planet: Mars in Science and the Imagination*. Durham, NC: Duke University Press, 2005. [RM]
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. London: Oxford University Press, 1941. 飯野友幸＋江田孝臣＋大塚寿郎＋高尾直知＋堀内正規訳『アメリカン・ルネサンス——エマソンとホイットマンの時代の芸術と表現』上下巻、上智大学出版、2011年。
- Maunder, E. Walter. “The Canals of Mars.” *Knowledge* 17, no. 108 (November 1894): 249–52.
- . “Progress of Astronomy in 1906.” *Popular Astronomy* 15, no. 1 (January 1907): 1–12.
- McCaughy, Robert A. “The Transformation of American Academic Life: Harvard University, 1821–1892.” *Perspectives in American History* 8 (1974): 239–332.
- McCormick, John. *George Santayana: A Biography*. 1987. Reprint, New Brunswick, NJ: Transaction, 2003.
- McCosh, James. *The New Departure in College Education: Being a Reply to President Eliot’s Defence of It in New York, Feb. 24, 1885*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1885.
- McKim, Richard. “The Life and Times of E. M. Antoniadi, 1870–1944.” Pts. 1–2. *JBAA* 103, no. 4 (August 1993): 164–70; no. 5 (October 1993): 219–27.
- McPherson, James M. *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era*. New York: Oxford University Press, 1988.
- Meadows, A. J. “The New Astronomy.” In *GHA4A*, 59–72.
- Menand, Louis. *The Metaphysical Club: A Story of Ideas in America*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2001. 野口良平＋那須耕介＋石井素子訳『メタフィジカル・クラブ——米国100年の精神史』、みすず書房、2011年。
- Merwin, Henry Childs. “On Being Civilized Too Much.” *Atlantic Monthly* 79, no. 476 (June 1897): 838–46.
- Miles, Henry A. *Lowell, as It Was, and as It Is*. Lowell, MA: Powers and Bagley; N. L. Dayton, 1845.
- Miller, Howard S. *Dollars for Research: Science and Its Patrons in Nineteenth-Century America*. Seattle: University of Washington Press, 1970.
- Miller, Lillian B. *The Lazzaroni: Science and Scientists in Mid-Nineteenth Century America*. Washington, DC: Smithsonian Institution Press, 1972.
- Mori, Arinori. *Education in Japan: A Series of Letters; Addressed by Prominent Americans to Arinori Mori*. New York: D. Appleton, 1873.
- Morison, Samuel Eliot, ed. *The Development of Harvard University: Since the Inauguration of President Eliot, 1869–1929*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1930.
- . *Three Centuries of Harvard, 1636–1936*. 1936. Reprint, Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1964. [SEM]
- Morse, Edward S. *Mars and Its Mystery*. Boston: Little, Brown, 1906.
- Moss, Sidney P. *Poe’s Literary Battles: The Critic in the Context of His Literary Milieu*. Durham, NC: Duke University Press, 1963.
- Moyer, Albert E. *A Scientist’s Voice in American Culture: Simon Newcomb and the Rhetoric of Scientific Method*. Berkeley: University of California Press, 1992.
- Murakata, Akiko. “Selected Letters of Dr. William Sturgis Bigelow.” PhD diss., George Washington University, 1971.
- Musto, David F. “A Survey of the American Observatory Movement, 1800–1850.” *Vistas in Astronomy* 9 (1967): 87–92.
- Newcomb, Simon. “The Optical and Psychological Principles Involved in the Interpretation of the So-Called Canals of Mars.” *Astrophysical Journal* 26, no. 1 (July 1907): 1–17.
- . *The Reminiscences of an Astronomer*. Boston: Houghton, Mifflin, 1903.
- Nicolson, Marjorie. *Science and Imagination*. Ithaca, NY: Great Seal Books, a division of Cornell University Press, 1956.
- Norris, Frank. “Zola as a Romantic Writer.” In *Novels and Essays*, edited by Donald Pizer, 1106–8. New York: Library of America, 1986.
- Novick, Sheldon M. *Honorable Justice: The Life of Oliver Wendell Holmes*. Boston: Little, Brown, 1989.
- Numbers, Ronald L. *Creation by Natural Law: Laplace’s Nebular Hypothesis in American Thought*. Seattle: University of Washington Press, 1977.
- O’Connor, Thomas H. *Lords of the Loom: The Cotton Whigs and the Coming of the Civil War*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1968.

- Offer, John. "Herbert Spencer—a General Introduction." In *Herbert Spencer: Critical Assessments*, edited by John Offer, ix–iv. London: Routledge, 2000.
- Osterbrock, Donald E. "To Climb the Highest Mountain: W. W. Campbell's 1909 Mars Expedition to Mount Whitney." *Journal for the History of Astronomy* 20, no. 2 (June 1989): 77–97.
- Osterbrock, Donald E., Ronald S. Brashear, and Joel A. Gwinn. "Self-Made Cosmologist: The Education of Edwin Hubble." In *Evolution of the Universe of Galaxies: Edwin Hubble Centennial Symposium*, edited by Richard G. Kron, 1–18. San Francisco: Astronomical Society of the Pacific, 1990.
- Ota, Yuzo. *Basil Hall Chamberlain: Portrait of a Japanologist*. Richmond, UK: Japan Library, 1998.
- Palmer, George Herbert, and Ralph Barton Perry. "Philosophy, 1870–1929." In Morison, *Development of Harvard University*, 3–32.
- Parrinder, Patrick. *Science Fiction: Its Criticism and Teaching*. The New Accent Series. 1980. Reprint, London: Routledge, 2003. 大橋洋一＋佐伯泰樹＋池上嘉彦訳『SF——稼動する白昼夢』、勁草書房、1985年。
- Patton, Robert H. *Patriot Pirates: The Privateer War for Freedom and Fortune in the American Revolution*. New York: Pantheon Books, 2008.
- Peirce, Benjamin. "On Perfect Numbers." *Mathematical Diary* 2, no. 13 (March 1832): 267–77.
- [——]. "On the New Planet Neptune." *Astronomische Nachrichten* 25, no. 597 (May 20, 1847): 375–87.
- [——]. "Le Verrier's Planet." *Sidereal Messenger* 1, no. 11 (March 1847): 85–86.
- Peirce, Charles Sanders. "Questions concerning Certain Faculties Claimed for Man." In *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, vol. 1, (1867–1893), edited by Nathan Houser and Christian Kloesel, 11–27. Bloomington: Indiana University Press, 1992. 山下正男訳「直観主義の批判」、上山春平編『世界の名著 48 パース ジェイムズ デュイ』所収、中央公論社、1968年、103–27頁。
- Peirce, James Mills. "The Graduate School." In *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College, 1894–95*, 101–33. Cambridge, MA: Harvard University, 1896.
- Perkins, Bradford. *Prologue to War: England and the United States, 1805–1812*. Berkeley: University of California Press, 1961.
- Pickering, Edward C. *Forty-Ninth Annual Report of the Director of the Astronomical Observatory of Harvard College for the Eleven Months Ending September 30, 1894*. Cambridge, MA: Harvard University, 1894.
- . "The Photometric Catalogues of the Harvard College Observatory." *Astronomische Nachrichten* 135, no. 3229 (May 16, 1894): 217–21.
- Pickering, William H. "A Search for a Planet beyond Neptune." *Annals of the Astronomical Observatory of Harvard College* 61, pt. 2 (1909): 113–62.
- Plotkin, Howard. "Edward Charles Pickering." *Journal for the History of Astronomy* 21, no. 1 (February, 1990): 47–58.
- Poe, Edgar Allan. *Essays and Reviews*. Edited by G. R. Thompson. New York: Library of America, 1984.
- . Review of *A Fable for Critics*, by James Russell Lowell. In *Essays and Reviews*, 814–22.
- . Review of *Poems*, by James Russell Lowell. In *Essays and Reviews*, 809–14.
- Prescott, Samuel C. *When M.I.T. Was "Boston Tech," 1861–1916*. Cambridge, MA: Technology Press, 1954.
- Putnam, William Lowell, et al. *The Explorers of Mars Hill: More Than a Century of History at Lowell Observatory*. Flagstaff, AZ: Lowell Observatory, 2012. [EMH]
- Rafferty, Edward C. *Apostle of Human Progress: Lester Frank Ward and American Political Thought, 1841–1913*. Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2003.
- Ratner-Rosenthal, Jennifer. *American Nietzsche: A History of an Icon and His Ideas*. Chicago: University of Chicago Press, 2012. 岸正樹訳『アメリカのニーチェ——ある偶像をめぐる物語』、法政大学出版局、2019年。
- . *The Ideas That Made America: A Brief History*. New York: Oxford University Press, 2019.
- Reed, Christopher. *Bachelor Japanists: Japanese Aesthetics and Western Masculinities*. New York: Columbia University Press, 2017.
- Richardson, Robert D. *William James: In the Maelstrom of American Modernism*. Boston: Houghton Mifflin, 2006.
- Roberts, Adam. *Science Fiction*. 2nd ed. The New Critical Idiom. London: Routledge, 2006.
- Royce, Josiah. "Herbert Spencer and His Contribution to the Concept of Evolution." *International Quarterly* 9 (March–

- June 1904): 335–65.
- Rudolph, Frederick. *The American College and University: A History*. 1962. Reprint, Athens: University of Georgia Press, 1990. 阿部美哉 + 阿部温子訳『アメリカ大学史』、玉川大学出版部、2003年。
- . *Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study since 1636*. San Francisco: Jossey-Bass, 1977.
- . *Mark Hopkins and the Log: Williams College, 1836–1872*. New Haven, CT: Yale University Press, 1956.
- Sagan, Carl, and Paul Fox. “The Canals of Mars: An Assessment after Mariner 9.” *Icarus* 25, no. 4 (August 1975): 602–12.
- Sankovitch, Nina. *The Lowells of Massachusetts: An American Family*. New York: St. Martin’s, 2017.
- Santayana, George. “The Genteel Tradition in American Philosophy.” *University of California Chronicle* 13, no. 4 (October 1911): 357–80.
- . *The Letters of George Santayana*. Edited by William G. Holzberger. Bk. 1, [1868]–1909. The Works of George Santayana 5. Cambridge, MA: MIT Press, 2001.
- Sargent, Charles Sprague. “Botanical Activities of Percival Lowell.” *Rhodora* 19, no. 218 (February 1917): 21–24.
- Schiaparelli, G. V. “Découvertes nouvelles sur la planète Mars.” *L’astronomie* 1, no. 6 (August 1882): 216–21.
- . “Osservazioni astronomiche e fisiche sull’asse di rotazione e sulla topografia del pianeta Marte.” *Atti della Reale Accademia dei Lincei*, 3rd ser., 2 (May 1878): 1–136.
- Schindler, Kevin. *The Far End of the Journey: Lowell Observatory’s 24-Inch Clark Telescope*. Flagstaff, AZ: Lowell Observatory, 2015.
- Schuster, David G. *Neurasthenic Nation: America’s Search for Health, Happiness, and Comfort, 1869–1920*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 2011.
- Secchi, Angelo. “Spectrum of α Orions.” *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society* 26, no. 5 (March 1866): 214.
- Sedgwick, Ellery. *A History of the “Atlantic Monthly,” 1857–1909: Yankee Humanism at High Tide and Ebb*. 1994. Reprint, Amherst: University of Massachusetts Press, 2009.
- See, T. J. J. “The Red Planet Mars.” *Dial* 21, no. 242 (July 16, 1896): 42–43.
- Sheehan, William. *The Planet Mars: A History of Observation and Discovery*. Tucson: University of Arizona Press, 1996.
- . *Planets and Perception: Telescopic Views and Interpretations, 1609–1909*. Tucson: University of Arizona Press, 1988.
- Shi, David E. *Facing Facts: Realism in American Thought and Culture, 1850–1920*. New York: Oxford University Press, 1995.
- Shklovskii, I. S., and Carl Sagan. *Intelligent Life in the Universe*. San Francisco: Holden-Day, 1966.
- Short, Thomas. “Sham Scholarship.” *Modern Age* 44, no. 4 (Fall 2002): 381–87.
- Slipher, V. M. “The Radial Velocity of the Andromeda Nebula.” *Lowell Observatory Bulletin* 2, no. 8 (1913): 56–57.
- . “Spectrographic Observations of Nebulae.” *Popular Astronomy* 23, no. 1 (January 1915): 21–24.
- . “The Spectrum of Mars.” *Astrophysical Journal* 28, no. 5 (December 1908): 397–404.
- Sloan, Cliff, and David McKean. *The Great Decision: Jefferson, Adams, Marshall, and the Battle for the Supreme Court*. New York: PublicAffairs, 2009.
- Slosson, Edwin E. *Great American Universities*. New York: Macmillan, 1910.
- Smith, Harriette Knight. *The History of the Lowell Institute*. Boston: Lamson, Wolfe, 1898.
- Sobel, Dava. *The Glass Universe: How the Ladies of the Harvard Observatory Took the Measure of the Stars*. 2016. Reprint, New York: Penguin Books, 2017.
- Solomon, Barbara Miller. *Ancestors and Immigrants: A Changing New England Tradition*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1956.
- [Spencer, Herbert]. “Progress: Its Law and Cause.” *Westminster and Foreign Quarterly Review* 67, no. 132 (April 1857): 445–85.
- [———]. “Recent Astronomy, and the Nebular Hypothesis.” *Westminster and Foreign Quarterly Review* 70, no. 137 (July 1858): 185–225.
- Spiller, Robert E., Willard Thorp, Thomas H. Johnson, Henry Seidel Canby, Richard M. Ludwig, and William M. Gibson, eds. *Literary History of the United States: History*. 4th ed. New York: Macmillan, 1974.
- Story, Ronald. *The Forging of an Aristocracy: Harvard and the Boston Upper Class, 1800–1870*. Middletown, CT: Wesleyan University Press, 1980.
- Stover, Leon, ed. *The War of the Worlds: A Critical Text of the 1898 London First Edition, with an Introduction, Illustrations and*

- Appendices*. By H. G. Wells. *The Annotated H. G. Wells* 4. 2001. Reprint, Jefferson, NC: McFarland, 2012.
- Strauss, David. *Percival Lowell: The Culture and Science of a Boston Brahmin*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2001. 井上正男監修／大西直樹＋佐久間みかよ＋荒木純子訳『パーシヴァル・ローエル——ボストン・ブラーミンの文化と科学』、彩流社、2007年。[DS]
- Struik, Dirk J. *Yankee Science in the Making*. Boston: Little, Brown, 1948.
- Suvin, Darko. *Metamorphoses of Science Fiction: On the Poetics and History of a Literary Genre*. Edited by Gerry Canavan. Oxford: Peter Lang, 2016. 大橋洋一訳『SFの変容——ある文学ジャンルの詩学と歴史』、国文社、1991年。
- Taliaferro, John. *Tarzan Forever: The Life of Edgar Rice Burroughs, Creator of Tarzan*. New York: Scribner, 1999.
- Taylor, Alan. *The Civil War of 1812: American Citizens, British Subjects, Irish Rebels, and Indian Allies*. 2010. Reprint, New York: Vintage Books, 2011.
- Taylor, Eugene. *William James on Exceptional Mental States: The 1896 Lowell Lectures*. New York: Charles Scribner's Sons, 1983.
- Tenn, Joseph S. "Lowell Observatory Enters the Twentieth Century—in the 1950s." *Journal of Astronomical History and Heritage* 10, no. 1 (March, 2007): 65–71.
- Thernstrom, Stephan. *The Other Bostonians: Poverty and Progress in the American Metropolis, 1880–1970*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1973.
- Thornton, Tamara Plakins. *Nathaniel Bowditch and the Power of Numbers: How a Nineteenth-Century Man of Business, Science, and the Sea Changed American Life*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2016.
- Todd, David P. "Professor Todd's Own Story of the Mars Expedition: First Article Published from the Pen of the Leader of the Party of Observation." *Cosmopolitan Magazine* 44, no. 4 (March 1908): 343–51.
- Todd, Mabel Loomis. "The Ascent of Fuji-San." *Nation* 45, no. 1163 (October 13, 1887): 291–93.
- . *Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Eclipse Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-Yacht Coronet, to Observe the Sun's Total Obscuration, 9th August, 1896*. Boston: Houghton, Mifflin, 1899.
- Todd, Mabel Loomis, and David P. Todd. "An Ascent of Fuji the Peerless." *Century Magazine* 44, no. 4 (August 1892): 483–94. 山本秀峰訳「比類なきフジの登山」、山本秀峰編訳『富士山に登った外国人——幕末・明治の山旅』所収、露蘭堂、2012年、107–46頁。
- Tucker, Barbara M. *Samuel Slater and the Origins of the American Textile Industry, 1790–1860*. Ithaca, NY: Cornell University Press, 1984.
- Tucker, Jennifer. *Nature Exposed: Photography as Eyewitness in Victorian Science*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2005.
- Van Helden, Albert. "Building Large Telescopes, 1900–1950." In *GHA4A*, 134–52.
- . "Telescope Building, 1850–1900." In *GHA4A*, 40–58.
- Veysey, Laurence R. *The Emergence of the American University*. Chicago: University of Chicago Press, 1965.
- Wallace, Alfred Russel. *Is Mars Habitable? A Critical Examination of Professor Percival Lowell's Book "Mars and Its Canals," with an Alternative Explanation*. London: Macmillan, 1907.
- Ward, Lester F. "Mars and Its Lesson." *Brown Alumni Monthly* 7, no. 8 (March 1907): 159–65.
- Wayman, Dorothy G. *Edward Sylvester Morse: A Biography*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1942. 蛭川親正訳『エドワード・シルベスター・モース』上下巻、中央公論美術出版、1976年。
- Webb, George Ernest. *Tree Rings and Telescopes: The Scientific Career of A. E. Douglass*. Tucson: University of Arizona Press, 1983. [GEW]
- Weeks, Edward. *The Lowells and Their Institute*. Boston: Little, Brown, 1966.
- Wells, H. G. *The Correspondence of H. G. Wells*. Edited by David C. Smith. 4 vols. London: Pickering and Chatto, 1998.
- . *The Future in America: A Search After Realities*. New York: Harper and Brothers, 1906.
- . "Popularising Science." *Nature* 50, no. 1291 (July 26, 1894): 300–301.
- . "The Rediscovery of the Unique." In *H. G. Wells: Early Writings in Science and Science Fiction*, edited by Robert M. Philmus and David Y. Hughes, 22–31. Berkeley: University of California Press, 1975.
- . "The Things That Live on Mars." *Cosmopolitan Magazine* 44, no. 4 (March 1908): 335–42.
- . *The War of the Worlds*. London: William Heinemann, 1898. 中村融訳『宇宙戦争』、創元SF文庫、2005年（序論

註3の補足も参照のこと)。[WW]

- Welther, Barbara L. "The World's Largest Telescopes, 1850–1950." In *GHA4A*, Ai–Avi.
- Weston, Walter. *Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*. London: John Murray, 1896. 青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』、岩波文庫、1997年。
- Wheelwright, John T. Preface to *Harvard College, the Class of 1876: Seventh Report of the Secretary Covering the Class History for Twenty-Five Years to MDCCCXI*, vii–xiii. Boston: Merrymount, 1901.
- Whittemore, J. K. "James Mills Peirce." *Science* 24, no. 602 (July 13, 1906): 40–48.
- Wicks, Mark. *To Mars via the Moon: An Astronomical Story*. London: Seeley, 1911.
- Wiebe, Robert H. *The Search for Order, 1877–1920*. New York: Hill and Wang, 1967.
- Wiegand, Wayne A. *Patrician in the Progressive Era: A Biography of George von Lengerke Meyer*. New York: Garland, 1988.
- Willis, Martin. *Vision, Science and Literature, 1870–1920: Ocular Horizons*. London: Pickering and Chatto, 2011.
- Wilson, Edmund. *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*. 1962. Repr., New York: W. W. Norton, 1994. 中村紘一訳『愛国の血糊——南北戦争の記録とアメリカの精神』、研究社、1998年。
- Wraight, A. Joseph, and Elliot B. Roberts. *The Coast and Geodetic Survey, 1807–1957: 150 Years of History*. Washington, DC: Government Printing Office, 1957.
- Wright, Helen. *Explorer of the Universe: A Biography of George Ellery Hale*. 1966. Reprint, New York: AIP Press, 1994.
- . *James Lick's Monument: The Saga of Captain Richard Floyd and the Building of the Lick Observatory*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- Yeomans, Donald K. *Comets: A Chronological History of Observation, Science, Myth, and Folklore*. New York: John Wiley, 1991.
- Yeomans, Henry Aaron. *Abbott Lawrence Lowell, 1856–1943*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1948.

邦語文献 (50音順)

- 阿川尚之『憲法で読むアメリカ史 (全)』、ちくま学芸文庫、2013年。
- 石川千代松「序——モース先生」、E・S・モース著／石川欣一訳『日本その日その日』第1巻所収、東洋文庫、1970年、3–13頁。
- 石田正人「プラグマティズムの暗い背景——C・S・パースの場合」、『現代思想』第43巻第11号、青土社、2015年7月、45–53頁。
- 伊勢田哲治『科学哲学の源流をたどる——研究伝統の百年史』、ミネルヴァ書房、2018年。
- 磯野直秀『モースその日その日——ある御雇教師と近代日本』、有隣堂、1987年。
- 井田茂『系外惑星と太陽系』、岩波新書、2017年。
- 伊藤正己『言論・出版の自由——その制約と違憲審査の基準』、岩波書店、1959年。
- 犬塚孝明『森有礼』、吉川弘文館、1986年。
- 井上順孝『教派神道の形成』、弘文堂、1991年。
- 伊吹浄編訳『日本と朝鮮の暗殺——ローエル・レポート』、公論社、1979年。
- 今井一良『オーズボン紀行——侍の娘と結ばれた英人一家を追って』、北國新聞社、1994年。
- 「文明開化と外国人」、『実録・石川県史』編集委員会編『実録石川県史 1868–1989——激動の明治・大正・昭和全記録』所収、能登印刷・出版部、1991年、20–21頁。
- 入江哲朗「アメリカ哲学史にとって1890年代とは何か——ジョン・ハイナムとトマス・L・ハスケルの1890年代論を再評価する」、学会発表、アメリカ哲学フォーラム第6回大会、於京都大学、2019年6月23日。
- 「火星の旅人——パシヴァル・ローエルと世紀転換期のニューイングランド」、修士論文、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論分野、2013年度。
- 「ジョージ・サンタヤナとアメリカ文化——あるいは「お上品な伝統」と反知性主義」、『ユリイカ』第49巻第1号、青土社、2017年1月、172–82頁。
- 「訳者解説 アメリカ思想史の一分野としてのアメリカ哲学史」、ククリック『アメリカ哲学史』所収、頁数未定。
- 潮木守一『アメリカの大学』、講談社学術文庫、1993年。
- 内野儀「科学／ガリレイ／革命——ブレヒト『ガリレイの生涯』をめぐって」、『現代思想』第37巻第12号、青土社、

- 2009年9月、177-91頁。
- 宇野邦一『ハーンと八雲』、角川春樹事務所、2009年。
- 梅溪昇『お雇い外国人の研究』上下巻、青史出版、2010年。
- 江藤淳『アメリカと私』、講談社文芸文庫、2007年。
- 大久保利謙監修／上沼八郎＋犬塚孝明編『新修 森有禮全集』全5巻＋別巻4巻、文泉堂書店、1997-2015年。
- 大塚英志『「捨て子」たちの民俗学——小泉八雲と柳田國男』、角川選書、2006年。
- 大西直樹『ピルグリム・ファーザーズという神話』、講談社選書メチエ、1998年。
- 岡本拓司『科学と社会——戦前期日本における国家・学問・戦争の諸相』、サイエンス社、2014年。
- 「ハーヴァード大学物理学科における理論物理学の創始——実験家の役割を中心に」、『科学技術史』第1号、日本科学技術史学会、1997年12月、1-44頁。
- 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』、名古屋大学出版会、2011年。
- 糟谷憲一「朝鮮の開国と開化」、李成市＋宮嶋博史＋糟谷憲一編『世界歴史大系 朝鮮史2——近現代』所収、山川出版社、2017年、3-76頁。
- 紙谷雅子「違憲立法審査制の成立」、樋口ほか『アメリカ法判例百選』所収、4-5頁。
- 亀井俊介監修／平石貴樹編『アメリカ——文学史・文化史の展望』、松柏社、2005年。
- 川島浩平『都市コミュニティと階級・エスニシティ——ボストン・バックベイ地区の形成と変容、1850-1940』、御茶の水書房、2002年。
- 川澄哲夫編著『増補改訂版 中浜万次郎集成』、小学館、2001年。
- 川本徹『荒野のオデュッセイア——西部劇映画論』、みすず書房、2014年。
- 北田暁大「社会学的忘却の起源——社会学的プラグマティズムの帰結」、『現代思想』第43巻第11号、青土社、2015年7月、156-87頁。
- 金学俊『西洋人の見た朝鮮——李朝末期の政治・社会・風俗』金容権訳、山川出版社、2014年。
- 木村駿吉「在米理學士木村駿吉氏ノ書狀」、『學士會月報』第82号、學士會、1894年12月、22-29頁。
- 楠家重敏『ネズミはまだ生きている——チェンバレンの伝記』、雄松堂出版、1986年。
- 『慶応義塾百年史』上中下巻、慶応義塾、1958-68年。
- 小泉凡「パーシヴァル・ローエルのラフカディオ・ハーン宛書簡に関する考察および邦訳」、『パーシヴァル・ローエル 著作および書簡集 別冊日本語付録』所収、エディション・シナプス、2006年、1-17頁。
- 国立天文台編『理科年表』平成31年版、第92冊、丸善出版、2018年。
- 小暮智一『現代天文学史——天体物理学の源流と開拓者たち』、京都大学学術出版会、2015年。
- 駒村圭吾「明白かつ現在の危険の原則」、樋口ほか『アメリカ法判例百選』所収、62-63頁。
- 坂本泰宏＋田中純＋竹峰義和編『イメージ学の現在——ヴァールブルクから神経系イメージ学へ』所収、東京大学出版会、2019年。
- 佐合紘一『ニューイングランド繊維株式会社とボストン金融機関』、泉文堂、2003年。
- 佐々木晶「火星探査」、宮本英昭＋橘省吾＋平田成＋杉田精司編『惑星地質学』所収、東京大学出版会、2008年、133-40頁。
- 佐藤利男『星墓群像——近代日本天文学史の周辺』、星の手帖社、1993年。
- 菅原壽清『「オカルト・ジャパン」とパーシヴァル・ローエルの憑霊文化』、ローエル『オカルト・ジャパン』所収、263-382頁。
- 鈴木一郎『ホラティウス——人と作品』、玉川大学出版部、2001年。
- 鈴木翔『教室内カースト』、光文社新書、2012年。
- 図説穴水町の歴史編纂委員会編『図説 穴水町の歴史』、穴水町役場、2004年。
- 舌津智之「マシーセンの万華鏡——アメリカ文学史の見直し論争」、亀井＋平石『アメリカ』所収、115-40頁。
- 高田美一「宮岡恒次郎とパーシヴァル・ロウエル、エドワード・モース、アーネスト・フェノロサ——明治東西文化交流の一面」、『立正大学文学部論叢』第97号、立正大学文学部、1993年3月、71-91頁。
- 立川明「19世紀アメリカの大学と科学——ニュー・イングランドのディレンマとロウレンス科学学校の開設」、『大学史研究』第2号、大学史研究会、1981年3月、22-33頁。
- 巽孝之『アメリカ文学史のキーワード』、講談社現代新書、2000年。

- 田保橋潔『近代日鮮関係の研究』上下巻、朝鮮總督府中樞院、1940年。
- 中央大学百年史編集委員会専門委員会編『中央大学百年史 通史編』上中下巻、中央大学、2001-3年。
- 長尾伸一『複数世界の思想史』、名古屋大学出版会、2015年。
- 中野博文『ヘンリ・アダムズとその時代——世界大戦の危機とたたかった人々の絆』、彩流社、2016年。
- 中村融「ふたつの世界の戦い——『宇宙戦争』をめぐる」、ウェルズ『宇宙戦争』所収、307-18頁。
- 中村善雄「ローウェル、フィールズ、ハウエルズの編集方針——『アトランティック・マンスリー』誌に見る知的コミュニティの形成」、倉橋洋子+高尾直知+竹野富美子+城戸光世編『繋がり詩学——近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』所収、彩流社、2019年、309-28頁。
- 『日本中學校五十年史』、日本中學校、1937年。
- 『日本鐵道史』上中下巻、鐵道省、1921年。
- パース、ベンジャミン「線型結合代数」清水達雄訳、全3回、『数学セミナー』第23巻第5号（1984年5月）、80-85頁；同巻第6号（1984年6月）、75-81頁；同巻第7号（1984年7月）、101-9頁。
- ハーン、ラフカディオ『ラフカディオ・ハーン著作集』西脇順三郎+森亮監修、全15巻、恒文社、1980-88年。
- 長谷川精一『森有礼における国民的主体の創出』、思文閣出版、2007年。
- 濱中春「視覚化と認識のあいだ——リヒテンベルク図形と科学のイメージ研究の射程」、坂本+田中+竹峰『イメージ学の現在』所収、325-42頁。
- 板東浩司『詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝』、英潮社、1998年。
- 樋口範雄+柿嶋美子+浅香吉幹+岩田太編『アメリカ法判例百選』、有斐閣、2012年。
- 平川祐弘監修『小泉八雲事典』、恒文社、2000年。
- ブレーデキャンプ、ホルスト「イメージと自然との共生——ネオ・マニエリスムにむけて考える」清水一浩訳、坂本+田中+竹峰『イメージ学の現在』所収、367-401頁。
- ホール、デイヴィッド・D『改革をめざすピューリタンたち——ニューイングランドにおけるピューリタニズムと公的生活の変貌』大西直樹訳、彩流社、2012年。
- 牧原憲夫『客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識』、吉川弘文館、1998年。
- 「万歳の誕生」、『思想』第845号、岩波書店、1994年11月、118-36頁。
- 増井志津代『植民地時代アメリカの宗教思想——ピューリタニズムと大西洋世界』、上智大学出版、2006年。
- 益田すみ子「木村駿吉の四元数理解と「万国四元法協会」の提案」、『科学史研究』第3期第57巻第287号、日本科学史学会、2018年10月、171-75頁。
- 宮崎正明『知られざるジャパノロジスト——ローエルの生涯』、丸善ライブラリー、1995年。
- 宮澤康人「ハーバード学則改正（1825）とイェールレポート（1828）——アメリカにおける選択科目制度をめぐる論争の端緒」、『東京大学教育学部紀要』第16巻、東京大学教育学部、1977年3月、1-22頁。
- 村形明子「フェノロサとハーンの新出匿名書評」、『アーネスト・F・フェノロサ文書集成——翻刻・翻訳と研究』下巻所収、京都大学学術出版会、2001年、178-98頁。
- 村山淳彦「米文学史の戦後構想からバーコヴィッチまで——アメリカ文化史とアメリカ文学史（マシーセン以後）」、亀井+平石『アメリカ』所収、81-113頁。
- 森瀬繚「訳者解説」、H・P・ラヴクラフト著/森瀬繚訳『新訳クトゥルー神話コレクション1 クトゥルーの呼び声』所収、星海社 FICTIONS、2017年、441-69頁。
- 森村進「訳者解説 なぜ今スペンサーを読むのか」、森村進編訳『ハーバート・スペンサー コレクション』所収、ちくま学芸文庫、2017年、427-59頁。
- 森本あんり『アメリカ・キリスト教史——理念によって建てられた国の軌跡』、新教出版社、2006年。
- 『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』、新潮選書、2015年。
- 山口静一『フェノロサ——日本文化の宣揚に捧げた一生』上下巻、三省堂、1982年。
- 『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』、宮帯出版社、2012年。
- 山下太郎「山下太郎のラテン語入門」、<https://www.kitashirakawa.jp/taro/>。
- 横尾広光『地球外文明の思想史』、恒星社厚生閣、1991年。
- 横尾広光+平井正則「日本語・ビルマ語比較論にみるパーシヴァル・ローウェルの方法論」、『杏林大学研究報告 教養部門』第18巻、杏林大学、2001年3月、97-103頁。
- ラヴクラフト、H・P『定本ラヴクラフト全集』矢野浩三郎監訳、全10巻、国書刊行会、1984-86年。

李漢燮「朝鮮の遣米使節団における通訳の問題について——1883年の遣米使節団の例を中心に」、http://www.princeton.edu/~colcutt/doc/HanSop_Japanese.pdf。

レーニン、ウラジーミル『レーニン全集』ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編訳、全47巻＋別巻3巻、大月書店、1953-69年。

渡辺喜七『アメリカの工業化と経営理念』、日本経済評論社、2000年。